

目次

○巻頭言	後藤 正治	1
○論文（1） 観光分野		
イタリア・アグリツーリズムの現状について	小磯 学	2
アグリツーリズム事例報告～イル・バスティオーネ	高根沢 均	9
アグリツーリズムに関する日本語・外国語文献	小磯 学、蝦名 大助、高根沢 均	13
『ツーリズム研究年報』所収論文・解説と翻訳 「自己と他者－旅行者、民族誌家、ツーリスト」 ヴァ ジリキ・ガラニ＝ムタフィ著 について	伊多波 宗周	18
ツーリズムにおける哲学的諸問題所収論文・解説と翻訳 「ツーリズムとは何か？諸定義、理論的諸段階、諸原理」サンパウロ大学講師 Alexandre Panosso Netto 著について	原 一樹	38
「ツーリズムの終焉？ノマドロロジーとモビリティ・パラダイム」Sunderland 大学教授 Kevin Hannam 著について	原 一樹	51
The Overseas Chinese and their Role on Creating a Destination Image <i>Nankin-machi</i> (Kobe Chinatown Shopping District), Kobe, Japan	小槻 文裕、小磯 学、蝦名 大助、高根沢 均	61
○論文（2） 一般		
Rethinking Business Risk - How should we manage Globalizing Risks?	澤山 明宏	72
中国の「ネットによる世論監督」についての分析－「ダモクレスの剣」になるのだろうか？	戴 智軻	82
交通・通信環境発展史に向けての試論	原 一樹	95
現場力と日本企業の競争力優位	内藤 敏樹	109
ホテル産業の可能性 学生のキャリア指導に向けたホテル産業の基本理解について	蒲池 由雄 澤山 明宏	114
エッセイ ホスピタリティの解釈	蒲池 由雄	126

巻頭言

本大学紀要の第2号をお届けする。当初は新しく知名度の低い大学の、しかも紙ベースでなくウェブ上で公開するだけの刊行物など発行する方の自己満足に過ぎないのではないかと危惧していたが、検索エンジンのおかげであるかどうかかわからないが幸いにしてかなりの方に見て頂けたようである。誠に恭悦至極、ただし少なからぬ閲覧者がお出でになるということは書く方もそれなりの覚悟が必要であると自戒しなければならないであろう。

さて、今回から多少構成を変えている。第1号が研究論文的なもののみにより編成されていたことに比し、授業の実践においてなされているさまざまな実験・工夫から得られた発見を取りまとめたレポートを本号から新たに付け加えることとした。本来はFD活動の延長などとして別途まとめることが妥当であるかとは思われるが、なにせ世帯の小さな学校である故相乗りさせて頂いたわけで、大方のご寛容を願っておく次第である。

さて本学は「観光」を標榜する教育機関であるが、自分のように必ずしもその分野の専門でなかった人間からするとその拡がり、というか関連・接触領域が多岐にわたっていることに今更ながら驚く。観光は単に産業分類だけではなく、人々の連続した生活行為の一断面であり、従ってその分析は「学際的」にならざるを得ないことに改めて想いを致しているところである。本紀要に掲載されている諸論文が直接「観光」に連結しているように見えないものが少なからずあることへの言い訳としておく。

神戸夙川学院大学 学長 後藤 正治

イタリア・アグリトゥーリズムの現状について

神戸夙川学院大学観光文化学部准教授 小磯 学

【目次】

1. はじめに
2. イタリアのアグリトゥーリズム
3. スローフード運動との関連
4. 粉川妙さんにお聞きして
 - 4.1 宿泊場所としての農家
 - 4.2 成功の陰で
 - 4.3 イタリア人の田舎への意識の変化
 - 4.4 イタリア人のバカンス気質

1. はじめに

その固有の農村滞在型余暇活動ゆえに、アグリトゥーリズム（Agriturismo アグリトゥーリズム、アグリツーリズム）と現地語表記のままで世界的にも知られることの多いイタリアにおける観光のひとつのスタイルが、イタリア国内にとどまらず世界中の人々の関心を集めている。この新たな観光の現状の一端について概観し、日本及びその他の地域での観光開発を考える上での比較データとしてまとめておきたい。

日本においても近年、農村漁村の民間家屋での滞在型・体験型観光のひとつとして「民泊」の需要が増え、中学や高校の修学旅行の訪問先として選ばれるなど村の生活に対する価値観の変化が起きている。こうした動きは多少なりとも以前から実践されていたとはいえ、観光の新たな可能性として注目を浴びるようになった背景には、ヨーロッパを発祥地とする「アグリツーリズム」全般の台頭をあげることができるであろう。農場で休暇を過ごす観光のあり方には、広義にはカントリー

ツーリズムやルーラルツーリズム（とくにイギリス）、グリーンツーリズム（とくに日本の農林水産省）、エコツーリズム、あるいはオルタナティブツーリズムやサステイナブルツーリズムなどとも類似性ないし関連性をもつ（向山 2009：153）。このことは、これまでのマスツーリズムとは異なる旅行者の興味の対象の多様化を示すものでもあり、日本では、1990年代半ば頃から紹介がされ始めてきた。

以下では、こうした現状の中でのイタリアのアグリトゥーリズムを概観する。

2. イタリアのアグリトゥーリズム

よく知られるようにイタリアは世界的な観光立国であり、世界最多となる45件の世界遺産を擁し、豊富な歴史的建造物や、地中海に面した長い海岸線や北部のアルプス山脈、風光明媚な田園、そして魅力的な食文化に恵まれている。日本人にとってはヨーロッパの中で最も人気のある旅行先とされ、大学生の卒業旅行先として2位のフランスと3位の韓国を抜いて5年連続1位というデータもある（News2u.net 2010.12.16）。

イタリアの面積はおよそ30万km²と本州と北海道を合わせたほどの広さで、人口はおよそ6600万人、人口密度は193人/km²である。日本と較べると（面積38万km²、人口1.28億人、人口密度339人/km²。上述の数値は両国とも2010年）、ゆったりとした環境にあるといえる。またイタリア半島部には標高2900mを超えるコルノ・グランデ山を擁するアペニン山脈が南北に連なっているとはいえ、国土の約48%が農地という農業国でもあり（篠 2003：3）、わずか14%の日本とはこの

点においても差が大きい。

このようなイタリアで、現在世界的にも関心を集めているアグリトゥーリズムは、すでに 1960 年代半ば以降に具体化し、中西部のトスカーナ州の農業経営者シモーネ・ヴェッルーティ・ザーティの主宰による「アグリトゥーリスト協会」の設立が端緒となっている。1973 年にはイタリア北端のトレンティーノ・アルトアディジェ州で初めての地方レベルでの条例が、さらに 1985 年には国レベルでの法律が制定され、法的な裏づけによる定義や活動内容が整備されてきた。これにより、宿泊やレクリエーション施設の増改築を行う際には環境と景観の保全に十分に配慮し、関係当局の指導を受ける必要があることなどが義務づけられることとなった。また建物の修復には各々の郷土の伝統的な様式を踏襲し、建築資材もできる限りリサイクルする。たとえ新しい材料を使う場合にも、素材や形を古いものと同様にすることも規定されている。当然これらを実施するには新種の材料と較べて費用が 3 倍かかり、農家の負担も大きくなる（篠 2003 : 3）。しかし行政がここまで介入し指導をすることを可能にしているのは、アグリトゥーリズムへの農家の人々の十分な理解と、これを支えていこうとする社会的な覚悟が前提となっている事実であろう。風光明媚な田園の農家にじっくりと滞在し、家主と語り合いながら地元の料理を頂く贅沢な旅を提供するアグリトゥーリズムは、日本でも近年に専門家や多様な立場の人々によって盛んに紹介され（秋山 2006 ; 植田 2005、恋沼 2007 ; 粉川 2008 ; 千厩 1996 ; 篠 1998 ; 篠 2003 ; 靄 2010）、インターネット上で検索すると日本語でも数万点ヒットするなど情報があふれている（粉川 ブログ「ウンブリアの食卓から」など参照）。

以下は、こうした法・条例に基づくアグリトゥーリズムの定義とその活動内容に関する規定の一部である。

定義：

- ・ 農業経営者（個人または会社組織）が、土地の耕作や造林、畜産などの自己の農業の使用を通じて、顧客に提供するホスピタリティーの活動。
- ・ あくまでも農業による所得が主体でなければならず、アグリトゥーリズムによる収入は全所得の 50%を超えてならない。基本的には、おおむね活動の 70%以上を農業に従事する（これには既存のホテルやレストランとの役割の違いを明確にし、差別化を図る目的もある）。
- ・ 農業経営者やその家族・親類、その他農業従業者と見なされる、フルタイムまたはパートタイムの従業員がその活動に従事すること。

活動内容：

- ・ 農家を初め宿舍やキャンプ用地での宿泊。
- ・ 宿泊客に提供する料理の食材は、運営する農家自家製の製品またはその農家が所在する指定地域内で生産されたもの、または国の「伝統的食料品リスト」中の製品であること。いわば地産地消の徹底といえる。とくにワインであればその醸造方法などの厳密な規定や生産地に基づく格づけを示す DOCG（統制保証原産地呼称）や DOC（統制原産地呼称）、DOP（保護原産地呼称）、あるいは IGP（保護地理表示）や IGT（地域特性表示）の対象品であること。
- ・ 農家自家製品の試食や自家製ワインの試飲。
- ・ 農業経営者が所有する耕作地以外でのレクリエーション活動、文化的・教育活動、スポーツ及びハイキングなどの実施。
- ・ 上記の諸活動は、基本的には農家の敷地ないし建物内で行われる。

（日本貿易振興機構農林水産部 2009 : 74-75、篠 2003 : 3-4）

イタリア国内のアグリトゥーリズムの活動に従事する農家の数は 2006 年時に 16,765 軒を数え、このうち 13,854 軒（約 83%）が宿泊施設を併設し、7,898 軒（47%）が食事の提供、9,643 軒（58%）

がレクリエーション（乗馬、水泳、サイクリング、テニスなど）や文化・教育活動を行っているという。現在ではイタリア各地にこの活動が広がっているが、全体のおよそ4分の1がその発祥の地でもあるトスカーナ州に集中しているのが特徴である。全体の総売上高は約100万ユーロ（1.2億円）で、これは単純計算すると1件あたり710万円の売上を計上していることになる。

実はアグリトゥーリズムの活動が始まった当初は、農業の急激な衰退が見られた時期でもあったという。そこで、農家の建物を宿泊設備として改修し田舎の素朴でシンプルなサービスでもてなすことが、それまでにない余暇活動のスタイルとして注目された。かつては丘陵部や山間地域の小規模農家が大多数を占めたが、徐々に平野部の大規模農家にも広まるとともに活動は全国レベルとなっていく。その結果、衰退傾向にあった農業そのものを維持し守ること、そして各々の地方の特産品を生かすことが、必然的に地域の景観保持を促すという発想へと実を結んでいった。

また農家の一部を宿泊施設として開放し田舎に宿泊するということは、当然ながら農業経営者にとって新たな観光形態を模索することを意味した。宿泊については朝食付きの簡便な宿泊を提供するベッド&ブレックファースト、家族経営の小規模なチャーム・ホテル（ベッド&ブレックファーストとホテルの中間的な形態）、あるいはバカンス時のみ長期的に家屋を貸し出すシステムなど経営者の都合にもしたがって多様化が進んだ。今日ではより一層の心地よさの提供とともに、とくに子供たちを対象とするプログラムとして農業の多様な側面やワインを始め蜂蜜やチーズ、サラミなどの食品製造過程を体験できる「教育農園」なども実施されている。

アグリトゥーリズムを訪れる利用客のニーズを振り返ってみても、当初は地方の歴史や伝統に興味を抱く人々が多かった。しかし最近では自然と

の触れ合いや静寂さ、郷土料理、そして比較的安価な料金を求める人々が主流となっている（日本貿易振興機構農林水産部 2009：75－76）。有機農業はこうした世代とも連携していくことが予想され、ローカルな歴史文化の保全と同時に自然保護、すなわち歴史的文化遺産と自然遺産との保全に大きく貢献することにもなる。

3. スローフード運動との関連

アグリトゥーリズムは、イタリアを発祥地とするスローフード運動とも密接な関わりをもっている。その土地固有の伝統的な食文化や食材を見直すスローフード運動は、ローマのスペイン広場近くに1980年代半ばに開店したマクドナルド・ハンバーガー店への反感に端を発するという。すなわち、1986年に北西部ピエモンテ州のブラで食文化誌『ゴーラ』の編集者カルロ・ペトリーニが、イタリア余暇・文化協会（ARCI＝アルチ）の一部門として「アルチ・ゴーラ」と呼んだ美食の会を結成し、海外からのファーストフードの流入に対抗する文化復興運動の要として位置づけたのである。

早くも1989年にはパリで国際スローフード協会設立大会が開催されてスローフード宣言がなされ、国際運動に発展した。さらに1996年にはスローフード法令が制定され、次のような活動における3つの指針が示されている。

- 守る：消えてゆく恐れのある伝統的な食材や料理、質のよい食品、ワインを守る。
- 教える：子供たちを含め、消費者に味の教育を進める。
- 支える：質のよい素材を提供する小生産者を守る。

美食なるものを支える伝統の食事や素朴でしつかりとした食材、有機農業など、健康によいものへの関心がさらに高まり、現在では世界に日本を

含め 83,000 人の会員を擁するという（「スローフード」Wikipedia）。スローフード、そしてそこから派生したスローライフの理念は、単なる食の域を超えて生活全般に及び、農業の活性化と同時にさらには自然環境の保全や文化遺産の保護の貢献へと広がる農家と観光が結びついたアグリツーリズムとも合致している。

1999 年にはさらに「チッタスロー」（Cittaslow. イタリア語と英語を合わせた造語で、字義的には「ゆっくりとした街（の暮らし）」）運動すなわち「伝統文化と伝統食に光を当て、地元産品を奨励し、生活の質を求めて、ゆっくりと暮らす」運動として結実し、街にとどまらず地域や自然の中でゆったりと暮らす提唱がされている。有機農法にこだわった食材を提供する農家（有機アグリツーリズム＝アグリツーリズム・ビオロジコ）は現在も 870 軒（5%）とあまり伸びが見られないのが実情であるが、チッタスロー運動に基づいて有機農業が促進されつつあるのも事実で、学校給食での有機栽培食材の増加、あるいは前述の「教育農園」を経験した子供たちがリピーターとなって家族らと再び訪れる場合が多くなっているという。これらの結果、有機アグリツーリズムの需要もまた大きく伸展することが期待されている。

こうしたスローフードやチッタスローの運動は今日ではヨーロッパ各地、そしてアメリカや日本にも波及して市町村単位で海外の団体と交流を深めているようである。とくに日本では（本来の趣旨がマスツーリズムと相反しているのであるが）、農家での食事を日程の一部に組み込んだパッケージ（例えば、ユーラシア旅行社）なども増えている。

4. 粉川妙さんにお聞きして

イタリア中部のウンブリア州スポレートに在住し、スローフード協会の『イタリア料理マスターコース』を修了されているスローフード・食の研究家、フリーライターの粉川妙さんにアグリトゥー

ーリズムについてお話を伺う機会をもつことができた。以下ではその際に伺った具体的な現状について触れておきたい。

4.1 宿泊場所としての農家

アグリツーリズムがイタリア国内はもちろん、世界的に注目を集めるようになり、宿泊場所としての農家のあり方も多様化している。たとえばアドリア海に面したイタリア南東部のプーリア州などでは、1990 年代頃からマッセリアと呼ばれる農園領主の館などを利用した宿泊施設が盛んになっている。16～19 世紀に建設されたものが多く、トルコ軍や海賊などへの対処から要塞化した造りになっており、古風で豪華な気分を味わえるのが特徴である。

一方で 10～20 部屋程度の部屋を宿泊用に改装し、地元の食材を用いた料理で観光客を引きつけるレストラン的な風情を強く出した農家もある。小さな農家の場合でも、たとえばウンブリア州ペルージャ県ノルチャの黒トリフやトスカナ州キャンティ地方のワインなどをはじめ各土地にはそれぞれの特産品があり、たとえ小規模であっても十分なアピールができる魅力を有している。その土地にしかないものが、イタリアの田園には豊富に存在することが、アグリツーリズムを後押ししている。

以前に厩だった建物を改造して客室とし、さらにそこに古い家具などをオブジェ風に配置することで独特の雰囲気を出すとといった付加価値をセールスポイントとしている場合もある。何を見せ（魅せ）所とするか、可能性は限りない。個性的な結婚式場やパーティーの 2 次会場として利用されることも多い。

さらに、古風な農家の活用はこうした観光面にとどまらない。葡萄畑や糸杉林などが数百年間にわたり人工的に維持されてきた景観が世界遺産となっているトスカナ州のオルチャ渓谷などでは、アメリカをはじめとする外国人が老後を暮らすセ

宿泊代については地方によってまちまちでトスカナ地方のように比較的高めな設定になっている地方もあるが、やや高めな場合で素泊まり 40～60 ユーロ（4800～7200 円程度）、一方で夕食つきで 30～40 ユーロ（3600～4800 円程度）ほどのところもある。最低 2 日間の宿泊が条件となっている場合もある。こうした多様なアグリトゥーリズムを実践する農家への評価を左右し、さらなる観光客の増加をもたらす要因として、たとえば以下をあげることができるという。

- ## 4.2 成功の陰で

Map of Italy showing regions and their status regarding the 1980 earthquake. The map uses color-coding: light blue for regions with prominent success stories (Piemonte, Liguria, Toscana, Umbria, Lazio), grey for regions with little progress (Campania, Puglia, Basilicata, Calabria, Sicilia), and yellow for regions hit by the earthquake (Emilia Romagna, Marche, Abruzzo, Molise). Major cities like Milan, Rome, Naples, and Palermo are marked. Regional names are in Italian, and some are also in Japanese.

Region	Status
Piemonte	成功例が顕著な州
Liguria	成功例が顕著な州
Toscana	成功例が顕著な州
Umbria	成功例が顕著な州
Lazio	成功例が顕著な州
Emilia Romagna	大地震で被災した州
Marche	大地震で被災した州
Abruzzo	大地震で被災した州
Molise	大地震で被災した州
Campania	芳しい成果があがっていない州
Puglia	芳しい成果があがっていない州
Basilicata	芳しい成果があがっていない州
Calabria	芳しい成果があがっていない州
Sicilia	芳しい成果があがっていない州

6

できるのかもしれない。

またウンブリア州やマルケ州では 1997 年に大地震に襲われ多数の伝統的家屋が倒壊したが、復興の助成金が出た地方では昔のままに家屋の復元が可能であった一方で、出なかった地方では近代的なビルへの改築が進んでしまった。古風な農家という観光資源そのものを失ってしまった一部の地域では、当然ながら昔ながらの佇まいをセールスポイントにしたアグリツーリズムが実践できないという差異化が生じてしまっている。

4.3 イタリア人の田舎への意識の変化

アグリツーリズムを実践する農家やそこを訪れる旅行者の主体を占める 30～40 代の人々は幼少時には「農家や田舎はダサいもの」として育った世代である。当時としては、たとえば銀行に勤めることがひとつの理想的な職業像であったという。これは多かれ少なかれ日本にも当てはまることであろう。しかし今日では農家や農業への関心が高まり、大学を出てから農業に従事することも珍しくなくなっている。こうした職業への価値の変換もまた、アグリツーリズムを支える社会的な背景として無視できない。

一方で、都会とは異なる、農村で暮らす人々に見られる伝統的な価値観も活動の活性化の足かせになっている場合がある。畑を耕し、羊を放牧していれば素朴ながら十分に満足できる生活を送ることができる中で、近代的な効率を重視するいわばビジネスライクな発想には違和感をもってしまう。それは農村の文化的・自然的資源をどのように維持保存し、活用していくのかという根本的な問題を表してもいる。

4.4 イタリア人のバカンス気質

イタリア人のみならず、ヨーロッパの人々の余暇活動の考え方や過ごし方は、日本とは大きく異なることはよく知られている。長期滞在型休暇ともいえるバカンスでは、欧州連合が形成され現在

のように通貨の統一やパスポート不要となる以前から、太陽を求め、国境を越えて南方の土地へ向かう傾向にあった。陸つづきということもあり、少なくとも西ヨーロッパにおいてはそもそも国境の意識が希薄といえるであろう。加えてイタリア人の移動感覚として、昼食にお目当ての料理を食べるだけの目的で 40km 程度の移動することはまったく問題にならない。100km ほどの距離であれば、日帰りで観光にでかけることもまったく苦にならないお国柄でもある。

イタリアでは春のイースターや 8 月半ばの休暇などがバカンスシーズンとなるが、基本は上述したとおり長期滞在型である。基本的に 1 ヶ所に長く滞在するこのバカンスのスタイルでは、何日どこに行き何を見るかということが大前提であるバックツアー的（マストურიズムの）な詳細・厳密な計画を立てることはまずない。いわばその日の気分で決める「あと決め」の旅、あるいは 1 点集中型の旅といえる。日本人に代表される短期移動型ないしバックツアー型の旅では定められた日程内で可能な限り多くのものを見ることに特化しており、移動時間も多くなってしまう。

一方で、欧州連合の形成以前には 1 ヶ月程度も普通であったバカンスは、現在では非常に短期間となり日本なみに数日間という場合さえ増えている。さらにユーロの統一通貨導入による経済状況の変化（インフレ・金欠）もあって、アグリツーリズムという比較的近場かつ安価に過ごせる場所で 1 週間ほど滞在するスタイルが注目されたという経緯もある。そこでその土地の特産の食とワインを楽しむ、日向で日がな一日読書、サイクリングや水泳などをして過ごし、ときに周辺の文化遺産を訪れる。イタリア人にとって余暇活動のこうした新たなスタイルは、それぞれの土地の魅力の再発見の旅でもあるといえる。

上記で見たように、アグリツーリズムは州や地方ごとに対応に差があるとはいえ、官民一体と

なって田園の自然と生活を維持し、地域振興をはかりながら都会からの旅行者の受け入れを促進するサステナブルツーリズムの成功例ともなっている。その土地固有・古来の食文化や地元産品を奨励して土地の文化と生活を守りながら、同時にまた旅行者にとっての価値を生み出す。これをモデルケースとしたたとえば日本でどれほど同様の取り組みができるかについては課題も多いが、スローフードやチッタスロー運動などと絡めてすでに各地で試みられているようである（加西市 ホームページなど）。

そもそも日本ではとくに受け入れる農家あるいは漁師の家の側に時間・空間・心理・資源力・認識といったさまざまな側面でバリア（障害）が生じていることが苦慮されており（アグリツーリズム Wikipedia）、都会と農村との交流の在り方そのものの再考が必要となっている。近代化の推進、あるいは第2次世界大戦後の復興やその後の経済成長の中で失われてしまった自然との調和を軸とする生活をすべて取り戻すことは不可能であるにせよ、それもどこまで観光の場に呼び戻し、そしてそれを維持していけるのかが問われてもいる。

（謝辞） 粉川妙さんには2011年1月5日の正月明けのお忙しい中時間を割いて頂き、神戸夙川学院大学にお越し頂きお話を伺うことができました。この場をお借りして改めてお礼申し上げます。お聞かせ下さった貴重な内容すべてを本稿に反映させるには至っていないかもしれませんが、何卒ご容赦頂ければと思います。また力不足ゆえに内容に関して誤記があるかもしれません。それらについての責任は筆者が負うものです。

引用・参考文献

- 秋山 邦裕 2006「新世紀における農業・農村の課題」『鹿大農学報告』56：73－86頁。
- 植田 暁 2005「景観の保全計画と運用計画の複合性に関する研究－イタリア・トスカーナ州シ

エナ県オルチャ川流域地域自然保護区を事例として」『総合論文誌』3：114－119頁。

加西市 ホームページ「チッタスローセミナーのご案内」<http://www.city.kasai.hyogo.jp/04sise/11osir/osir1012/osir101201a.htm>

恋沼 薫 2007『イタリア・田園のプチホテル アグリツーリズムに泊まる』ゑび文社有限会社。

粉川 妙 2008『スローフードの食卓から』扶桑社。

粉川 妙 ブログ「ウンブリアの食卓から」

<http://slowfood1.web.fc2.com/02profile.html>

千厩 ともゑ 1996『トスカーナ 田園ホテルのめぐみ』情報センター出版局。

篠 利幸 1998『イタリアの田舎に泊まる』NTT出版株式会社。

篠 利幸 2003『田園ノイタリアへ！アグリツーリズムの旅』NTT出版株式会社。

鶴 理恵子 2010「イタリアの有機農業運動・スローフード運動・有機農産物流通調査報告」『吉備国際大学研究紀要』20：17－30頁。

日本貿易振興機構（ジェトロ）農林水産部 2009『平成20年度コンサルタント調査 イタリアの有機農産物の現状調査』日本貿易振興機構農林水産部。

向山 秀昭 2009『三訂 大学生の観光学ノート』国際観光サービスセンター。

News2u.net 2010.12.16 「海外の人気旅行先、5年連続「イタリア」が1位！」

<http://www.news2u.net/releases/79631>

研究ノート：アグリトゥーリズムの事例報告

～イル・バスティオーネ（ウンブリア州）

神戸夙川学院大学観光文化学部講師 高根沢 均

【目次】

1. ウンブリア州スペッコについて
2. アグリトゥーリズム《イル・バスティオーネ》
3. 都市間の交通アクセスとアグリトゥーリズム

筆者が、実際に 2010 年度に滞在したアグリトゥーリズムを事例として、アグリトゥーリズムの運営と現況について報告するⁱ。

1. ウンブリア州スペッコについて

イル・バスティオーネのあるイタリア中部ウンブリア州の町スペッコは、半島を南北に走るアペニン山脈の西側辺縁に位置している。スバシオ山の裾野に広がる小さな街は、61.31 k m²の範囲に 8304 人（2009 年）の人口をもつ。



図 1: ウンブリア州スペッコの位置

古くはローマからウンブリア地方を横切ってアドリア海に至るフラミニア街道の要所として、また中世には、聖フランチェスコの巡礼路であったフランチェジナ街道の宿場としても大いに繁栄した。堅固な城門と重厚な城壁に囲まれた歴史的街区はこじんまりしており、石造りの建物を縫う

ように迷路のような石畳の小路が続いている。市内の教会堂には、ペルジーノやピントリッキオらルネッサンスの画家たちの絵が数多く残されており、往年の繁栄を伝えている。さらに、丘の斜面に広がる街は 1995 年に設立されたスバシオ山自然公園に隣接しており、豊かな緑と中世の城塞都市の調和した景観で親しまれている。

特産品としては、周辺に広がるオリーブ畑から取れる良質のオリーブオイルやスバシオ山で取れるトリュフ、そして各種のハムが知られている。

またスペッコは、近隣にも有名な観光地が点在し、観光立地に恵まれていることも特徴である。街から 1km ほど西にはウンブリア州を南北に走る自動車専用道路が通り、近隣の主要な都市へのアクセスが良い。南に向かえば、中世の街並みの美しいフォリーニョ（7km）、丘の頂に広がる街トレヴィ（18km）、壮大な大公城のそびえるスポレート（35km）が道に沿って次々に現れる。北へ向かえば、聖フランシスコで有名なアッシジ（10km）、ウンブリア・ジャズ・フェスティバルでも知られる中世都市ペルージャ（30km）に至る。一方、西に広がる平地の地方道を行けば、城壁に囲まれた小村ベヴァーニャ（12km）や DOCG ワインのサグランティーノで有名なモンテファルコ（25km）といった小さな街が点在している。東はアペニン山塊の深い山並みが幾重にも連なり、谷間を縫うように 50km も走ると美食で有名なマルケ州にたどり着く。このようにスペッコは、ウンブリア州の主要な観光名所に囲まれた便利な立地に位置している。

2. アグリトゥーリズモ《イル・バスティオーネ》について

イル・バスティオーネは、ウンブリア州のスペッロにあるアグリトゥーリズモである。経営者の家族は4人家族で、スペッロ近郊で7ヘクタールの農園を営み、オリーブと豆、野菜類を栽培している。実際にアグリトゥーリズモの運営をこなしているのは、息子のヤコブ氏である。ヤコブ氏は、ジェノバの大学で法学を修め弁護士資格を取得しながらも、故郷の緑豊かで静かな環境が忘れられず、11年前に帰郷してアグリトゥーリズモの運営に着手したという。食事の際には、母親が調理を担当し、父親も給仕をするなど、家族で手伝いながら滞在者の歓待に努めている。

アグリトゥーリズモの建物は、スペッロの歴史的中心街から1.5kmほど北西にあるスバシオ山の北西斜面に広がるオリーブ畑のなかほどに位置している。スペッロの市街からは、丘陵に広がるオリーブ畑を貫く細い道を登っていかなければならない。バスも通っておらず、基本的に利用者は車を使用している。市街までは徒歩で30分弱であり、かろうじて徒歩観光圏といえるかもしれない。車で移動する場合は、後述のように観光客の車乗り入れは禁止されているため、旧市街の外にある有料駐車場に停めて徒歩観光となる。



図2：イル・バスティオーネ概観

イル・バスティオーネの本館は、スペッロに入る北からの道筋の防衛拠点として13世紀頃に建てられたと推定されている。その後、ウンブリア地方の有力な貴族バリョーニ家の狩猟用の館としても使用されたとされる。本館は長方形平面の二階建てであり、地上階は不揃いな石灰岩を積み上げた円筒ヴォールトの大広間で、かつては兵卒の待機場所であったとされる。また二階は、形を整えた石材によるクロイスター・ヴォールトの部屋が2つ設けられている。明らかに地上階とは造作が異なり、ルネサンス時代に貴族の使用する部屋として改修されたと推定されている。また第二次大戦中には、パルチザン活動の拠点としても使用されていた。ヤコブ氏はアグリトゥーリズモを開始するにあたって、あえて手付かずのまま放置されていたこの建物を購入することにした。斜面に広がるオリーブ畑に囲まれた静かな環境と、歴史的な雰囲気溢れる建物自体の魅力が決め手だったという。

購入にあたっては、歴史的価値のある建物であるため、スペッロだけに留まらない様々なレベルの文化財監督局の許可が必要であり、その許可の取得に1年以上が費やされた。また購入した時点では、二階の屋根は落ち、地上階の天井は長年月にわたる煤で真っ黒に汚れていたため、一つ一つ壁石を磨いて掃除し、屋根をかけなおすなど住める状態にまで修復しなければならなかったという。さらに、宿泊および食事の出来る場所にするために、水周りや電気設備等の工事が必要であった。加えて東側に隣接して宿泊用の部屋の増築も行われた。これらの工事や改修には、やはりそれぞれ文化財監督局の許可が必要であるだけでなく、さらにスバシオ山自然公園の保護区に接しているため、環境局の許可も取得しなければならず、開業までにさらに数年を要したという。通常のアグリトゥーリズモにおいても、その農家に既存の古い建物があればそれを修復して使うことが法律で定められている。伝統的な景観の保全はアグリトゥ

ーリズム制度の重要な一部であり、商業利用のために伝統的な建造物の安直な変更を許さないという歴史的文化財に対するイタリア人の厳しい姿勢がうかがえる。

部屋数は本館に2部屋、新館に4部屋の計6室であり、それぞれにバス・トイレ・テレビ・冷暖房設備を整えている。また地上階は食堂として使われている。食事は、法律で定められているように、ほとんどの料理で自家農園の産物およびその地域の食材を使用し、母親が伝統的なウンブリア料理を提供している。夕食セットで宿泊の予約をした場合、前菜、プリモ、セコンド、デザート、コーヒーまで、フルコースで膨大な量の食事が供される。さらに朝食でも、イタリアのホテルで一般的に提供されるクロワッサンとカプチーノだけでなく、温かい数種類のパンが提供される。

滞在費は、2人以上のグループで朝食のみの宿泊の場合、3泊以上を条件として一人あたり約4000円／泊、夕食もつけた場合、一人あたり約7200円／泊からとなっている。高いか安いかわかるという判断は難しいが、ちなみにスペッロの市内のホテル等を見ると、最も安いホテルで朝食のみの宿泊が一部屋あたり約7500円／泊である。通常、フルコースでの食事をレストランで取れば安くても3000円はかかることを考えると、イル・バスティオーネの価格は決して高くはない。なおアグリトゥーリズム全般の水準からみて、この価格帯は中程度である。年間の滞在者数は数えたことがないというが、ハイシーズン（4月～9月、クリスマスから年始にかけて、および復活祭週間）にはほぼ毎日満室になるという。また、食事のみの利用や、結婚式や記念日など祝祭の宴会で利用されることもある。

3. 都市間の交通アクセスとアグリトゥーリズム

スペッロの交通アクセス状況をみると、前述の自動車交通網のほかに、フラミニア街道沿いに南

北に走る鉄道によってスポレートからペルージャまでの各都市と結ばれており、利用価値も高いように思われる。しかし、実際には観光地として知られる中世都市は丘陵の上にあることが多く、歴史的な中心街へたどり着くために駅からさらにバスやタクシーを使用しなければならない。また東西方向には鉄道はなく、さまざまなルートの路線バスで結ばれている。観光客にとってこの路線バスのルートを把握することはかなりの困難である。こうした交通アクセス事情の結果、自動車（路線バスを含む）が各都市間の主要な移動手段となっており、車を持たない観光客にとっては、たとえば魅力ある観光資源が近隣に密集していても効率よく観光することができないストレスを生むことになる。またこの点については、イタリア全土においても、同様な状況が見られる（特に歴史的な都市間の移動）。

一方、市内の移動に関しては、観光客は歴史的街区の外に位置する駐車場に車を止め、徒歩での観光をすることになる。「パーク＆ウォーク」と呼べるような制度になっている。これもまたスペッロに限らず他の歴史的街並みをもつ都市でもほぼ同様の状況で、とりわけ近年、観光客の自動車乗り入れを禁止する傾向が強まっている。スペッロのように中世から続く街並みでは、前述のように街路が細く入り組み車の往来には適しておらず、また駐車スペースもきわめて限られてしまうことが主要な理由である。しかし、結果として安全だけでなく空気もきれいになり、無数の路上駐車が消えることで歴史的な街並み景観の改善にも寄与することとなっている。また、街を行き交う人並みが増え、道沿いの小さな商店に立ち寄る人も増加することから、活気溢れる街並み空間の演出にも効果を発揮している。

上述のように、イタリアの歴史的街並みを誇る小さな街では、旧市街への観光客の自動車乗り入れの制限が厳しくなっている。一方で、そうした歴史都市はしばしば丘の上や山の中腹にあり、鉄

道駅からのアクセスが不便であることが多い。その場合、市内のホテルを利用するためにはタクシーまたは路線バスを使用せざるを得ない。自動車をもたずに複数の都市を続けて観光する際には、こうした宿泊所にたどり着くための手間とコストは無視できない。

この点についてアグリトゥーリズムモの状況をみると、そもそもほとんどの場合、宿泊の建物は基本的に大きな農園のなかに位置しているため、近隣の街からは数 km 以上離れている。また主要な道路から離れて小道を伝っていくため、バスでの移動も困難である。したがって、必然的にアグリトゥーリズムモを利用する観光客は、長期滞在の予定を立てて車に荷物を積んで到着することになる。しかし、スペッロのように近隣 30km 前後のところに観光の対象となる場所が点在している場合、宿泊所から車で乗り出して小一時間で到着し、旧市街のすぐ外に駐車して荷物を気にせずに徒歩観光できるという利点は、非常に大きいと思われる。荷物を整理して宿泊所を移動するストレスもなく、また地元の美味しい料理を堪能でき、歴史を感じる部屋で休息し、そのうえ費用も安いということが、イタリアにおけるアグリトゥーリズムモの成功の一つの要因ではないだろうか。歴史的な小都市が密集しているトスカーナ州においてアグリトゥーリズムモがもっとも盛んであるという背景にも、こうした都市内交通アクセスと都市間交通アクセスとの関係が推定される。 (以上)

ⁱ 本稿は、2010 年度神戸夙川学院大学共同研究「～点から面へ～文化遺産をつなぐ広域観光マネジメントの研究—イタリア・トスカーナの世界遺産ピエンツァの事例から」成果報告の一部である。

アグリツーリズムに関する日本語・外国語文献

神戸夙川学院大学観光文化学部准教授 小磯 学
神戸夙川学院大学観光文化学部講師 蝦名 大助
神戸夙川学院大学観光文化学部講師 高根沢 均
神戸夙川学院大学観光文化学部准教授 小槻 文洋

【目次】

1. はじめに
2. 日本語文献
3. 英語文献
4. イタリア語文献

1. はじめに

以下はアグリツーリズムに関する日本語・英語・イタリア語の主な文献をリスト化したものであるⁱ。もとより網羅的なものではないが、今後の研究の手掛かりになればと考えている。

本共同研究で高根沢や小磯がまとめたように、イタリアで「アグリトゥーリズムモ(Agriturismo)」ⁱⁱといえ、農家が伝統的家屋を用いて副業として行う、その土地の伝統的食材や農家で体験活動を提供する宿を意味し、イタリア中部のトスカーナ、ウンブリア両州を中心に普及している宿泊・観光形態を指す。このアグリトゥーリズムモについては、英文の Sonnino 2003 のほか、イタリア語で多くの文献が入手できる。

他方、英語のアグリツーリズム(Agritourism)は、イタリア語のアグリトゥーリズムモの訳語として用いられる一方、Rural Tourism とともに、農村・農業地域で行われる持続可能な観光形態としての意味も有している。英文では、例えばポーランド、アルバニア、スコットランド、アイルランド、オーストリアなど、イタリア以外の地域がアグリツーリズム(Agritourism)の事例として取り上げら

れることが多いようである。

日本語でヨーロッパのアグリツーリズム(Agritourism)を取り上げた文献としては、本共同研究で小磯が引用・参考にしたイタリアの「アグリトゥーリズムモ」に関する文献のほか、青木辰司による英国、山崎光博や鈴江恵子によるドイツのグリーン・ツーリズムの紹介が挙げられる。

なお、日本では、農村・農業地域で行われる持続可能な観光形態を指すのに、「グリーン・ツーリズム」の用語が多用されており、日本各地での、いわゆる「日本型グリーン・ツーリズム」の取り組みを報告・検証した文献が多数出版されているが、今回のリスト化の対象とはしなかった。

2. 日本語文献

青木辰司『グリーン・ツーリズム実践の社会学』

丸善、2004 年

青木辰司、小山善彦、バーナード・レイン『持続可能なグリーン・ツーリズム：英国に学ぶ実践的農村再生』丸善、2006 年

石川みゆき『世界でいちばん贅沢なトスカーナの休日：憧れのアグリトゥーリズムモを体験する』青春出版社、2006 年

岩井吉彌『ヨーロッパグリーンツーリズムの発展構造の経済学的分析』(1997-1999 年度文部省科学研究費補助金研究成果報告書)

恋沼薫『イタリア・田園のプチホテルアグリトゥーリズムモに泊まる：ここを知らずしてイタリアを語るな!』ゑん文社/星雲社(発売)、2007 年

粉川 妙『スローフードの食卓から』扶桑社、2008年

篠 利幸『イタリアの田舎に泊まる』NTT 出版株式会社、1998年

篠 利幸『田園ノイタリアへ！アグリトゥリズムの旅』NTT 出版株式会社、2003年

鈴江恵子『ドイツグリーン・ツーリズム考：田園ビジネスを創出したダイナミズム』東京農業大学出版会、2008年

千厩ともゑ『トスカナ田園ホテルのめぐみ：中部イタリア・アグリツーリズムの旅』情報センター出版局、1996年

千厩ともゑ『トスカナのおいしい旅：イタリア・田園の隠れ家に泊まる』中央公論新社、2002年

千厩ともゑ（文・写真）『トリノからバローロの丘へ：美食のピエモンテ州で途中下車!』洋泉社、2006年

松永安光、徳田光弘『地域づくりの新潮流：スロシティ/アグリツーリズム/ネットワーク』彰国社、2007年

道下弘紀（文・写真）『ヨーロッパ・田園と農場の旅：グリーンツーリズムへの招待』東京書籍、1998年

向山秀昭『グリーンツーリズム論ノート』国際観光サービスセンター、2009年

山崎光博、大島順子、小山善彦『グリーン・ツーリズム』家の光協会、1993年

山崎光博『ドイツのグリーンツーリズム』農林統計協会、2005年

3. 英語文献

Adams, B. B., The New Agritourism: Hosting Community & Tourists on Your Farm, New World Pub. 2008

Dernoi, L. A., Present conditions for farm tourism in Europe, New York, 1983.

Fagence, M., Rural Tourism and the small

country town, Univ. of Queensland, 1991.

Foley, C., Understanding Historic Monuments on the Farm, Ireland, 1988.

Gillespie, S. A. 'Agritourism characteristics and contributions to destination and livelihood sustainability – A case study from south-west Scotland' in Sustainable Tourism in Rural Europe' in Sustainable Tourism in Rural Europe: Approaches to Development, eds. by D. V. L. Macleod and S. A. Gillespie, pub by Routledge ,2010, ch.14, pp.

Gorman, C. 'Cooperative Marketing Structures in Rural Tourism: The Irish Case' in Rural tourism and sustainable business (Aspects of tourism) ed. by D. Hall, I. Kirkpatrick and M. Mitchell, Channel View Publications 2005, (Chapter 7)

Lawson A. S., 'Discourses of Polish Agritourism: Global, Local, Pragmatic. in Discourse, Communication and Tourism eds. by Adam Jaworski and Annette Pritchard, pp.123-145

Hall, C. M. 'Rural Wine and Food Tourism Cluster and Network Development' in Rural tourism and sustainable business (Aspects of tourism) ed. by D. Hall, I. Kirkpatrick and M. Mitchell, Channel View Publications 2005, (Chapter 9)

Hall, D., I. Kirkpatrick and M. Mitchell Rural tourism and sustainable business (Aspects of tourism) edited by Derek Hall, Irene Kirkpatrick and Morag Mitchell, Channel View Publications 2005

Hall, D. 'Identity, community and sustainability – Prospects for rural tourism in Albania', in Tourism and Sustainable Community Development, ed. by D. Hall and G. Richards, Routledge, 2003.

Howell, A. Developing quality standards for

- agritourism, Ann Arbor, Mich.: UMI c2004 Thesis (M.R.M.) -- Simon Fraser University (Canada), 2004
- Macleod, D. V. L. and S. A. Gillespie eds., *Sustainable Tourism in Rural Europe: Approaches to Development*, Routledge (2010)
- Kim Meyer-Cech 'Regional Cooperation in Rural Theme Trails' in *Rural tourism and sustainable business (Aspects of tourism)* ed. by D. Hall, I. Kirkpatrick and M. Mitchell, Channel View Publications 2005, (Chapter 8)
- Murphy, P. E., "Tourism as an agent for landscape conservation: an assessment", in *The Science of the total environment*, , 1986, Vol.55, pp.387-395.
- Sonnino, R., *For a "piece of bread"? Interpreting sustainable development through agritourism in southern Tuscany, Italy*, Ann Arbor, Mich.: UMI, c2003, Thesis (Ph.D.) -- University of Kansas, 2003
- Sznajder, M, L. Przebórska and F. Scrimgeour, *Agritourism*, Wallingford, U.K.: CABI, 2009
- Torres, R. M. and J. H. Momsen eds., *Tourism and agriculture : new geographies of consumption, production and rural restructuring*, London: Routledge, 2011
4. イタリア語文献
- Agnoli, F. M., *Agriturismo. Problemi giuridici e legislazione*, Edagricole, 2001.
- AGRITURIST, *Agriturismo e turismo rurale: proposte per il recupero e la valorizzazione del patrimonio edilizio e agrario*, Roma, 1990.
- AGRITURIST, *Lo sviluppo dell'agriturismo. Analisi della domanda e dell'offerta*, Roma, 1990.
- Albissini, F., "Agriturismo come attività «non normale» e causa di risoluzione del contratto di affitto agrario" , *Diritto e giurisprudenza agraria e dell' ambiente* , , 1993, pp.223ff.
- Albissini, F., "L'interesse agricolo quale valore di rango costituzionale nella disciplina urbanistica", *Rivista di diritto agrario* , 1996, II, pp.201ff.
- Albissini, F., "Ruralità come regola di diritto per uno sviluppo sostenibile", *Agricoltura e diritto – Scritti in onore di Emilio Romagnoli*, Giuffrè ed. Milano, 2000, vol.I, pp.421ff.
- Albissini, F., "Definizione di attività agrituristiche, commento all'art. 2 della legge 20 febbraio 2006, n. 96", *Rivista di diritto agrario*, 2006, I, pp.439ff.
- Angiolini, S., *Agriturismo in Toscana: protagonisti, tendenze, problemi*, Editori del Grifo Italia, 1989.
- Ascali, B., *La nuova disciplina dell'agriturismo*, *Informatore Agrario*, n.22, 1993.
- Balestrieri, G., *L'agriturismo in Toscana*, Milano, 1996.
- Balestrieri, G., a cura di, *L'agriturismo in Toscana. Le imprese, gli ospiti, gli intermediary*, Franco Angeli – IRPET, Milano, 1996.
- Barone, A., Lo Surdo, G., Di Napoli, R., a cura di, *Agriturismo & Marketing. Analisi delle tendenze e strategie per lo sviluppo delle attività agrituristiche*, Agra Editore, 2003.
- Barozzi, L., *Agriturismo, una nuova opportunità per lo sviluppo agricolo*, *Agricoltura*, 34, 1986.
- Bartoletti, M., *Ambiente rurale. Una nuova risorsa per il turismo*, Roma, 1972.
- Beato, F., "Il paesaggio agrario tra pratiche agricole e valorizzazione turistica", in *Atti del XXV convegno di Studi SIDEA<Problemi economici dei rapporti tra agricoltori e ambiente>*, Bologna, Il Mulino, 1990.

- Beberis, C., *Sociologia rurale*, Bologna, 1985.
- Bellencin Meneghel, G., a cura di, *L'agriturismo in Europa e in Italia*, Pàtron, Bologna, 1991.
- Belletti, G., Marescotti, A., "Le dinamiche dell'agriturismo in Toscana: struttura dell'offerta e caratterizzazioni territoriali", lavoro realizzato su incarico dell'ARSIA – Agenzia Regionale per lo Sviluppo e l'Innovazione nel settore Agricolo-forestale della Regione Toscana, Pisa, 2002.
- Berni, P., a cura di, *Aspetti economici e legislativi dell'agriturismo nell'arco Alpino*, CNR-Progetto Finalizzato IPRA, Verona, 1988.
- Bodenstedt, A., "L'agriturismo ha qualche possibilità contro il turismo di massa?", in *Genio Rurale*, No.10, 1992.
- Bote Gomez, V., *Turismo en Espacio Rural. Rehabilitacion del patrimonio sociocultural y de la economia local*, Madrid, 1988.
- Bruni, G., "L'agriturismo in Campagna", in *Scritti in onore di Domenico Ruocco* (F. Citarella, a cura di), Loffredo, Napoli, 1994, Vol.II, pp.51-63.
- Busti, S., *Manuale di diritto del turismo*, Giappichelli, 1999.
- Cannata, G., a cura di, *Lo sviluppo del mondo rurale: problemi e politiche, istituzioni e strumenti*, (Atti dal Convegno di Società Italiana di Economia Agraria, Campobasso, 22-24 settembre 1994), Bologna, 1994.
- Cannata, G., a cura di, *I Linguaggi dell'Agriturismo*, Anagritur, Roma, 1989.
- Carbone, F., Ribaud, E., "Agriturismi e politiche di sviluppo", *Rivista di Politica Agraria*, n.3, 2000, pp.47-73.
- Carelli, , "Considerazioni giuridiche sulla legge-quadro dell'agriturismo", *Terra Nostra*, ottobre-dicembre 1985.
- Casari, M., Pedrini, L., *Geografia del turismo*, Hoepli, Milano, 1994.
- Ceccacci, G., Susanna, M. V., *Agriturismo e turismo rurale*, 7° ed., Edizioni FAG Milano, 2008.
- Charrier, J. B., *Geografia dei rapporti città-campagna*, Angeli, Milano, 1991.
- Colombo, F., De Chirico, M., *Agriturismo: aspetti giuridici, fiscali e amministrativi*, IPSOA, 2004.
- De Stefanis, C., Giocannardi, G., Scarafuggi, M., *L'impresa agrituristica*, Maggioli, 2000.
- Di Gennaro, A., "Risorse e valorizzazione turistica nelle province interne della Campania", in *Scritti in onore di Domenico Ruocco* (F. Citarella, a cura di), Loffredo, Napoli, 1994, Vol.II, pp.361-8.
- Dolcini, A., *Agriturismo: una scelta possibile. La legge, le idee, le proposte operative per aiutare l'agricoltore a diventare operatore agrituristico*, Edagricole, 1992.
- Ferrucci, N., *Agriturismo, Digesto*, 1987.
- Francario, L., Paoloni, L., "L'impresa agrituristica", Jovene, 1989.
- Gemini, C., *Agriturismo. Guida vissuta a contatto con natura e ambiente*, Calderini, 1990.
- Gregori, M., *Agriturismo, turismo rurale e sviluppo rurale*, Università di Udine, 1994.
- INSOR, *Usi turistici dell'ambiente rurale*, Angeli, Milano, 1988.
- IRPET, a cura di, *L'offerta agrituristica*, IRPET, Firenze, 1992.
- Jannucci, L., "Agriturismo e attività "connesse" all'agricoltura", in *Rivista di diritto civile*, , 1987, II, pp.199ff.
- Leone, U., "Il ruolo dell'agricoltura nella

- salvaguardia dell'ambiente”, in Ricostruire l'agricoltura per ricostruire l'ambiente. Atti del Convegno Nazionale (C. Santoro Lezzi, a cura di), Lecce, 1983, pp.83-104.
- Lo Surdo, G., Agriturismo. Risorse, gestione, programmazione, esperienze, Edagricole, Bologna, 1988.
- Palermo, L., Sorrentino, A., a cura di, Paesaggio Agrario e Agriturismo nel Lazio, Stampa Agnesotti, 2010.
- Palumbo, M., Le agevolazioni per il turismo e l'agriturismo, IPSOA, 1999.
- Parente, A., “L'agriturismo”, in La ricerca geografica in Italia 1960-1980 (AGEI), Varese, 1980, pp.461-2.
- Pinna, A., Sereno, A., I nuovi turismi. Agriturismo, turismo rurale, strade del vino, Fabio Cloce Editore, 2002.
- Rancario, L., Paoloni, L., L'impresa agrituristica, Iovene, 1989.
- Rugani, A., a cura di, “Atti del primo convegno nazionale di studi su Agriturismo e Turismo rurale oggi, Fiesole, 15-17 aprile 1988”, Firenze, 1988.
- Telleschi, A., Turismo verde e spazio rurale in Toscana, ETS, Pisa, 1992.
- Terranostra, a cura di, L'agriturismo, Roma, 1994.
- Zerbini, S., La legislazione turistica nelle legge quadro, Padova, 1988.

(以上)

ⁱ 2010年度神戸夙川学院大学共同研究「～点から面へ～文化遺産をつなぐ広域観光マネジメントの研究—イタリア・トスカーナの世界遺産ピエンツァの事例から」の成果の一部である。なお、リスト化にあたっては、日本語文献を小磯と小槻、英語文献を蝦名と小槻、イタリア語文献を高根沢が担当した。

『ツーリズム研究年報』 所収論文・解説と 翻訳

「自己と《他者》—旅行者、民族誌家、ツーリスト」（ヴァ ジリキ・ガラニ＝ムタフィ 著）について

（解説と翻訳）神戸夙川学院大学観光文化学部講師 伊多波 宗周

【目次】

1. 解説

2. 翻訳

序論

近代およびポストモダンにおける旅行

ヴィクトリア時代の旅行と人類学的進化論

ギリシア的古代世界

ツーリストの旅行

民族誌家の旅行

ポストモダンにおける旅行

結論

参考文献

上で必読のものが含まれており、20 世紀後半以降のツーリズム理論を振り返るという意味でも、翻訳する価値があるだろう。さらに、訳者の専門である 19 世紀社会哲学との関連においても、旅の経験における自己と《他者》の関係、およびその変化（とりわけ、マス・ツーリズムや人類学の成立する 19 世紀における変化）について論じる本論には、「ツーリズムの哲学」を構築していく上での重要性があると考えられる。

翻訳に先立ち、①この論文の基本的性格と位置づけ、②読解にあたって注意すべきこと、③表記について、若干の解説をしておく。

①まず、この論文の基本的性格であるが、主に著者のフィールドであるギリシアに関して、そこを旅した者たちが、どのような言説を提示してきたのかを、事例とともに紹介するという種類の実証研究である。とはいえ、2000 年代になって盛んになる「語り」と観光経験との関係¹、およびツーリズムとアイデンティティの形成・変容との関係²について、かなり早い段階で議論したという意味で、21 世紀の理論的ツーリズム研究の先駆的な仕事のひとつだと言えるものである。

②次に、読解にあたっての注意点である。タイトルにもあるように、本論は、旅行者 (traveler)、民族誌家 (ethnographer)、ツーリスト (tourist) の旅行における《他者》経験の違いについて述べたものである。また、本論部分が「近代とポストモダンにおける旅行」と題されているように、近代初期、19 世紀後半以降の近代、ポストモダンにおける旅行の意味の変遷をたど

1. 解説

本稿は、ギリシア・エーゲ海大学 (University of the Aegean) の社会人類学者 Vasiliki Galani-Moutafi が、*Annals of Tourism Research*, Vol.27, No.1, 2000, pp.203-224 において発表した、*The Self and the Other—Traveler, Ethnographer, Tourist* の解説と全訳である。

10 年以上前の論考であるが、Cohen, E.H. や Tribe, J. など、理論的ツーリズム研究の先鋭によるものを含む 26 点の論文において引用されており (2011 年 4 月現在)、翻訳の価値がある論文だと言える。また、著者の参考文献には、Boorstin, D.J., Bruner, Ed, MacCannell, D., Rojek, C. そして Urry, J. ら、ツーリズム理論を研究する

るという論にもなっている。詳細については、翻訳に委ねるとして、ごく大雑把に言えば、本論の主要な比較は、a) 近代初期の旅行者、b) 19世紀後半以降のツーリスト、c) ポストモダンの民族誌家の間で為されており、それぞれのキーワードは、a) ロマン主義、b) 大衆性、c) 自己再帰性である。議論の筋が見えにくい箇所もあるので、そのような大筋を念頭に置いた方が読解しやすいだろう。

③最後に、表記について。ガラニウムタフィは、一貫して「他者」を大文字で始めて“Other”と表記している。これは、「自分ではない人間」「他人」という一般的な意味での「他者」ではなく、とりわけ20世紀後半に人文社会科学においてキーワード化した「異文化の人々」というニュアンスを帯びた「他者」のことを指すためである。それゆえ、訳出する際、《他者》と表記した。また、本論文における“tourism”・“tourist”は、「観光」・「観光客」と訳しても問題のないケースがほとんどであるが、語の持つニュアンスに意識がいくように、一貫して「ツーリズム」・「ツーリスト」と訳した。なお、日本語としての読みやすさを考慮して、特に哲学・思想系の専門用語であっても、原語を併記することはしなかったが、理論的ツーリズム研究にとっての最重要概念に関しては、括弧内に原語を表記した。

2. 翻訳 序論

本論は、旅行者の語り (narrative)、民族誌的实践、ツーリズムの言説という三領域における事例を示すことによって、他所や《他者》へのまなざしから、自己発見と自己表象が生まれるプロセスに光を当てることを目的とする。民族誌家、旅行者、ツーリストという三つのグループの間で、いわゆる《他者》との出会いが、どれくらい似ていて、どれくらい似ていないのかについて、彼らが旅行経験をどのように生きるのか、また、自分自身と《他者》の表象をどのように創りあげるのか、という見地から問う。三者の旅は、いずれも地理的・文化的な境界を越えていくものであるが、ツーリストと旅行者の実践とイメージは、自己再帰的

パラダイムの枠内にいる人類学者が、《他者》へとまなざしを向けるときに得るようなタイプの自己意識に必ずしも達するわけではないことを示唆している。

さまざまな土地を通り、個人的・文化的境界を越えていく探検家、宣教師、入植者、兵員、移住者、移民、亡命者、召使い、人類学者、ツーリストは、それぞれに旅行の歴史を持っている。けれど、いくつかの例外、とりわけ巡礼における例外を除き、旅行者の地位は、主として、英雄的動機、教育や学問上の目的、そして気晴らし目的で旅に出る裕福な白人のヨーロッパ人男性のものと定まっていた。西洋の言説において、移民労働者、召使い、難民の空間移動の実践は、人種および階級が理由となって、旅行と見なされてこなかった (Clifford 1997:32-33)。非白人および白人の下層階級の男女において、居場所を変えることは、まったく不本意な種類の移動を意味するものであった。つまり、それは何らか別の理由を持つことに特徴づけられ、おそらく冒険、学び、探検、気ままさに欠ける経験であったのだ。このような社会的カテゴリーに属する諸個人の経験は、彼らが日記や書物、旅行談を残さなかったために、また社会科学の文献において適切に表現されなかったために、無視され、誤解されてきたのだ。しかし、いかに考えられようとも、旅行は歴史的に、富裕な者とそうでない者の両者を含み込んでおり、人々を家から離れさせるさまざまな文化的、政治的、経済的な衝動を問題にするべきである。

西洋の歴史において、人々が旅行するのには、多くの理由があった。巡礼を通じた宗教的経験の追求、冒険の追求、それから、植民地の拡大・そこへの移住という状況での経済的・社会的進出、商業の拡大や貿易の実施に関連した理由、さらには迫害からの亡命における避難場所の追求といったものである。冒険する者、放浪する者であると共に、初期の旅行者たちは、人類学者の原型、ツーリストの原型という性格を帯びていた (Crick 1985:76)。その理由は、人類学の前史および初期の歴史に関わるもので、人類学者とツーリストを結びつける関係ゆえのものでもある。人類学者とツーリストは、共通の起源を持っており、その起源は、

探検家、宣教師、商人、そして旅行者へと遡ることが可能なものである。旅行者、人類学者、そして経験の多様な質を基礎とするツーリストを比較することにより、旅が、自己と《他者》とを区別しようとする試みを認めるか否かの条件を際立たせることができる。本論は、旅行の生きられた経験、《他者》との出会い、自己と《他者》との関係、旅行の言説という文脈における自己の産出（提示）といったことを参照し、三者の類似点と相違点に焦点を当てる。

次のように論じることにも可能である。すなわち、旅は、ある場所から他の場所へと移動するだけでなく、旅する自己が、絶えず見知ったものとそうでないものとの間での交渉、この場所、あの場所、その他の場所の間での交渉をしなければならないことで、さらなる旅の実践に入っていくかもしれないときに、諸々の境界を再設定することを促すような潜在力を持っているのだ、と（Minh-ha 1994:9）。さらに、旅行者が経験を手に入れ、変容を経験することを考えるならば、旅は、一種の時間の経過と捉えられてもよい。時間と空間の重層的次元により、旅は、自己と《他者》とを同時に発見することを象徴する有力なメタファーになる。「内面の旅（inward voyage）」を可能にするのは、明らかに、このような内的次元と外的次元を同時に写し出す能力である。それによって、地理的空間移動は、内観のプロセスに似たものへと変容させられる。クリフォードが述べたように、「旅は、意識に到達したときに意味を持つ」（Clifford 1988:167）。語りのプロセスにおいて経験を構造化し、意味を与える叙述を通じて、旅行者は自己とアイデンティティのイメージを生み出す仕方で、自らの旅について考えをめぐらすことができるのだ（Neuman 1992:177-178）。本論は、アイデンティティを生み出す自己についての語りに光を当てる努力をしつつ、旅行、民族誌、ツーリズムという三領域の事例を提示する。

方々へと赴く人々を話題にするのが重要なのは、境界、内側と外側、距離と差異といった諸概念、すなわち自己の構築と再調整の構成要素となる諸概念に関係するからである。つまり、それが何ではないのか、あ

るいは、それは何を明確に欠いているのかに関し、《他者》との関係という文脈においてのみ、「アイデンティティ」は産出され、概念化するるのである（Butler 1993; Derrida 1981; Laclau 1990）。事実、精神分析学の用語で言えば、また、ラカンの問題系に基づいて言えば、自己は、《他者》の鏡像を通じて構築されるのだ。自己理解に達するのは、彼／彼女が、誰と異なる自己理解をするのかによる。アイデンティティは、言語—ラカンによれば無意識のものである—と類似した仕方で構築される。すなわち、言語コードの単語間における類似と差異の諸関係において、意味の割り当てがなされるのだ。デリダのような言語哲学者は、話者は固定的で不変の意味—アイデンティティの意味も含まれる—を生み出すことはできないと論じる。なぜなら、概念化はその本性からして、何らかの変動的なものだからである。概念化は、（アイデンティティの）安定と統合を追求するが、（差異によって）絶えず切断され、変容させられる。一般的に、アイデンティティ構築のプロセスは、差異の「戯れ」に従属し、象徴的な境界線を引き出すことを前提としているのだ。

近代およびポストモダンにおける旅行

近代において、旅行の実践および、それが経験した変化は、多様な文脈で辿ることができる。すなわち、実地の専門的研究者の出現に先立つ、人類学者の異国風だったり原始的だったりする表象、ヴィクトリア時代に（ギリシアのような）地中海世界を訪れた旅行者によって書かれた報告書、マス・ツーリズムから生じた目的地と旅行する自己についてのイメージ、そして、人類学者の旅と、その探検的性質について、民族誌によって発表された情報といった文脈である。

ヴィクトリア時代の旅行と人類学的進化論

他者性の構築と自己の形成は、フィールドワークを中心とする人類学の実践の精髓を危うくする。フィールドワークの世界において、民族誌は、個人間・文化間における《他者》との出会いから生まれるものである。しかしながら、学問上のフィールドが、西洋と非

西洋の間に歴史的に構築された区分に基づいて設定されているので、人類学とは、何よりもまず、西洋の自己による非西洋の《他者》の研究であった。そのような設定に加え、19世紀後半になると、人類学は、それまで哲学や文学、ヴィクトリア時代の旅行者や宣教師による書誌によって担われていた、より広いテーマ領域である「未開」の空間についてもカバーすることになった。リチャード・バートン、デイヴィッド・リビングストン、ヘンリー・スタンリーは、そうしたヴィクトリア時代における旅行書の著者を代表する存在である。たとえば、リビングストンのよく知られた作品である『南アフリカにおける宣教師の旅と探検』（1857）は、大部分、4年におよぶ南アフリカでの放浪に当てられている。原始的な《他者》を表象しようとする初期の人類学者の試みは、後に、主にマス・メディアとツーリズム広告に引き継がれた。そして、それらは、民族誌の現在、すなわち、もはやコロニアリズムのものではなく、民族誌によって捨て去られているような論証的空間を支配する状況になっている。

西洋の旅行の伝統において、探検家、宣教師、入植者、自然科学者は、実地の人類学専門家の出現に先立って存在していた。しかしながら、彼らは、19世紀後半の、実地に赴かない人類学者たちの思考に影響を与える多くの仕事をなした。ヴィクトリア時代の旅行者とキリスト教の宣教師は、さまざまな活動（たとえば商業的活動）上の理由のみならず、未知の土地の人々との初対面という経験をする目的をもって遠い大地を訪れた、非専門的な観察者たちだったのだ。この経験は、歴史的な見地からしても、感情的な見地からしても、明らかにロマン主義的な次元を持っていた。最初に民族誌的報告をした人々は、このような非専門的観察者の伝統に属していて、彼らの報告が、エドワード・タイラー、ルイス・モーガン、ジェームズ・フレイザーといった首都ロンドンの学者たちによって用いられるに至ったのだ。

この時代の民族誌的研究の著者（すなわち、宣教師であったロバート・モファット、デイヴィッド・リビングストン、ヘンリー・キャラウェイら）の「公式

の」（学問上の）聴衆は、科学の一分野として人類学を確立することで意見が一致する、進化論の「主流」を代表していた（Thornton 1983:504）。方法に関して言えば、そこには情報の提供者（「実地の」観察者）と首都の分析者との間に分業が成立していた。情報の提供者は、学問の世界において学者に伝える必要から、彼らの報告を「科学的」なものとして示した。それゆえ、彼らの資料の内容は、固有で再生産不可能な観察と、《他者》との出会いの経験であるのだが、にもかかわらず、普遍的で、見かけ上は客観的な科学の一部分として示されたのだった。このようにして、民族誌は学問になった。そこで明らかにされなかったのは、それぞれの民族誌が、どのような条件のもとで作られたのか、特に、著者が何に巻き込まれているのかと、どのような態度であるのか——間主観的、道徳的、政治的な——であった（Thornton 1983:517）。

ヴィクトリア時代のヨーロッパにおいて、宣教師とコロニアリストの道徳的な不安は、19世紀を通じて栄えた進化論、社会の道徳的分類のための論理を提供した進化論へと、完璧な適合性を見出した。しかし、ダーウィニズムの理論家と支持者にとって、非科学的で、道徳的で、無窮の分類こそが、すなわち、聖書あるいは社会的ダーウィニズムによって暗示され、ヨーロッパ人にアイデンティティを提供するだけでなく、彼らの行動をも正当化するような分類こそが重要であるのは明らかだった。当時のヨーロッパの知識層に対して、《他者》は、進化の過程で西洋社会が除去した、はるか昔のあらゆる欠陥の生きた標本を提供したのだ（Tyler 1986:127-128）。実地に赴かない人類学者たちは、時間と道徳性に関する階層的な基準にしたがい諸社会を分類しようとする、一直線モデルのレンズを通じて、原始の、「歴史」を持たない《他者》を眺めた（McGrane 1989:93）。原始の社会は、それを通じてはるか昔の西洋社会に旅ができ、人類の子ども時代へと戻ることができるタイム・マシーンとして用いられたのだ。このように、人類学的進化論において、《他者》は、見本として、また、時間の外のものとして見出されたのだ。さらに、他者性の理解は、旅行の結果とし

てのものではなく、むしろ、旅行そのものが、《他者》について既に構築されたイメージを前提としたものであったのだ (Fabian 1983:121)。最後に、18 世紀および人類学的進化論の時代において、旅行は、《他者》の私物化および収集にも結びついていた。もちろん、収集活動と私物化は、原始の世界に対してのみ行われるとは限らない。というのも、それらは、ギリシア・ローマ的古代と結びついた地中海地域においても幅広く行われたからだ。地中海地域に関して、とりわけ興味深いのは、過去への旅行者たちが、それほど遠くない《他者》を、彼らの先祖として位置づけるのを目的に、古代へと接近した点である。

ギリシア的古代世界

西欧の旅行の伝統の枠内において、地中海地域は、旅行者が自身のルーツを探るための鏡として用立ったが、実際には明らかな違いによって区別される。ギリシアに関して言えば、19 世紀ヨーロッパの旅行報告書を考慮すると、その曖昧な地位は、ヨーロッパの「辺境にある」という、その位置に由来する (Herzfeld 1987)。18・19 世紀にギリシアを訪れた多くの旅行者の物語報告は、「親密な」ものと「疎遠な」ものととの区別に関して、実に曖昧な考えを示しており、考古学的財宝を手に入れようという強迫観念をさらけ出しつつ、旅がいかに関与し自己理解とアイデンティティの構築を促しうるかを示して、自己と《他者》の間に光を当てようとしている。これらのうちの最後のものにより、多くの旅行者は、学術的 (古典的) ヘレニズムを、その起源となった場所と結びつけ、時間を捨象することで、想像された過去の壮大さを現在において経験することができるのだ。この種の態度は、18 世紀後半にギリシアへ旅行したフランスの外交官、マリー＝ガブリエル・ドゥ・ショワスル＝グフィエの記した、次の一節に見て取ることができる。

ギリシアを訪れるためにパリを出発したとき、私はただ、古代のとても有名な場所に対する、若い頃からの熱情を満たしたかったのだ。私は前もって、この美しく、華々しい地域を見て回

る楽しみをホメロスやヘロドトスの書を手にも味わい、詩人のイメージのうちに描かれた豊かな美を、より鮮明に感じる楽しみを味わっていたのだ。 (Augustinons 1994:163)

旅の間に出会った、さまざまな出来事を記録し、叙述しながら、この旅行者は、どのような自伝よりもずっと包括的な自己についての像を示すことができたのだ。このような例として、『パリからイエルサレム、イエルサレムからパリの旅行案内』(1811) という、10 ヶ月におよぶ地中海沿岸を巡る旅を記した書において、フランソワ・シャトブリアンが次のように述べているものが挙げられる。「私は、パルテノン神殿やイエルサレムを、ピンドス³の子孫として、また、イエルサレムへの十字軍戦士として訪れようとしていた」 (Augustinons 1994:185)。とりわけこの本において、著者のアイデンティティが、互いに刺激し合う外的世界と内的自己の間のダイナミックな関係を通じて構築されている。自己の肖像を描こうとする試みにおいて、シャトブリアンは、旅を、メタファーとして、特に重要な伝説や歴史的イベントを記憶の中で覚醒させる、風景の内に焼き付けられた象徴の源泉として用いた。彼は、東方への自分の旅を、巡礼の代表、同胞の使節として見ており、その熱情と信仰を生きたのだ。彼の聖地への訪問の記述を参照しよう。

私は、ゴドフロワ、リシャール、ジョワンヴィル、クシ⁴が私のように訪れた沿岸に触れようとした。私は凡庸な巡礼者ではあるが、多くの著名な巡礼者によって聖化された土をあえて踏んでもいいものだろうか。少なくとも、私もまた信念と信義を持ちあわせている。これらの性質の力によって、私も、かつての十字軍兵士たちに認められんことを。 (Augustinons 1994:216)

もちろん、シャトブリアンは宗教的な巡礼者ではなく、文学的な巡礼者であり、彼のオリエントへの旅は、何よりもまず個人的な探検であった。それは、現在の否定と過去のユートピアへの没入であったのと同様、外的というよりも、内面の冒険だったのだ。彼は、自

らの意識と記憶の中に過去を償還し、その努力において、物理的世界は彼に必要な自己拡張の媒体を与えているのだ。それゆえ、シャトーブリアンの焦点は、主に歴史的な遺跡や記念碑といった、過去の印が刻まれたものに合わされ、対して、現代のギリシア人たちは、彼の関心の表層にしか入ってこない。このシャトーブリアンの著作のような仕事から、過去への旅に見込まれるものには、旅行者が新しい仕方で自己認識を生き、それを発展させる可能性が含まれていると推論される。

一般に、マス・ツーリズムの登場以前にギリシアに訪れた旅行者たちの語りは、考古学的財宝を手に入れようとする熱情のほか、我慢、抵抗、忍耐のみならず、高慢、尊大、自己中心性といった形で自己イメージを生み出していた。これらの報告において、「親密—疎遠」という基礎的な対照の反転にも注意すべきである。古代の世界は、見知らぬものではなくて、親密なものであり、それは旅行者を彼の青年期へと連れ戻す。したがって、古代世界は精神的故郷、彼／彼女自身の内に持っている過去としてあるのだ。しかし、現在と過去の関係もまた反転している。過去の記憶への没入は、現在の否認を要求する。その最大の理由は、「我々」と視同されないものこそ、現在だからである。たとえば、ヨハン・バッハオーフェンは、1851年に出版されたロマン主義的色彩の濃い『ギリシアへの旅』の中で、現代のギリシア人たちが見せる、意識されずに継承されたある特性のうちに、古代ギリシアとの連続性を見ている。しかしながら、同時に、現在のギリシア人たちの思考法においても、意識においても、古代との断絶をも見ているのだ（Andonopoulou 1997:35-36）。ギリシアについての観念と現実との間の衝撃的な対立は、グフィエのことも幻滅させた。グフィエは、古代を想起させる光景から瞑想することによってのみ、喜びを得たと報告している。シフノス島の老人の集団が、外国からの訪問者に対して、熱心に外の世界のニュースを聞いたことが、グフィエに古代の光景を喚起した。

私は、ギリシアの美しき時代にやって来たのだと思った。ポル

チコ、人々が恭しく静かに耳を傾ける、よく知られた老人の集団、彼らの顔つき、衣服、言葉、そのすべてにより、私はアテナイやコリントスを思い起こした。（Andonopoulou 1994 : 166）

これらの例は、旅行者が、ギリシアの古代と近代との関係に連続した線を見出すことができない場合においてのみ、（ギリシアの）現在を認識していることを示唆する。そのような現在は、彼／彼女によって、「疎遠な」（つまり、予見不能で、風変わりで、好ましくない）もののカテゴリーに入れられ、「我々」のカテゴリーから距離を置いたものとして留められる。次のように論じることできるだろう。すなわち、旅行者の語りは、筆者を《他者》へとさらし、それによって、自己の発見を可能にするのだ、と。したがって、語りは、旅行者が会おうものではなく、英雄的旅行者についての情報を主にとりあげるのだ、と。旅行者が実際に会おう人は、筆者の経験を通じてしか現れず、あるがままの諸個人としては現れないのだ。「疎遠な」という語に関して言えば、その意味は、境界の構築に関係しており、排除という目的に動機づけられている。「疎遠な」として性格づけることは、自身のものとして保護したいあらゆるものから《他者》を排除する手段、すなわち、自己を限定する手段である。20世紀に至るまで、「疎遠な」ものは、ツーリストに便利のように、国際的交流と広告媒体によって構築され、企図されていたのだ。

ツーリストの旅行

19世紀終わりは、マス・ツーリズムの勃興により、旅行が衰退した時代であると考えられている。この時代は、ツーリズムの民主化と商業化のプロセスが始まった時代である（Boorstin, 1964）。学術的に設定された、旅行とツーリズムとの概念的区分という文脈で言えば、旅行者が、区別、尊敬、趣向に関する諸価値を備えているのに対し、ツーリストは、非冒険的で、主体性と差別意識を持たない存在である。旅行が、自己実現の努力のうちに源泉を持つのに対し、ツーリズム

は、もともと持っていた世界観を変形することよりも、それを強固にするものと考えられる (Rojek 1993:175)。確かに、今日ギリシアを訪れる多くのツーリストは、彼らの経験の中で、ツーリズムと文化とを結びつけておらず、これは、過去の旅行者たちと異なる点である。そのようなツーリストは、楽しむことに熱中しており、西洋の古典的心像というレンズを通して、現代のギリシアの文化のあり方を「読む」ということはしない。ツーリストは基本的に、美的に魅力あるものを探し求めつつ、「堅い」像は避けようとするため、結局、古典的な部分よりも、感覚への刺激に結びついたギリシア観を持つことになる。大衆的娯楽をハイ・カルチャーと分けることが近代の特性であり、その特性は分割の社会的実践と規則がはっきりとしているべきだと主張する。たとえば、公的生活と私的生活の、内と外の、芸術と生活の、といった形で (Rojek and Urry 1997:3)。ツーリストのまなざし (tourist gaze) が記号を通して構築されるとするならば、ツーリスト文学における近代ギリシアの肖像は、次のものの混合物である。砂浜、レトシナ (樹脂の香り付けをしたギリシア・ワイン)、ウゾ (リキュール)、ブズキ (マンドリンのようなもの)、シルタキ (ダンスの種類) の出演者やダンサー、そしてパルテノンの象徴、といったものである。この種のまなざしは、主に、遊びと楽しみの言説によって「権威づけられる」が、これは、シャトーブリアンのような、教育の言説に埋め込まれた旅行者の言説と、好対照をなすものである (後者は、自己実現の高度な経験をもたらそうとする)。

アーリ (1990:86-87) にしたがって、次のようにも論じることができるだろう。ヴィクトリア時代のギリシアへの旅行者は、古代の光景や素晴らしい風景を「単独で」鑑賞することが文化的資本を要求するという「ロマン主義的」まなざしを体現していた。対して、今日ギリシアを訪れるマス・ツーリストは、「集合的な」ツーリストのまなざしを体現している。そして、後者は、大衆娯楽に方向づけられており、エリート主義や私的な観想を退け、高度の大衆参加を目指している、と。このことは、伝統的な美的属性ではなく、直接的で、

楽しみを伴うインパクトを通じて聴衆に感銘を与えるというポストモダンの文化傾向の典型である。さらに興味深いのは、ギリシアのツーリズムのイメージを創りあげる記号の中には、ツーリズムの言説以外でも、しばしば用いられるものがあるという点である。それらの言説は、ギリシアの外部で生み出されたものであるが、ギリシアに位置づけられ、そこで実行に移されるマーケティング・プログラムや、商品の実利に適っている。かくして、アメリカのスポンサーがついたギリシアにおける短期留学プログラムのウェブ・ページは、次のような文句から始まる。

ギリシア、あるいは古代から知られた名で言えば、ヘラスは、私たちのあらゆる感覚に語りかけてくる壮大な国です。エーゲ海の透き通った水を見渡して建てられた古い寺院…、フェタ (白チーズ) と混じりけのないオリーブ・オイルに包まれたトマト…、屋外でのダンスつきのブズキ、ヴァイオリン、そしてライア…、岩だらけの山頂に座る野生の山羊たち。これらは、ギリシアの島々に特有の文化的・自然的風景の貴重なイメージの、ほんの一部に過ぎません。 (http://www.worldlearning.org/csa/europe/greece_pom.html)

まさにこのようなプログラムが、教育とツーリズムという、近代の文化においてははっきりと分けられていた二つのものの境界が崩壊したことの典型例である。プログラムの哲学と、マーケティングのレトリックの背景にある考えは、教育 (そして、それが伴う「ワーク」の種類) は非伝統的な環境と状況においてなされうるといものである (異国における旅行および、ホスト・ファミリーとの生活において)。また、「ゆっくりとした」経験を許容できるという考えでもある。この基本的方向性は、空間と諸機能の脱差異化の証となっており、ポストモダンの主要な特性の一つである (Rojek 1993:188)。

ツーリストたちは、主として大衆文化の表象と、ツーリズムに関する言説によって生み出された既成のイメージとともに旅を始めるが、彼らは、自らの美意識を侵犯されない程度において、彼らにとって親密な世

界のものとは異なる演出に身を呈し、楽しむことをも期待している。支配的な言説によって示された方向に従った、象徴的で構造的なプロセスの体系を通じて、ある場所は、ツーリズム・サイトへと変形される。そのような言説は、ツーリストが訪れる場所を「読み解き」、「私物化し」、「搾取する」方法に影響を与える。美に関する私物化に適するよう考慮された場所となるためには、日々の生活から、その自然的、歴史的、文化的な特別さの点で、区別されなければならない。支配的な語りが、そのような場所を制御するとき、その場所は、ツーリズムの対象物となる。次に見るのは、いかにしてツーリズム産業が、ある土地を紹介し、広告が「異国風の」世界を喚起して、ツーリストを惹きつけようとするかの例である。ギリシアの旅行雑誌にある次の一節は、「キューバ、葉巻、ラム、そしてシュルレアリスム」という題のもとに、キューバを紹介する語りである。

キューバは深くフィデル・カストロのことを信じていて、経済的改革への歩みを進めています。キューバは夢見ていて、あなたに夢を見させもします。至るところに見られる過去と、生きることへの渴望の間で、キューバは、カクテルを手にしたあなたを、ルンバのリズムとサルサによって魅了します。ガソリン不足のため、至るところで見られる自転車、そして、あなたを虜にする魅惑的な宗教儀式と共に、チェ・ゲバラとヘミングウェイのキューバは、勇気と希望のレッスンを与えてくれます。
(*Cosmos Travel* 1996)

紹介において、まずもって、抵抗とヒロイズム、そして不屈の忍耐のイメージを呼び起こす、指導者カストロの名という最大の国民的象徴によって、この国のはっきりとした他者性が示されている。そして、ツーリストは、普段の・毎日の生活（「内」における）に欠けているもの、すなわち夢を提供する場所というイメージを喚起され、惹きつけられるのだ。夢見ることが、親密でないもの、「異邦の」ものだけがもたらすことのできる、想像上の旅へとつながるのだ。ルンバとサルサへの言及は、これもまた夢見ることにおいて重要な

役割を果たしており、それは、社会文化的慣習と疎遠であるという点においても、日常と比べて高いレベルにあるという点においても、感覚への刺激を起こさせるものである。次に、革命の象徴であるチェ・ゲバラや、アメリカの著名な小説家ヘミングウェイは、思想と行動における比類なさと理想とを具現化する世界的シンボルへとキューバを結びつける試みとして用いられている。さらに、宗教的儀式は、ラテンの豊富さ、色彩、官能性、そして神秘性と結びつけるために話題にされている。

同じ雑誌で、エーゲ海のコス島の紹介は、「ヒッポクラテスの哲学から夜のエンターテインメントまで」という題で始められている。読んでみよう。

船が港に入ると、聖ヨハネ騎士団の壮麗な城があなたを迎え入れます。それは、島に見られるイタリア風の建築への前触れなのです…。ヒッポクラテスは、医学へのツアーを提供し、薬学の秘儀を授けてくれます。そして、あなた自身は、自転車に乗って、過去から現在へと旅し、「96年」の「シティ・オブ・ヨーロッパ」であると発表されたこの土地を発見するために、思い思いの旅程を計画すればいいのです。(*Cosmos Travel* 1996:126-127)

この一節において、広告的言説は、ギリシアのツーリストに向けて象徴を用いて、エーゲ海の島を「異国化」しようとし、それを「遠くの」ものにしてしている。それは、城がもたらすイタリアの過去の建築における痕跡と、ツーリストを自然の「神秘」へと導くヒッポクラテスの登場の両者への言及によってなされている。最初の言及は、島の歴史を強調し、二つ目の言及は、神話的性質を吹き込まれた実践と共に、この土地の固有性を示す。まさにツーリストを過去へと現在へと駆り立てることによって、語りは、どこか「歴史的な」場所へと赴くタイム・トラヴェラーの地位を人に対して与えるのだ。しかし、マーケティング戦略は、それでは終わらない。今日のコス島は、EUという強力で「疎遠な」存在の標準を満たしているという理由で、過去の（神秘的な）コス島と同等の重要性があるという印

象が創られるのだ。ヨーロッパとの関連づけは、単に得意がっていることを示しているだけでなく、かつて「内」であったものと比較することによる、大きな期待の創造を意味している。

広告産業によってしばしばなされる、旅にはツーリストの自己を変形する能力があるという主張にもかかわらず (Bruner 1991:241-242)、経験は、真正性 (authenticity) への探求の見地からは解釈されえない (MacCannell 1989)。一つの理由として、テレビ文化が、普通のことと、そうでないこととの間の区分を不明瞭にするということを挙げることができる。テレビ文化に根ざす、記号、イメージ、象徴といった表象的コードは、名所を日々の生活からアクセス可能なものとする。表象の指標的プロセスに関して、ロジェク (1997:70-71) は、ツーリストの知覚が、もともとの対象に対し、視覚的、テキスト的、象徴的な表象の系列を当てはめることに言及している (ガイドブック、映画、テレビ番組、旅行者の話において)。指標化の概念は、諸々の表象の範囲に関係する。それゆえ、ツーリストの知覚は、諸要素の混合物から成っている。そのような諸要素は、主として映画やテレビ番組で見られる表象を当てはめるがゆえ、見ることはしばしば、反風土的な経験となる (彼／彼女の期待が満たされないと感じるという意味で)。さらに、見ることは、単独のオリジナルな意味を持たないことにもなる。というのも、映画やテレビ、文学作品からの文化的アイテムを指標とすることで、見ることに枠をはめるからである。電子的なものに由来するイメージは、土地に対する知覚に枠をはめる際、とても強い力を持つので、この型のリアリティにツーリストは抗うことができないのだ。ロジェクは、ツーリストが旅行中に感じる楽しみや興奮が、ある部分、日課の切り換えに関係しているという議論をしている (Rojek 1997:55-56)。ツーリストを旅行へと促すのは、光景の真正性というよりも、新しい気晴らしへの絶え間なき欲求にあると言える。

民族誌家の旅行

異文化間の出会いの視覚的次元を主に強調するツー

リズムとは違い、民族誌は異文化間の出会いの論証的な側面に依るところが大きい。集団旅行をするツーリストが、旅の管理を他人に委ねる傾向にあるとすれば、民族誌家は、常に異なる文化への深い洞察に達するべく奮闘する。デュビッシュの議論 (1995:33)、すなわち、人類学者が研究旅行において、内では起こらない物事を経験するという議論、それは、言外にツーリストの旅とは異なっているということを言っているのだが、その議論を踏まえるならば、人類学者は、どのような自己についての気づきを民族誌家の旅行において得るのだろうか。1920年代のマリノフスキーによる旅行実践は、《他者》の社会において人類学者の能動的関わりが要求されるという、新しい知の枠組みの先駆けとなった。この意味で、民族誌家の旅行は、研究のプロセスおよび人類学者の経歴における決定的なポイントとなった新しい形態の探検・フィールドワークと同視されるべきものとなったのだ。マリノフスキーの先駆的事例は、民族誌的研究が調査者の自己の隠されていた側面、知られていなかった側面を明らかにすることを示し、逆に、自伝が民族誌に光を当てうるものであることも示した (Stocking 1983)。つまり、フィールドワークが、重要な個人的経験を、一般的な知識の領野へと結びつけるものであることを示したのだ (Hastrup 1992)。民族誌家の旅行が持つ探検の、際だった特質を理解するためには、《他者》との関係が、どのように経験され、明らかにされるのかを調べなければならない。また、経験が民族誌のテキストにおいて、どのように権威づけされるのか、また、人類学者が、筆者として、どのように自己と《他者》を構築しているのかを調べなければならない。

1920年代から30年代にかけての民族誌は、旅行者の記述と類似した部分が多かった。そのことは、筆者によって、《他者》を経験する他の場所への旅へと帰せられるような強調、すなわち、ロマン主義的想像力においての旅の役割に見られるのと同じような強調のうちに、見て取ることができる。マリノフスキーは、その著書『西太平洋の遠洋航海者』(1922)において、メラネシア群島の土着の冒険を示すような彼の旅へと読

者の参加を促すものである。この著作は、旅行に含まれる冒険譚として見ることもできるが、ヨーロッパの大宇宙からトロブリアンドの小宇宙への寓話的な旅とも捉えることができる。『遠洋航海者』は、人間本性への隠喩的な旅として、人間本性のより深い理解に達するという見込みのもとになされた、異文化への潜入というヒロイックな試みとして特徴づけることができるだろう (Thornton 1985:8)。

マリノフスキーは、旅行経験を処理する中で、旅行記年譜に由来する自己像を紹介することで、参加する観察者の理想に接近する。『遠洋航海者』の有名な書き出しにおいて、彼は、次のように書いている。

突然、道具一式のみで、原始的な村の近くの熱帯の海岸に一人きりで漂着し、あなたの乗っていたボートも小舟も、見えなくなってしまったという場面を想像してみよう (1922:4)。

漂流者のイメージは、民族誌家にユートピアのモデルを連想させる。無知を特徴とした状況にある漂流者を考えることは、参加する観察者の理想に、ある仕方で接近することである。多くの古典的な民族誌は、どのようにして民族誌家が「承認された」参加する観察者へとその地位を向上させたのかを説明する、ステレオタイプな「出会いの神話」を含んでいる。そのような神話は、往々にして、民族誌家がはじめ無知であったことを描くことから始まる。すなわち、彼／彼女が、いかなる接触もしないがゆえ、混乱の状態にあったことを描き、必然的に誤解を引き起こすさまを描くのだ。隠喩的に言い換えれば、民族誌家の状況は、子供のような状態として描かれうるものである。しかし、時間が経つにつれ、混乱と無知は、成熟し、しっかりとした、信頼できる知識へと置き換わる。そのような「可塑性を示す」神話は、土着の社会への深い潜入の印象を作り出し、それゆえ、民族誌的仕事のその他の部分においても、筆者が、研究した社会のよき解釈者にして代弁者であるように見せる、内部からの洞察という印象を作り出す (Clifford 1988:39-40)。

近代民族誌のテキスト生産は、主に社会人類学の実証主義的歴史に影響を受けた。それは、活動の、中立的で、

非人格的で、科学的な性質を称揚するものであった。その結果として、「個人的な」ものは、研究者の経験が権威の一元化の資源として機能するかぎりにおいてのみ、明かされる傾向にあった。かつて、人類学者は、第一人称の「私」を、彼らの仕事と解釈者としての役割を妥当なものとするためだけに、民族誌の研究論文の重要箇所において導入したのだった (Clifford 1986; Pratt 1986; Rosald 1986)。そうでなければ、自己は彼らの著作から不在になってしまうがゆえに。さらに、到着の描写において、「私」は、西洋における旅の記述の伝統から引き出されたものではなく、フィールドワークの実践から引き出されたものでもなかった。「客観的な」観察と叙述から、自己および個人的な語りを分離することは、西洋の社会科学における、個人的なもの (感情的なもの) は「逸話でしかない」か、些末なことでしかないものの領域へと押しやるという、長い伝統によって命じられたものである (Okely 1992:6)。しかしながら、自伝的な語りの抑制にもかかわらず、人類学的自己は、しばしば、想像力の産物へと変形される文学の中にも、日記の秘密の情報の中にも逃げ道を見つける。

マリノフスキーによって、日記は、自己を向上心に燃える科学者とは区別しうる場所、不安、怒り、混乱、そして最大の秘密である空想を表現することができる場所として用いられた。それゆえ、日記の公刊は、人類学の公的イメージに関係して、大きな反発の原因となった。しかし、毎日の、間主観的な状況は、個人的なものを明らかにすることと結びついて、マリノフスキーの日記 (『厳密な意味における日記』1967年) に、まさに特別の価値を付与する要素を包含しているのだ。『日記』と『遠洋航海者』の双方を、記述の例として詳細に調べてみると、個人的／感情的なものと理論的なものとは、容易に分けられるものではないし、認識的／知的なプロセスの全体から分離することもできないということを理解するだろう。クリフォードが論じたように

(1988:102-104)、民族誌の執筆、特に文化の神話の構築は、マリノフスキーにとって、自己の統一性に達するための手段として機能したのだった。彼の民族誌的な仕事において、自己と文化の構築された全体は、一文化の

方は機能主義的分析アプローチの結果であるが、アイデンティティの相互依存的寓話として見ることができる。

1960年代と70年代には、人類学者と、参加する観察者ないし解釈者としての自己との関係について検討する一連の民族誌に関する仕事が発行された。しかし、フィールドワークと結びついた個人的叙述は、「正式な」民族誌の巻とは別の巻として収められることが普通であった。このような分け方は、経験の公的／私的、客観的／主観的な側面に存する二元論的アプローチを示している。たとえば、コリン・ターンブルは、はじめ、一人称で書かれたコンゴのピグミーをめぐるフィールドワークについての記述的な報告を公刊し（1961）、5年後に、同じテーマの、より「客観的な」研究論文を公刊した（1965）。そのような状況は、民俗誌的対話や文化的《他者》との出会いに焦点を当てた、物語的民族誌が出現する80年代に変わり始めた。同時に、研究者が、政治的に中立な観察者でもなければ、安定し、一枚岩の、統一された自己であるわけでもなく、歴史的な存在で、専門分野に特有の分析的観点を持ち、また自らの個人的経験に影響された存在であるということも理解された。

人類学もツーリズムも、近代の経験を調停する文脈を提供する《他者》の表象を生み出した。他所や異国を象徴化することで、《他者》は、内のイメージ、場所、自己、力のイメージの逆を備えた媒介として機能した。論じてきたように、近代の旅行を駆り立ててきた興味・関心は、統御と秩序を求め、それを負うことによって作り出される論証的空間の内に位置づけられるべきものである。《他者》の「私物化」のプロセスにおいて、人類学的実践、旅行の実践は、既に確立された自己と《他者》のイメージを問い直すのではなく、むしろ、それを強化する傾向にあった。この話題は、自己のアイデンティティの問題に及び、特定の歴史的な文脈における力の構造に関連づけられないかぎりには、理解され得ないものである。人類学者が多様な文化のリアリティを解読しようとすることは、人々自身のイデオロギーのモデルに対して表象の領域を割り当てつつ、「リアルな」ものとして想定される《他者》のものの見方を生み出すことにつながる。この権威づけられた優越な位置は、とりわけ、人類学者

の専門家としてのアイデンティティの政治的機能を明かしている。それは、客観的な「科学」になろうという人類学者の関心事と、まさに同列のものである。「科学」は、実際、研究者の旅行経験を、彼／彼女の解釈の努力の一部として認めることの決してないものなのだ。それと同じ関心事によって、人類学者は自らとツーリストの間の類似性についての話題を考慮したがるのだ。

ツーリズムの場合、近代における発展の経路は、多様な文化的風景を独占的・エリート主義的に「読解すること」による浸食を示していた。ツーリズムがポストモダンの先駆者として受け取られることの一因として、この質的な変形が挙げられる。ポストモダンの時代は、次のものに特徴づけられる。すなわち、イメージと象徴が拡散したこと、および、マス・メディアによって、ツーリストのまなざしによる典型的な対象物を見ることが容易になり、ツーリズムが各家庭の内に入り込んだことである。ツーリストの実践の「伝統的な」特質のアクチュアルな表現、ツーリストの実践と社会の他の部分との分離は、もはやありそうにないことで、この進展は、ツーリストの実践の「教養化」に道を開いた。ポストモダンの時代におけるツーリズムに関するアリーの議論（1990）は、記号がまなざしの代用品から成っており、かつ、まなざしは、記号なしには存在し得ないとしている。旅行の観念を呼び起こす記号は、今日、文化産業によって大量生産されており、それは、内と外、仕事と旅行、真正なものと創られたものといった概念間の内的区分の衰退の結果である。この進展の方とは言えば、表象の大衆的支配を反映しているのだ。

ポストモダンにおける旅行

民族誌家や旅行作家、詩人の作品は、今や、それが含みうる自己提示や自己変革の物語を探すために調べられているのかもしれない。まなざすことを超え、これら三種の旅行者は、訪れた場所の風景や文化との密接な触れ合い、交流をするに至ったという事実は、彼らの語る自己の物語を比較するための共通の基盤を構成している。さらに、民族誌の空間的・テキスト的な

実践と、「単独の」旅行での、そうした実践との比較は、旅行者と民族誌家の関係に光を当てる。

フィールドワークのハビトゥス⁵が、旅行のハビトゥスに対立するものと定義されていた過去とは違い、今日では、境界の溶解—個人的なものと専門的なもの、自己と他者、理論と経験の境界の溶解—に関わるポストモダンの理由によって、文学的旅と学術的フィールドワーク、学術的分析と旅行の語りとの境界線は、再調整されている。旅行も、旅行のようなフィールドワークも、打ち解けなさ、免除特権、不理解、固定観念といった、多くの似たような問題と格闘しなければならないことが認められる。概して、旅行とモビリティにより、ポストモダンの世界は、文化地理学の継続的な再整理を経験しており、かつては安定していた区別、すなわち、親密なものと疎遠なものとの区別、自己と《他者》との区別、そして同様に、人類学的研究が行われていた「フィールド」についての因習的な観点、これらの基礎は危うくされている。これらの状況に対する反作用として、自己に向けられた民族誌家のまなざしという新たな志向が増加しており、自己は、文化的経験の解釈のための適切な場所として捉えられている。

デュビッシュは、自己発見の民族誌的旅としてのフィールド調査を認識し、彼女がフィールドへと持ち込んだアイデンティティについて、彼女の調査がもたらしたものについて、彼女が自分自身について学んだことについて、そして、彼女のフィールドワーク経験が世界観に影響を与えたかどうかについて、報告している。彼女の著作『他なる場所において—ギリシアの島の寺院における巡礼、ジェンダー、政治』（1995）は、ポストモダンの再帰性の好例である。デュビッシュは、はじめ、1969年から70年にかけてエーゲ海のティノス島でフィールドワークを行った後、1986年の夏に、島で人気の寺院の調査をするために再訪している。そのとき、彼女の精神的・身体的苦しみに起因する重大な背景事情により、彼女は、なぜ苦しみが人々を寺院での癒しへ誘うのかを理解した（1995:33）。デュビッシュは、フィールドワークを行う中で、自己再帰的プ

ロセスを経験し、それがこのような理解の背景となったのだ。巡礼を通じ、自分自身についての新しい気付きを手に入れる形で、彼女は自分自身の苦しみに意識的になったのだ。また、はじめのフィールドへの旅、文化的境界の通過について振り返ることにより、デュビッシュは、それによって関心と感情的反応を知った、かつてのいくつかの前提について、その正当性を疑うことになった（1995:216-217）。再帰的な人類学が感情的なものと客観的なものの間の境界を批判するに至り、フィールドワークの機能を内的旅として受け取るという枠内において、人類学者は、彼／彼女が経験したものへの感情的な反応と同様に、彼／彼女の経験をも認識するよう強いられるのだ（Rosalind 1989）。デュビッシュの内面の旅が、かつて彼女が持っていたギリシア正教会の礼拝への否定的態度の理解を含んでおり、それゆえに、自己探究と自己への気付きのプロセスを構成要素とするものとなったのだ。

デュビッシュはフィールドワークの間に、それまで経験したことのない感情を経験し、自分自身の文化について振り返り、自らのアイデンティティについて問うような瞬間があったと述べている。さらに、外部の人間と内部の人間、観察者と参加者の間に引かれた境界を越えていると感じる状況に直面し、デュビッシュは、観察と参加というフィールド調査における二つの構成要素が両立不可能であると理解するに至った。観察が、ツーリストのスタンスに似た一定の距離を必ず伴うのに対し、参加は、感情を含んで巻き込まれることを示しており、ゆえに、分離と観察とは違うのである（1995:116）。デュビッシュは、感情を理解のための媒体へと変質させることで、また、自己と《他者》のカテゴリーを、区別され、分たれたものとしてではなく、相関関係のあるものとして見ることにより、このディレンマを解消しようとした。同様に、彼女は、人々が彼女のことをどのように位置づけるのか—関係的に、状況的に—、また、自らの伝記と経験において、自分自身をどのように位置づけるのかに依拠する形で、ツーリスト、人類学者、巡礼者の間の境界の概念的な不明瞭化を考慮した。

『ヘラクレスの柱—地中海のグランド・ツアー』(1995)において、旅行作家のセルーは、何よりもまず、ツーリストたちと、その振る舞いに対する軽蔑をあからさまに示している。実際、彼は、ツーリストから身を離し、旅行活動の単独的性格を強調している。同時に、彼の言う意味での、経験における自由と新しさを保護するために、多様な手段、すなわち、オフシーズンの旅行をするとか、飛行機を使わないとかいった手段を用いた練り上げをしている(1995:489)。セルーの旅行への期待を高めるものは、具現化された経験を追求することである。彼が認めているように、旅行することは、あらゆる感覚に関係しており、感情の混合物として彼の中でわき上がってくるものである。この点は、旅行者とツーリストの区別に関する議論を補強するものである。というのも、ツーリストの経験は、主に視覚的なものに限られるからである。

セルーが、旅行の反対物、すなわちツーリズムとは根本的に無関係であるという立場をとっているにもかかわらず、旅行者としての彼のアイデンティティの曖昧さに関して直面するディレンマを隠そうとはしない(1995:47-48)。このようなアイデンティティについての話題は、彼の試みの気ままさに関係しており、セルーの意識において、ある場所から他の場所へと自由に移動するという事は、仕事や、生産的あるいは家族に関する日常生活の一部としては見なされていないのだ。弱々しく、意味のない行為には見えないものとして正当化されるためには、書くにあたって、体系的観察をするしかないのである。それゆえ、セルーのアイデンティティに関連したディレンマへの解決法は、次のような確信に存していた。すなわち、そこにいるということが、それ自体、目的なのではなく、体系的観察をし、それについて記すための課題を供するものであると確信することである。次のようにも論じられるだろう。旅行作家としてのアイデンティティの形成は、多様な場所と出会いの交差を含んだ、単独旅行の様態に基礎づけられた、物語的叙述の創造を経て成立するのだ、と。セルーが終生、旅行をして過ごすと言っていることは、「人生を旅になぞらえる本質的な修辞」

(Fussell 1980:210)の使用と区別することができる。旅行は、成人期および成熟に到達するための基本的な手段として供されるのだが、セルーの探求の対象は、未知のもの、過去を表象するという意味では、隔たったものであった。既知のもの、地中海的なものは、未来という変化に特徴づけられた時間を表象する。セルーの感情(1995:6-7)から次のように演繹することができる。すなわち、彼が周縁へと旅することによって得た成熟は、彼の気付きと夢を持続することを可能にしたばかりでなく、よく知った地中海に新しさを見出すことをも可能にしたのである。

地中海の文学史は、セルーが訪れる場所を選ぶにあたって、主要な指針であった。そこに描かれていたのは、外国の作家が発見し、書き記した場所、場合によっては住みさえした場所であるがゆえに有名になった場所である。セルーが訪れた場所での経験において、神秘的、魅惑的、あるいは当惑させられると感じたものは、それが外的リアリティの条件に関して明らかにするがゆえというより、旅行経験そのものについて明らかにするがゆえに重要であったのだ。ときに彼が出会った人々の生活の一面を強調するのは、前近代の農村的世界における人間の交流の典型だと感じたからである。一方、よく知られたツーリズムの目的地を叙述するとき、彼は嫌悪、シニシズム、明らかな落胆を隠そうしない(Theroux 1995:35)。これらのケースにおいて、セルーは、ツーリストの訪れる場所をリアリティの外側に追いやったフッセル(1980)と共鳴している。

また別の立場もある。パトリシア・ストレースは、90年代初頭に一年間ギリシアに住み、『ペルセポネーとの晩餐』(1996)にその印象を書き綴った女性詩人である。本のはじめの方では、ギリシアを理解しようという欲望が、彼女自身を理解する必要に由来していると述べているが、ストレースの自己発見の旅は、自伝的な意味で聞くことはできない。彼女は読者に対して、直接的経験がどのように一種の自己再帰性を起こさせるのかを滅多に明らかにしはしない。さらに、自己再帰性は、自己変革に帰着することはなく、彼女の自信に

随伴する肯定とともに、傷つきやすさへのストレスの気付きをあおるのである。概して、ストレスは内的経験を探索することを避け、ギリシアでの感情的投資についてほとんど明らかにせず、出てくる判断への反応は、彼女に心中を打ち明けた者に対するものに限定したのだ。

ストレスの作品に自己再帰性と自己への問いかけの調べを与えているのは、鏡への言及においてである(1996:123)。それは、彼女自身のむしろ不確かなイメージを示しているように見え、おそらく、このような装置を用いることは、ポストモダンの時代のアイデンティティに関するイデオロギーを伝えるものである。今日、多くの思想家が、アイデンティティがより安定したものとなっていた前期近代に比して、多様であることを受け入れ、変化を被りうるアイデンティティというものを認めている(Bauman 1996; Kellner 1992:174)。しかしながら、ストレスの断片化され、変わりつつある自己像を映し出す鏡もあれば、まっすぐに向かい、それが映し出す像への問いかけの余地がない鏡もある。かくして、ストレスが、ギリシア社会の鏡としてテレビを見るという傾向、ギリシア人全体の鏡として友人たちを見る傾向は、《他者》を一般化し、同質化する罫を、彼女が避けられていないことを曝け出している。実際、彼女は彼女自身の「私たち」というカテゴリー(アメリカ人)にのみ、異質性が属すると考え、「彼ら」というカテゴリー(ギリシア人)を同質化するのだ(1996:172-173)。

ストレスが投じる自己像は、情報に通じた旅行者の自己像、すなわち、自らの自信と、ギリシアのリアリティの解釈における自信を誇示し、文化理解へと中心化された知的関心を満足させることを追い求める旅行者の自己像である。民族誌的調査の試みにおける内的な旅と外的な旅の、双方の重要性を認めたデュビッシュとは異なり、ストレスは内的経験のレベルが、旅行の空間的・時間的次元と接していないような印象を与える。また、セルーがツーリストから自分自身を隔たせることを重視したのに対して(Dann 1999:172-173)、ストレスがこのことに関心を寄せた

ようには見えない。彼女は、少なくとも友人や知己との社交というレベルでは、地元の人々とあえて関わろうと努めたが、それは《他者》との出会いを、公共の場所における即興の会話に限定したセルーとは対照的である。実際、セルーは、彼が通過する空間に住まう人々からよりも、わざわざ彼が会おうとする他の旅行者や作家の生涯においてこそ、より多くの意義を経験しているように見える。

セルーの自己像は、旅行において慰めや快適さを必要とせず、禁欲的に、快適でなく、不愉快ですらある経験に耐え忍ぶという「リアルな」旅行者の自己像の一つを示している。確かに、セルーとストレスは、異なる経歴とジェンダー・アイデンティティゆえ、異なる見方を経験している。しかし、両者とも、《他者》を一般化するという罫および、はっきりと区別された他者性を際立たせるために固定観念(多くの場合、否定的な)を用いるという罫に陥っている。概して、彼らの行動は広い意味での観光者(sightseers)の行動であり、デュビッシュがそうしたように、内部の者としての地位を保持するための通過儀礼を経験したとは言えない。そして、デュビッシュとは異なり、セルーもストレスも、彼らが旅した場所と、彼らの元々いた場所との弁証法的関係に注意を促すことで、旅した場所について理解するということに自覚的でないように見えるのだ。

結論

旅行者、民族誌家、ツーリストは、彼ら自身に似たものを探しつつ、他所や《他者》の中へまなざしを向ける観察者だと捉えることができる。彼らの話すことや書いたものは、彼らが《他者》の世界を、自らのものであると主張するために覗き込んでいることを示唆している。文明化されたものと未開のもの、近代的なものと伝統的なもの、慣れ親しんだものと異国風のもの、そして自己と《他者》という対立が、大航海時代以来の西洋社会の言説領域を支配してきたのだ。民族誌においても、旅行文学においても、《他者》の表象は、それを仲介として近代の経験を成り立たせるものであ

った。民族誌の仕事は、人類学者が、進歩と郷愁の間の緊張に閉じ込められた近代の世界と「異国性」とを調停しようとする努力を、テキスト生産を通じて反映している。グラバーン (1995:166) によれば、郷愁は、多くのタイプのツーリズムの推進力ともなっており、特筆すべきは、商業的ないし政治的操作を受けやすいということである。旅行者と同じく、民族誌家は、次のような理由で (異国風の)《他者》を理解したのだ。すなわち、《他者》が、近代世界において見出すことのできない性質という意味での差異に固有の (身体的な、あるいは、知的な) 異議申し立てへの機会を保証してくれるのと同様、冒険への機会を保証してくれるという理由である。しかしながら、《他者》を通じた自己の経験は、究極的には、制御と秩序を追い求めるものとなり、また、それらを課されたものとなる。歴史において、コロニアリズム、伝道、民族誌的調査、そしてツーリズムは、自己表象の探求に対して、十分な捌け口を提供してきた。近代に固有の性質である個人主義、モビリティ、そして細分化の外観のもと、そのような探求は、理想的で完全な共同体への郷愁によって動機づけられてきたのだ。このプロセスの最終的な結果は、諸文化、諸社会、諸地誌の対象化であった。

ここ数年、モビリティのメタファーが、自己と《他者》、慣れ親しんだものと異国風のものとといった、人類学者の固定的で、自民族中心主義的なカテゴリーを脱構築するのに役立っている。より重要なのは、自己再帰的な人類学の進展、すなわち、自己自身への気付きと、《他者》の声への当然与えられるべき信用の重要性への気付きを伴う進展が、参加する観察者の主観性の問題を軽減するのに寄与するものとしてあるということである。自己再帰的な傾向の中には、調査の経験を通じた自己変革を報告するフィールドワーカーもいれば、自己発見の旅として調査を経験したフィールドワーカーもいる (Reinhartz 1992)。自伝の創造的使用に興味を持つ人類学者は、次のことを認める。第一に、民族誌家がフィールドに持ち込むアイデンティティが、民族誌家や学者の包括的な説明の下に包含されたり、隠されたりしてはならないということ、そして第二に、

彼／彼女が他の社会や民族集団の中に入ることが、自己規定の境界を通過することを相伴っているということである (Okely 1996)。

人類学におけるように、ツーリズムおよび旅行についての研究においても、ある種、不動のものであったカテゴリーを脱構築する試みがなされてきている。文学において、旅行と同じく、ツーリズムという言葉は、正反対の《他者》との対比において定義されてきた。このような二分法は、ツーリズムとその正反対の《他者》とが、収束することも、さらには連続体を形成することさえ決してないほどに区別され、分離されたものとして知覚されてきたという意味で、定義を問題含みのものとする。ツーリズムを脱構築しようとする努力は、本質的に、構造主義的視点の批判から始まっている。このような批判の系は、ツーリズムを、そうではなくて、プロセスとして取り上げるべきという見解である (Abram and Waldren 1997:2-3)。このような分析的視点の優位性は、ツーリズムに関する経験の多様な性質を強調することができ、同時に、旅行する人々の志向における変化を、時代を通じてたどることができるという点である。概して、プロセスとしてのツーリズムの概念は、ツーリストのアイデンティティが、静的なものでも不変のものでもないという理解に基礎を置いている。それゆえ、次のように仮定することができる。すなわち、毎年同じ場所へと戻ってくるツーリストは、その場所のさまざまな意味を明らかにしようとしており、その場所が彼らにとって経験の空隙を満たすものであることを発見しようとしさえするのだと。そのようなツーリストにとって、海外こそ、自分の属する場所だと感じることでできる場所、単に通過するのではなく、住む場所なのであろう。彼らの知覚において、定期的に訪れる場所を特徴づけるのは、おそらく、《他者》と時間と経験を共有することであろう。

さらに、セルーのような旅行作家が、ツーリストを真の敵であると考え、自身を旅行者のカテゴリーに割り当てようとするのにもかかわらず、彼らが《他者》と時間と経験を共有しているとは考えないだろう。というのも、彼らは消失したリアリティの痕跡を追って

いるからである。旅行者は、外的世界を感覚するにあたって、文学のテキストや他の旅行者の報告に多くを依っており、ツアー運営者や広告の言説に依るところは少ない。このことは、テキスト・ジャンルが、テレビやインターネットといった、まなざしに焦点を当てるポストモダンの視覚的メディアと今なお、肩を並べるのに成功していることを示している（Dann 1999:161）。しかしながら、彼らの生み出す作品を通じて、旅行者は、ツーリストに消費されることになる記号のレパートリーに追加される新しいイメージを生み出していると言える。この意味で、セルーとストレスは、ギリシア人らしさ、イタリア人に典型的な振舞い、トルコ人やギリシア人がお互いに、あるいは、馴染みの薄い者に向けてとる典型的な態度といった記号を、ツーリストが探すのを可能にするような追加的要素を提供するのだ。しばしば旅行者において見られる、このような実践とは対照的に、人類学者は、彼らが研究し、還元主義的論理を適用することなしに、地方と国民全体のレベルの間の結びつきを探すような共同体の固有性を論証する。この意味で、人類学者は、旅行者が探す自給自足の共同体の概念に対して、異議申し立てをしてきた。

最後に、再帰性の話題に関していえば、再帰性は、《他者》との関わりという状況において、民族誌家および旅行者の自己分析への洞察を与えうるものである。再帰性は、経験の結果であり、他なるものに意味を与える資源としての自己の自覚的使用に関連するものである。本論において検討された諸例の中で、デュビッシュの民族誌的報告だけが、自己再帰性の創造的な使用を明らかに示している。それは、いかにして人類学者が、自己の多様な次元を活性化しうるのかを示し、いかにして《他者》が、内における彼女の状況という条件を反映して、背景へと退くのかを明らかにしている。外国らしさを探して周縁を旅する旅行作家は、旅行の内的次元に自覚的であるが、自己再帰的な仕方によってそうしているのではないことは明らかである。セルーのように、彼らは基本的にツーリストから隔たったところに身を置くことを追求するだろうが、このよう

な気遣いは、彼らのアイデンティティの感覚の本質的な要素なのだ。ストレスのように、もっぱら、言語的、社会的、文化的本性の観察を、解釈者の（権威づけられた）説明へと改変する作家の自己を映し出そうと望む者もいるだろう。だが、そのプロセスにおける彼／彼女の自伝的役割は隠されているのだ。そのような旅行作家は、人類学者とは異なり、次のことに自覚的ではない。すなわち、彼らが《他者》に関して生み出すイメージや物語が、彼らの文化に属するアイデンティティと関心へと直接的に結びついたものであるということに、自覚的ではないのだ。（完）

参考文献

Abram, S., and J. Waldren

1997 Introduction: Identifying with People and Places. In *Tourists and Tourism: Identifying with People and Places*, S. Abram, J. Waldren and D. Macleod, eds., pp. 1-11. Oxford: Berg.

Andonopoulou, A.

1997 J.J. Bachofen: The Greek Voyage. In *Minutes of the International Symposium on Travels to Greece in the 18th and 19th Centuries*, pp. 27-36. Athens: University of Athens (in Greek).

Augustinos, O.

1994 *French Odysseys: Greece in French Travel Literature from the Renaissance to the Romantic Era*. Baltimore MD: The John Hopkins University Press.

Bauman, Z.

1996 From Pilgrim to Tourist, Or a Short History of Identity. In *Questions of Cultural Identity*, S. Hall and P. duGay, eds., pp. 18-36. London: Sage.

Boorstin, D. J.

1964 *The Image: A Guide to Pseudo-Events in America*. New York: Harper.

Bruner, Ed

1991 The Transformation of Self in Tourism. *Annals of Tourism Research* 18(2):238-250.

- Butler, J.
1993 *Bodies that Matter*. New York: Routledge.
- Clifford, J.
1986 On Ethnographic Allegory. In *Writing Culture: The Poetics and Politics of Ethnography*, J. Clifford and G. Marcus, eds., pp. 98-121. Berkley CA: University of California Press.
1988 *The Predicament of Culture: Twentieth-Century Ethnography, Literature and Art*. Cambridge MA: Harvard University Press.
1997 *Routes: Travel and Translation in the Late Twentieth Century*. Cambridge MA: Harvard University Press.
- Cosmos Travel.
1996 *Cosmos Travel*, Summer issue 17.
- Crick, M.
1985 "Tracing" The Anthropological Self: Quizzical Reflections on Field Work, Tourism, and the Ludic. *Social Analysis* 17:71-92.
- Dann, Graham
1999 Writing Out the Tourist in Space and Time. *Annals of Tourism Research* 26(1):159-187.
- Derrida, J.
1981 *Positions*. Chicago: University of Chicago Press.
- Dubisch, J.
1995 *A Different Place: Pilgrimage, Gender and Politics at a Greek Island Shrine*. Princeton NJ: Princeton University Press.
- Fabian, J.
1983 *Time and the Other: How Anthropology Makes its Subject*. New York: Columbia University Press.
- Fussell, Paul
1980 *Abroad: British Literary Travelling between the Wars*. New York: Oxford University Press.
- Graburn, N.
1995 Tourism, Modernity and Nostalgia. In *The Future of Anthropology: Its Relevance to the Contemporary World*, Ahmed A and C. Shore, eds., pp. 158-178. Atlantic Highlands NJ: The Athlone Press.
- Hastrup, K.
1992 Writing Ethnography: State of the Art. In *Anthropology and Autobiography*, J. Okely and H. Callaway, eds., pp. 116-133. New York: Routledge.
- Herzfeld, Michael
1987 *Anthropology through the Looking Glass: Critical Ethnography in the Margins of Europe*. Cambridge: Harvard University Press.
- Kellner, Douglas
1992 Popular Culture and Constructing Postmodern Identities. In *Modernity and Identity*, S. Lash and J. Friedman, eds., pp. 141-177. Oxford: Basil Blackwell.
- Laclau, E.
1990 *New Reflections on the Revolution of Our Time*. London: Verso.
- Livingstone, D.
1857 *Missionary Travels and Researches in South Africa*. London: John Murray.
- MacCannell, D.
1989 *The Tourist* (2nd ed.). London: Macmillan.
- Malinowski, B.
1922 *Argonauts of the Western Pacific*. London: Routledge & Kegan Paul.
1967 *A Diary in the Strict Sense of the Term*. London: Routledge & Kegan Paul.
- McGrane, B.
1989 *Beyond Anthropology: Society and the Other*. New York: Columbia University Press.
- Minh-ha, T.
1994 Other Than Myself/My Other Self. In *Travellers' Tales: Narratives of Home and Displacement*, G. Robertson, M. Mash, L. Tickner, J. Bird, B. Curtis and T. Putnam, eds., pp. 9-26.

- New York: Routledge.
- Neuman, M.
1992 *The Trail Through Experience: Finding Self in the Recollection of Travel*. In *Investigating Subjectivity: Research on Lived Experience*, C. Ellis and M. G. Flaherty, eds., pp. 176-201. Newbury Park CA: Sage.
- Okely, J.
1992 *Anthropology and Autobiography: Participatory Experience and Embodied Knowledge*. In *Anthropology and Autobiography*, J. Okely and H. Callaway, eds., pp. 1-28. London: Routledge.
1996 *Own or Other Culture*. London: Routledge.
- Pratt, M. L.
1986 *Fieldwork in Common Places*. In *Writing Culture: The Poetics and Politics of Ethnography*, J. Clifford and G. Marcus, eds., pp. 27-50. Berkeley CA: University of California Press.
- Reinhartz, S.
1992 *Feminist Methods in Social Research*. New York: Oxford University Press.
- Rojek, Chris
1993 *Ways of Escape: Modern Transformations in Leisure and Travel*. London: Macmillan.
1997 *Indexing, Dragging and the Social Construction of Tourist Sights*. In *Touring Cultures: Transformations of Travel and Theory*, C. Rojek and J. Urry, eds., pp. 52-74. London: Routledge.
- Rojek, C., and J. Urry
1997 *Transformations of Travel and Theory*. In *Touring Cultures: Transformations of Travel and Theory*, C. Rojek and J. Urry, eds., pp. 1-19. London: Routledge.
- Rosaldo, R.
1986 *From the Door of His Tent: The Fieldworker and the Inquisitor*. In *Writing Culture: The Poetics and Politics of Ethnography*, J. Clifford and G. Marcus, eds., pp. 77-97. Berkeley CA: University of California Press.
- 1989 *Culture and Truth: The Remaking of Social Analysis*. Boston: Beacon Press.
- Stocking, G.
1983 *The Ethnographer's Magic: Fieldwork in British Anthropology From Tylor to Malinowski*. In *Observers Observed: Essays on Ethnographic Fieldwork*, G. Stocking, ed., pp. 70-120. Madison WI: University of Wisconsin Press.
- Storace, Patricia
1996 *Dinner with Persephone*. New York: Pantheon Books.
- Theroux, Paul
1995 *The Pillars of Hercules: A Grand Tour of the Mediterranean*. London: Penguin.
- Thornton, R.
1983 *Narrative Ethnography in Africa, 1850-1920: The Creation and Capture of an Appropriate Domain for Anthropology*. *Man* 18:502-520.
1985 *Imagine Yourself Set Down ... March, Frazer, Conrad, Malinowski and the Role of the Imagination in Ethnography*. *Anthropology Today* 1(5):7-14.
- Turnbull, C. M.
1961 *The Forest People: A Study of the Pygmies of the Congo*. New York: Simon and Schuster.
1965 *Wayward Servants: The Two Worlds of the African Pygmies*. London: Eyre and Spottiswoode.
- Tyler, S. A.
1986 *Post-Modern Ethnography: From Document of the Occult to Occult Document*. In *Writing Culture: The Poetics and Politics of Ethnography*, J. Clifford and G. Marcus, eds., pp. 122-140. Berkeley CA: University of California Press.
- Urry, J.
1990 *The Tourist Gaze: Leisure and Travel in*

¹ cf. 遠藤英樹『観光社会学の歩き方』、春風社、2007年、1 講。

² cf. 大橋昭一『観光の思想と理論』、文眞堂、2010 年、13-17 頁。

³ ギリシア北部の山脈。

⁴ いずれも武勲詩の作者。

⁵ 社会学者ブルデューの用語。当人に意識されないままに獲得され、持続的に機能する性向の総体。

『ツーリズムにおける哲学的諸問題』 所収論文・解説と翻訳【1】

「ツーリズムとは何か？諸定義、理論的諸段階、諸原理」（サンパウロ大学講師 Alexandre Panosso Netto 著）について

（解説と翻訳）神戸夙川学院大学観光文化学部講師 原 一樹

【目次】

1. 解説
2. 翻訳
3. 参考文献

1. 解説

本稿は、英国 Surrey 大学 John Tribe 教授編集・2009 年出版の『ツーリズムにおける哲学的諸問題』（“Philosophical Issues in Tourism”, Channel View Publications）に収められている、サンパウロ大学 Alexandre Panosso Netto 講師による論文の解説と翻訳である。

『ツーリズムにおける哲学的諸問題』は、「哲学的」と銘打つ著作にふさわしく、ツーリズムに対して「真」・「善」・「美」という 3 つの角度からアプローチする 16 本の論文が収録されている。いわゆる「倫理的ツーリズム」や「スピリチュアル・ツーリズム」に関する論文も収録されているが、その中でも Panosso Netto 氏の論文は真正面から「ツーリズムとは何か」という極めて根源的かつ本質的な問いを投げかけている点で、「哲学的」という形容詞に特に値するものだと言えるだろう。

Panosso Netto 氏がこの論文で扱う対象はツーリズムの「諸定義」・「理論的諸段階」・「諸原理」である。詳細は本文をお読みいただきたいが、氏は先行する理論家達の主張を手際よく整理した上で彼なりの視点からコメントを加え、最終的にツ

ーリズムに関する彼なりの定義と幾つかの原理を提案している。まずもって我々のような後学の徒にとってのこの論文の有難さは、それがツーリズム理論に関する 1 つの地図を与えてくれる点にある。氏の紹介する各理論家の言説についてはなかなか理解しづらい、或いは納得し難い部分もあるが、各自が直接にその理論家の言説に赴きその意義を検討すべきだろう。

新しい造語などを用いず平易な英語で書かれている論文である為、訳出の上で特別な工夫が必要なのでは無かったが、訳者の拙い語学力およびツーリズム理論に関する浅学の故、思わぬ誤訳をしてしまっている可能性は否定できない。読者諸賢の御指摘・御叱責を待つのみである。なお、人名に関しては参考文献利用の便宜や訳出の困難さに鑑み、原則として英語表記を残した。

2. 翻訳

はじめに

ツーリズム関連の主要諸概念は、レジャー、エンターテインメント、ホスピタリティ、レクリエーションである。しかし、ツーリズムの定義は最も困難で研究者達は未だ合意に到達していない。Fuster(1971), Leiper(1979), Sessa(1985), Molina(1991), Palomo(1991), Ascanio(1992), Jafari(1995), Beni(1988), Boullon(2002)などの著者達はツーリズム研究出身ではなく、経営、建築、生物学、コミュニケーションなど、別領域の出身である。こ

の事実は、研究者達が説明をそれら別領域の1つへと「還元」する傾向を持つ故に、問題を生み出している。各研究者は自分の出自である科学の持つパラダイムや前提から出発しようとし、それ故に互いに合意に達しない。言い換えれば、似たような諸問題に対し幾つもの異なるアプローチがあるということになるだろう。

この章ではツーリズムの定義に到達することの難しさにアプローチする。ツーリズムとは何であるかに関して、諸機関や研究者達が与える幾つかの説明を提示し分析する。Kuhn (2001) に依拠する理論的モデルの幾つかを議論し、これまで展開されたツーリズム理論の学術的分断を示すこととなる。論文の最後で私は、ツーリズムにおける基礎的で、かつ望ましい幾つかの原理を強調するつもりである。加えて私はツーリズムの定義に関する新たな提案も示そうと思う。

ツーリズムの諸定義

最初に、ツーリズムの定義を確立することの重要性を問う必要がある。

Burkart と Medlik(1974:39)は、この問題に次のように答えている。

「[・・・] ツーリズムに関するより正確な定義は、多くの目的の為に要請される。まず研究の為に。或る現象を体系的に検討する為には、それが何をカバーするかを定義せねばならない。次に統計的目的の為に。或る現象が測定される時には、それが定義されていなければならない。実際問題として、測定に利用可能な技術がしばしば測定されるものを定義する。第三に、立法的・管理的目的の為に。法律は特定の活動には適用され、他の活動には適用されない。第四に、産業的目的の為に。特定の経済活動は市場研究を産み出し、産業機関形成への基盤を与える。」

このような必要性にもかかわらず、研究者や専門家の間ではツーリズムについて全員が同意する定義が未だ存在していない (UNWTO—世界観光機関による定義でさえそうである)。提出された

諸々の定義は批判され、しばしば改善される。そしてこの事実はツーリズムが複雑な現象だという問題を強調するものだ。Fuster (1971) は、1800年の『オックスフォード簡易英語辞典』が初めて「ツーリスト」という語を掲載したと言う。「ツアー、或いは幾つかのツアーを行う者。それをレクリエーションの為に。楽しみや文化を求めて旅行する者。風景など自分自身の関心対象となる多くの場所を訪問する者」がその定義である。1811年には「ツーリズム」という語は次のように定義されている。「ツアーに関する理論と実践。楽しみの為の旅行。」Fuster(1971)が引用するHaulotによると、「ツアー」という語はヘブライ語に由来し、その起源を聖書や民数記に持つ。そしてその語は発見、旅、認識、探検などの概念に対応している。

Wahab (1977) は、最初の学術的定義は Herman von Schullern がその著作『観光と国民経済』(“Fremdenverkehr und Volkswirtschaft”) で1911年に与えたと示唆する。それによると「ツーリズム」とは「諸事業の総体。主に、国家・都市・地域の内外における外国人の入場・定住や移動に直接結びつく経済的諸事業の総体」である。

UNWTO は主に政治的・商業的・規範的諸原理に関与してきており、概念的側面には関与していない。UNWTO の定義は幾つかの国や機関で採用されており、ツーリズムに関する「公式」定義とされてきた。以下の文面に従えば、その定義は技術的なものである。

「ツーリズムは、人々がレジャーや仕事や他の目的の為に、一年以内の長さで自身の日常的環境以外の場所へ旅行し滞在する活動から成る。旅行先や滞在先での諸活動は、訪問先内部から報酬を受ける活動とは無関係なものとする。」

仕事や報酬付きの活動により動機付けられる移動をツーリズム概念から排除する定義も存在する。仮にそうすると、私は「ビジネス・ツーリズム」部門について語れなくなってしまう。しかし、仕

事の為に旅行する人々も、インフラや旅行者向けサービスを利用するのだから、確かにツーリズムの一部であるはずだ。更に、ビジネス旅行にもレジャーやエンターテインメントの活動が含まれる可能性もあろう。しかしながら今日では、ツーリズムの語はレジャー目的の旅行に主に結び付けられ、人々は多くの場合ビジネス旅行の人々をツーリストだとは認めようとしない。

Wahab (1977:26) はツーリズムを以下のように定義している。

「一国内で、或いはその地理的国境を越えて、人々のコミュニケーション手段や相互作用のリンクとして役立つ、人間の意図的活動。ツーリズムは報酬付き活動の実現ではない必要性を満たす目的を持ち、一つの地域・国家・大陸から別のそれへと人々が一時的に移動することから成る。訪問先国家にとりツーリズムとは、見えない輸出を作り出しつつ、その生産物が地元で消費される産業である。」

これは最も完全な定義だが、やはり報酬付きの移動を排除している。Jafari(1995:5)もまた彼の定義について批判を受けている。

「ツーリズムとは、日常的環境から離れた人間（ツーリスト）、ツーリズムに関する装置やネットワーク、日常的世界（非・ツーリズム）と非日常的世界（ツーリズム）及びそれらの弁証法的関係に関する研究である。」

Jafari の定義は鍵となる契機に関係している。即ち、研究である。この定義においてツーリズムとは、(1)移動、(2)ツーリズム部門の企業、(3)人間の移動により喚起されるインパクト、の3つに関する研究となる。この点について私は、ツーリズム現象とツーリズム研究との定義の仕方を知るのが重要だという事実を強調した Tribe(1997)に賛同する。Jafari は現象と研究とを混同している。Tribe(1997:640)もまた、自らの定義を提出する。

「ツーリズムとは本質的に人間により為される活動である。そしてツーリズムが生じたと言われる為に最低限存在せねばならない必要な特徴は次のものである。即ち、或る場所から別の場所への旅行行動、その旅行に参加する為の特定の動機群（仕事の為の通勤は除く）、そして目的地

における活動への参与である。」

Cooper(1993:4)は、Leiper(1979)により一つのシステムの形で提案されたツーリズムに関する着想から出発し、次のように述べる。

「ツーリズムは、旅行経験をもたらす為に何らかのやり方で組み合わされる諸個人や企業群、組織群、様々な場所の全体と考えられうる。ツーリズムは多元的で多面的な活動であり、多くの生活や多くの異なる経済活動に触れるものである。」

諸々の定義に関する混乱や困難にもかかわらず、この主題に関心を抱く研究者は多い。或る者は認識論が与える探究の理論的基盤を利用し、Thomas Luhn, Karl Popper, Edmund Husserl, Mario Bunge, Imre Lakatos といった科学哲学者達の名を挙げることもある。

定義に関する行き詰まりを打破する目的で、UNWTO は 1991 年に旅行とツーリズム統計学に関する国際会議を開き、ツーリズム部門に関する一つの定義を創り出した。しかしそれでさえ批判を免れえず、定義に関する問題はいまだに存在している。しかし近年に至り概念が洗練されてきており、ツーリズム部門もその意味と定義について合意に達しつつある。

ツーリズムの諸モデルと概念化 ツーリズムにおける理論的諸段階

定義に関して様々な問題を議論してきたが、結果として定義することは説明することとは異なる点が明らかとなった。この意味で、ツーリズムという主題に関して彫琢された諸理論をより深く研究する必要がある。基礎に関わる3つの研究者グループが、ツーリズムを理解する為に Kuhn(2001)による科学パラダイム理論を利用している。しかしそれらを議論する前に、科学パラダイム理論を手短かに説明する必要があるだろう。

各科学は研究者達に方向性を与える役目を果たす固有のパターン（パラダイム、モデル、基礎や原理）を持つ。Kuhn は科学の進展は跳躍や断絶

により生じると理解した。彼にとって、現状のパラダイムに満足しない科学者は、研究主題をより良く説明する他の理論を探索できる。パラダイムとは理論的で価値的な諸概念であり、科学者共同体はこれらの諸概念や価値を受け入れ利用する。パラダイムは、或る主題に関して普遍的に認められ、科学の進展の価値を保証する諸規則を定義するものである。

Kuhn (2001) によれば、科学にはパラダイム形成以前に一つの段階、即ち前パラダイムの段階が存在する。それは、そこで理論が創造され、形成中の或る科学の課題や困難に直面する契機だとみなされる。例えば新たな問題群の為には新たなアプローチ方法が創造される故、それらの問題群に答えることは困難や信用可能性の欠如が生じる場合がある。この段階では、この新理論のもと活発に研究する人々にしか進展は知覚されない。

Kuhn 理論を使えば、ツーリズム研究に関する学術的共同体で最も受け入れられているシステムの見解がそこにおけるパラダイムだとみなされうるだろう。しかし、ツーリズム分野においては研究者達を同じ研究方法に集合させようような唯一の理論は存在していない。これを証明する為に、他のアプローチを検討してみよう。

諸々のアプローチが理論的諸段階に分割されているとみなすことは、以下の理由により有益である。第一に、研究者はツーリズム分野における諸研究について広く包括的な観念を持つことができる。第二に、あらゆる理論や理論家がそのアプローチに応じて分類されうることとなる。第三に、諸理論を理解し、最終的にツーリズムに関する様々な理論を分類し特徴づけることを望む学生にとって、この考え方は有益な道具となる。

第一のグループは「前パラダイムの」とみなされる。このグループは、ツーリズムに関する理論的分析を提案した初期の著者達により形成されている。この段階を代表する著者は Hunziker と Krapf(1942)、Fuster(1971)、Burkart と

Medlik(1974)、Jafari と Ritchie(1981)らである。

第二段階は一般システム理論を広めた著者達により形成される「ツーリズム・システム」である。このグループに属する著者は Cuervo(1967)、Wahab(1977)、Leiper(1979)、Sessa(1985)、Beni(1988)、Boullón(1995)、Martinez(2005)らである。「ツーリズム・システム」はツーリズム研究における一つのパラダイムである。というのも、システムの視点は広く普及しており、この領域の研究における射程と有効性を持ち、現時点まででツーリズム現象のダイナミクスを最もよく説明する理論であるからだ。もっとも、理解を困難にさせる幾つかの契機をいまだ示すこともあるのだが。

第二と第三の段階の間に位置づけられる著者達から成る、システム理論からの移行領域が存在する。この領域は Krippendorff(1985,1989)、Molina(2003)、Ascânio(1992)、Garcia(2005)等から成るが、彼らはその研究の基礎を一般システム理論になお置きつつも、殆ど新たなアプローチと言える進展を示している。

第三の理論的段階は「新たなアプローチ」と称される。それは多様で革新的な分析を提出することで第一の側面から区別される。この段階に属する著者達の中には、「ツーリズム・システム」パラダイムを乗り越える為の図式や解釈を提案する者もいる。このグループは Urry(1996)、Tribe(1997)、Trigo(1998,2003)、Nechar(2005)等から成る。図 3. 1 はこの説明を図示するものである（図は省略した一訳者）。多くの著者達がこれらの段階のいずれかへと分類されうるだろうが、それを行うことがこの章の目的ではない。代表者数名に言及し、各段階の 2 つの理論を分析することにしよう。

前パラダイムの段階

Luis Fernandez Fuster Fuster(1971)は彼のアプローチを理論と実践とに分ける。彼にとって技術的な理論が存在することは、ツーリズム概念が科学とみなされるべきことを意味しない。ツーリ

ズムが科学となるのは、体系化されていて論理的で価値のある教説が確立されることによってのみである。学術研究に関する彼の立場は、ツーリズムという主題が一つの科学的領域の特殊化として取り扱われるべきだというものである。「今日私達が抱える現象が科学的特殊化のカテゴリーを要求するに足る実体を伴う知識体系であることは明らかだ。」(Fuster1971:21)

Fusterはツーリズムという主題が科学としてアプローチされるべきだと明言しているが、それは他の諸科学と乖離したものではない。「というのも、ツーリスト現象に関する研究は、論理的に見て他の諸科学：経済学、統計学、社会科学等々を援用することで完遂されるからである。」

(Fuster1971:21) この著者にとって、ツーリズムに関する総合的研究（或いはツーリスト科学）の体系化はその研究方法に依存している。しかし彼は次のようにも考える。

「ツーリズムにおいてはいかなる方法論も適用されてこなかった。というのも、その特定の諸側面に関する多くの書誌の蓄積があるにもかかわらず、ツーリズムはその総合性においてのみ研究対象となってきたからである。」

(Fuster1971:21)

ツーリズムにおける方法論の確立は、探究される内容に依存することとなるだろう。なぜならば、もしツーリストが単独でアプローチ対象となるならば、対象を研究する為に心理学が必要となるだろうからである。結果として私は、その研究に有用な方法は心理学理論における方法だと推定するだろう。こうして Fuster は特殊な方法を創造するのではなく、他のディシプリンに属する諸々の方法を利用することを提案する。彼にとってツーリスト現象はホモ・ツーリスティクス (*homo turisticus*)、ホモ・ポリティクス (*homo politicus*)、ホモ・エコノミクス (*homo economicus*) の研究には還元されず、その研究はこれら複数のアプローチ間に関係を確立せねばならない。彼の態度はツーリズムに対する部分的アプローチを批判し、

包括的分析を提案するものである。

Jafar Jafari と Brent Ritchie Jafari と Ritchie(1981)はツーリズム分野における教育に分析と議論の基盤を提供しようという目的を持ち、ツーリズムを学ぶには超領域的方法がベストだと考える。しかしこのアプローチの持つ幾つかの限界により、為し得る最善の事はマルチ領域的、或いは間領域的な手法を受け入れることである。彼らの超領域的研究を図 3.2 に示した（図は省略した一訳者）。

このモデルによると、「ツーリズム」を研究する領域はツーリズム部門の中で議論の中心に位置づけられるべきものとなる。ツーリズムを研究する諸領域はその周囲を取り囲み、研究に寄与する他の諸部門から組織される。例えばツーリズム地理学は地理学部門に位置づけられ、そこから私はツーリズム現象の地理学的側面の研究に関する基礎を得ることとなるのである。

発表当時このアプローチは革新的で、アルゼンチン、ブラジル、メキシコ、ヴェネズエラ等の諸国家における大学学部コースの教育プログラムの幾つかの設計の基礎となった。このポジティブな側面にもかかわらず、それは Tribe(1997)と Netto(2003)により批判的に分析された。

「ツーリズム・システム」の段階

Raymundo Cuervo Cuervo(1967)はツーリズムに応用された一般システム理論の参照モデルを提案し利用した最初の研究者である。この点は Acerenza (2002) や Martinez (2005) によっても確証されている。Cuervo によると、ツーリズムとは以下の下位セットから構成される大きな一つのセットとなる。

C1) 航空、自動車、鉄道、海運、河川交通等のコミュニケーションの諸手段

C2) ホテル、モーテル、ホステル、ロッジ等のホスピタリティ諸施設

- C3) 旅行会社
- C4) ツアーガイド
- C5) 移動する人々が食事サービスを受ける、レストラン、カフェその他の施設
- C6) 旅行者用のありふれた土産物、旅の記念、その他消費財販売の為の商業施設
- C7) 旅行者用のありふれた土産物、旅の記念、その他消費財の製造者
- C8) 典型的な諸対象生産の為の技能
- C9) その顧客が移動する人々の大部分を構成するレジャーの中心地

これらの下位セット群それぞれが、例えば以下のように他の下位セット群へと分割される。

C1) = {A1、A2、A3、・・・、An}

C1 = 輸送である場合

A1) = 国内航空輸送

A2) = 国際航空輸送

A3) = 国内バス輸送・・・

An) = 他種類の輸送

分析の基礎は、これらのセットの機能がコミュニケーションであるという仮定に置かれている。この点は、次のテキストのように説明される。

「もし私が、旅の途中でコミュニケーションが起きることを受け入れるならば、私は有効な仮説としてツーリズムのセットは一つの<システム>であることを受け入れうる。そして私はまたこのシステムが持つ機能を予め規定することもできる。この場合、それはコミュニケーションである。」(Cuervo1967:33)

最後に著者は、ツーリズムとはコミュニケーションのシステムであり、世界平和の為にポジティブで有益な情報を伝えようと主張する。しかしそれはネガティブなものでもありえ、人間関係の調和に影響を及ぼしうる。これはシステムがポジティブなコミュニケーションの作用者として働き、自らを維持することへの挑戦ともなる。

Salah-Eldin Abdel Wahab Wahab(1977:3-4)は、人間がツーリズムの主要契機の一つであると言う。

「ツーリスト現象の解剖学は基本的に3つの要素から成り立つだろう。即ち人間(ツーリスト行動の作り手としての人間的契機)、空間(ツーリスト行動により必然的にカバーされる物理的契機)、そして時間(旅行や目的地での滞在により使用される時間的契機)である。」

彼の観点はツーリズムとは人間の移動へと言及する現象(当座の分析の為の新語)だというものである。彼にとって、「ツーリスト現象研究における行動からのアプローチは、現象の人間の側面や、複数国家にわたる人々のコミュニケーション・リンクの形成におけるその役割を強調するのに適切な方法である。」(Wahab1977:3)

ツーリズムの現代の形は、社会圏上のシステム基盤を表している。これは主に相互依存性や多くの諸要素間の相互作用により生じ、その目的は「健全な」ツーリズム産業が一貫性を持ち機能することである。

後に彼は言う。「全システムは2つの部分から成る。1つは一時期におけるその<状態>を記述する部分、もう1つは時空という次元において継起する諸状態を記述する<ダイナミック>な部分である。」そして彼は説明を続ける。ダイナミック・システムを通じた分析と「時空の『連続体』におけるパターン知覚は、未来のイメージの形成を可能とする。そしてそのことが、現在の行動に基礎を置きつつ、私が未来に向けて意思決定することを可能とする。」(Wahab1977:16)

この著者は彼のシステムがどのようなものになるかのモデルを提示しなかったが、彼の提案から、私は彼のモデルが図3.3に示されるようなものとなるだろうと推測する(図は省略した一訳者)。

ツーリズム・システムの段階から新たなアプローチ段階への移行

Sergio Molina Molina(2003)の提案はポスト・ツーリズムの提案である。それはツーリズムという現象が誕生以来、3つの基本的発展段階へ分割されるという理解に依拠している。即ち、ツーリ

ズム以前、ツーリズム、ポスト・ツーリズムである。最大の学術的貢献が存在するのはこの最後の段階においてである。

ツーリズム以前とは 17 世紀や 18 世紀のグランド・ツアー時代に行われていたツーリズムで、その時代には「裕福で高貴な商人一家の長男が周遊旅行をした。」この時代、技術レベルは相対的に低く、初歩的設備を伴う管理・会計システムも存在していなかった。現在も、ツーリズム以前的な諸特徴を持つアトラクションを提供する会社も存在するが、「<ツーリズム以前>の存在はいかなる輕蔑の意味も含んでいない。」(Molina2003:23)

第二段階はツーリズムの段階である。それは 3 つのカテゴリーに区分される。

- (1) 19 世紀に生まれ第二次世界大戦期まで続した原初的な産業的段階
- (2) 1950 年代から 1990 年代までの成熟した産業的段階
- (3) 1980 年代半ばから生じたポスト産業的段階

最後に、1990 年代から生まれたポスト・ツーリズム段階が存在する。

「(ポスト・ツーリズム段階は) それ以前のツーリズムに関する幾つかの基本的考察を変化させる新たなパラダイムと歴史的カテゴリーに貢献する。高度に効率的な技術と 1990 年代の社会的文化的現象が、産業的なタイプのツーリズムの連続性を変容させる原理と対照的に、ポスト・ツーリズムの発展を説明する。」(Molina2003:27)

彼の分析は諸カテゴリーにより為されており、彼自身のアプローチを説明する為の他の諸定義を使用している。著者がポスト・ツーリズムはアミューズメントパークで利用される技術により特徴づけられると言う場合、彼は自らのアプローチを説明する為に技術というカテゴリーを利用している。ポスト・ツーリズムは歴史分析におけるポストモダニズムと強い関係を持つ分析カテゴリーである。

Alfredo Ascânio この著者はツーリスト研究に焦点を当て、「旅行社会科学 (SST)」という新たな科学的領域を創造することを提案する。彼によると、この新たな科学は全種類の旅行とその様々な文脈に言及せねばならない。「それは旅行者とホスト側の相互関係と同様に、彼らの行動や、地理学的空間とその文脈について脱領域的に研究すること意識的に継続する。」(Ascânio1992:188)SSTの仕事は「旅行方法の区別される諸側面の内的・外的関係や、旅行の利用法とその影響を、個別領域の分析方法と同様に発見し説明すること」となるだろう。(Ascânio1992:189)

Ascânio はまた地理学、心理学、経済学といった個別科学の内側にも SST の活動領域がありうると言う。彼はツーリズムが一つの科学であることを信じ、こう言う。

「ツーリズムは、ツーリストを受け入れる特定のコミュニティの質や生活様式を向上(低下)させる現象に関する科学である。基本的問題は、受け入れ側コミュニティがコストよりも便益を受け取ることを目指し、ツーリスト活動の便益と損益を知ることである。」(Ascânio2007)

Ascânio にとって、ツーリズム研究は訪問者とホスト側との関係及びそれにより生み出されるインパクト、換言すれば受け入れ側コミュニティと一時的訪問者との相互依存的コネクション、ということになるだろう。彼の提案は革新的なものだ。しかし、訪問者とホスト側との関係はホスピタリティ研究、社会学、人類学によってより良く研究されるということもありうる。加えて著者は、ツーリズム科学という提案を科学的に正当化はしていない。

新たなアプローチの段階

Marcelino Castillo Nchar Nchar(2005)の提案は「批判的認識論」と呼ばれる。その目的はコンテンツ批判ではなく批判的コンテンツを前にして、ツーリズムに関する反省的で解釈的な批判を実践することである。それは人が知識構築に際

して期待しうる全てのコンテンツの理由、大きさ、解釈を検討する活動である。批判的概念に結びつくのは、解釈という概念である。解釈することは、単なる心理的構築物としての基本的な諸本質の世界へと言及するような、単純な記述以上のものである。解釈することは構築することであり、理性が抽象的手法で構築するものを実践へともたらすことである。解釈することは、伝達される諸感覚のうちにある堅固さを見抜くことを含意する。諸感覚の探求は抽象的なものである。

Nechar(2005)は、私達が科学的知識の危機に在るのみならず、哲学的な危機、それ故思考の基盤の危機にも在ると言う。彼は思考における「演繹―帰納」プロセスの回復を提案する。それはツーリズムに関する堅固な知識の構築を含むだろう。これは「伝統的な科学的ロゴス」の堅固さではなく、また論理的プロセスの「科学性」を支配し、科学的知識の内部と外部とを確定する合理性を支持するような基準の堅固さですらない。それは、言語が思考を形作り、実在を分節化し言説を関係づける場所において、実在が言語により欺かれる手法に関するものなのである。「ツーリストのリアリティ」の理解と意義に関する新たな提案は、解釈学・現象学・弁証法や他の実証主義的図式を利用するもので、ツーリストのリアリティに関する批判的提案を可能とする。

この批判的提案は、学術生活において習慣化している特定の論理的運動を前面に押し出すものである。それはまた、既成の方法論的規則を「正しく使用する」ことに依拠するのみで構築された知識の論理や意味や含意を検討しない諸研究が、ツーリストに関する知識の確実性、堅固さ、大きさのレベルを評価することの非合理性を示すものでもある。ツーリズム認識論におけるこの批判的・反省的・解釈学的提案は、異なる意味と操作プロセスを打ち立てるシステムと、明瞭な認識論的母胎とを要求することができるだろう。

Luiz Gonzaga Godoi Trigo ポストモダニティの文脈におけるツーリズムが、Trigo (1998) の分析の中心である。彼の研究は 20 世紀末におけるサービス部門を考察する。彼の提案は、新たな技術、労働世界、教育の変化、そしてマスツーリズムに関する時間空間の概念に直面する現代社会に浸透している諸問題を理解しようとするものだ。

彼はまた、ポスト産業社会での第三次産業部門における専門家の仕事を構造化する為の適切な教育哲学はいかなるものかをも議論する。市場が「思考する人々」を必要とするという原理を念頭に置きつつ、哲学がサービス専門家の養成を改善する為に貢献すると彼は言う。

以下のテキストに従えば、彼は世界の諸条件の変化により形成される新たな国際秩序を分析し、ツーリズムとレジャーを新たな社会モデルの樹立における基本的契機だと言っている。

「ポストモダンという条件が、安楽と厚生に基礎を置く新たな生活様式を導く。先進国のハイテクと経済力により、ツーリズムとレジャー分野における重要プロジェクトへの投資が可能となった。」(Trigo1998:65)

Trigo はツーリズムが現代世界を変容させる力の一つであると分析し、この力がいかに活動し自らを展開させるかを示している。研究への彼の提案は哲学を手段としているが、というのもこの科学は人々を自らの行動と社会的世界における役割に関してより反省的に為しうるからである。哲学はこの分野における矛盾やパラドクスや理解されていない諸側面を明らかにしうるツールの一つである。このような批判は、それがツーリズムの持つネガティブな諸側面（インパクト、経済的・性的搾取、実存的相対主義等）を暴露することで悩みの種をもたらしもする。しかしこの同じ批判が反省的研究、情報と科学的知識の進展、社会に関するより十全な理解をももたらす。加えて、文化をより社会的で自らを維持しうる実践へと向け直す基礎的側面として哲学が回帰することを促進しもする。

ツーリズムの諸原理

「原理」という語は、知識、法、理論や概念を展開する為の基礎として役立つ基本的で原初的な命題だと考えられている。私が原理について語る時には、何ものかの起源にも言及している。ツーリズムの本質とは何か？何が変化しないものか？何かがツーリズムだと言われる為には、どのような属性が存在していなければならないか？これらに対する答えの欠如は概念に対し不完全さをもたらし、そしてそれは生産的で知的な部門においては時に懐疑と不信を以って眺められる。それはまたツーリズムに関する認識論的基盤の科学的な不完全さを暗示することとなる。

故に、諸原理を打ち立てることは根本的に重要であり、それが、何がツーリズムで何がそうでないかの境界線が引かれることを可能とする。これまでに分析した諸定義とアプローチに従えば、2つの原理が同定される。即ち**基本的なもの**と、**望ましいもの**である。

基本的諸原理

主体

ツーリズムが存在する為には、ツーリストが存在せねばならない。しかし、このツーリストはホスト側と相互作用する。ホスト側のカテゴリーには、ホスト、即ち誰かを受け入れる人間と同様に、サービス供給者（出発地と目的地における）が存在する。

移動

移動は2つのカテゴリーに分類される。内的移動—ツーリストが属する国家内のものと、外的移動—ツーリストが属する国家の外のもの、である。外交官の旅行と同様に、自然的・人間的カストロフによる亡命者や移民の移動はこのカテゴリーには入らない。

回帰の原理

家、住居、住んでいる場所からの出発の動きは、これらの場所への回帰を含意する。この概念は既にツーリズム（ツアー）—即ち円の中での旅行、私が行き、帰るという語の語源に存在する。

動機付けの原理

明瞭であれ不明瞭であれ、ツーリストが旅行をする理由が常に存在する。

ホスピタリティの原理

ホスピタリティはゲストに提供される食料、飲み物、便宜を含む社会的・文化的現象を表す。それはまた何千年も生じてきた行為の基礎でもあり、人間という種の存続という事実にも根を持つものである。それはツーリズムの発展にとって基本的契機である。というのもそれは家庭的・公的・商業的文脈において、受け入れ、誰かに受け入れられるという行為と結びついているからである。

家庭的ホスピタリティは他の種類のホスピタリティを生み出す。それは家庭的（ドメスティック）な文脈において誰かを受け入れ、便宜を図り、食料を与え楽しませるという行為と結びついている。

商業的ホスピタリティは、サービスを提供しそれに対する金銭的対価を受け取るホテルやホステル、レストラン、旅行会社やその他施設といった商業的文脈で発生する。最後に、公的ホスピタリティとは、公的文脈で人々を受け入れる行為である。それは公的機関と同様に、都市の中の公園や通り、バス停、バスターミナル、鉄道や空港、旅行情報ブースといった人々が集まる公的な場所に適用されるべきものである。

経験の原理

ツーリズムは、感覚的・心理学的経験（それが良かろうと悪かろうと）の結果である、非物質的で触れることのできない一連のサービスから構成されている。それによりツーリストの旅行におい

て経験が主な指標となる。加えて、人々は新たな経験を求めて旅行に出る。

コミュニケーションの原理

ツーリズムはコミュニケーション行為である。ツーリストは他の文化と同じように、他の人々とも関係する。他者とコミュニケーションすること無しに旅行することは不可能である。

技術

あらゆる種類のツーリズムは技術を用いる。自然の中や住み慣れたエリアでのツーリズムにおいてさえそうである。コミュニケーションと移動の技術がこの原理では最重要である。

望ましい諸原理

持続可能性

サステナブル・ツーリズム、即ち継続的利用が保証されるやり方でのツーリスト資源の利用である。それは社会的・文化的・経済的・環境的サステナビリティに分類される。加えて、これら4つと比べると見えにくい、政治学的・心理学的サステナビリティが含まれるべきである。

平等の原理

人間は、社会的経済的レベル、宗教、皮膚の色や人種がいかなるものであれ、ツーリズムの法の前では全て等しい。そして人間は空間と場所におけるのと同様に、人間的・職業的關係においてそのような者として扱われねばならない。

公的・私的主権の原理

公権力の意志が私的・個人的な利害よりも上位にあるべきである。というのも、ツーリストの欲望が秩序や社会集団の欲望に対し悪影響を与える場合、それは認められるべきではないからである。

他者性の原理

他者性とは差異への敬意を意味する。それは、ホスト側との関係において、ツーリスト同士において、またホスト側同士において、ツーリストの取り持つ関係の中に存在するべきである。

倫理の原理

倫理学は道徳と慣習に関する科学だと理解されている。それは正しい行動の仕方にも言及する。この原理は4つの主体に結びついている。a)ツーリズムの職業人 b)ツーリスト c)ホスト側コミュニティ d)公権力 である。

これらの諸原理は何らかの論争を喚起するかもしれない。というのも言及されていない次のような他の諸原理があるからだ。即ち、自由市場の原理、非物質的生産物の原理、不可侵の原理と二次的活動の原理。しかしながら、ここでの目的はツーリズムに関するより良い理解を可能とする為に主題に関する基礎を説明することにある。先に指摘したように、ツーリズムの定義を語ることは複雑である。文脈づけ、特徴づけ、理解について語ることの方がより易しい。何故ならば、概念が定義されるやいなや幾つかの境界線が確定し、限定付きのアプローチを創り出すリスクを私は負うことになるからである。この事実を考慮した上でなお私は、これまでに言及した諸理論と諸原理とに基礎を置きつつ、ツーリズムに関する以下の定義を提案したい。

ツーリズムとは、明示されうる、または秘匿されうる理由に基づき、人間が習慣的に住んでいる場所から出発し戻ることにより引き起こされる現象である。それはホスピタリティ、他者との出会いとコミュニケーション、サービスや技術を提供する企業を前提し、それにより往復運動が可能となる。それは経済的・政治的・環境的・文化社会的環境に対しポジティブな、或いはネガティブな効果を生み出すと同時に、感覚的・心理学的経験

を生み出す。

最後の考察

上の議論が示すように、研究者にはツーリズムの堅固な理論的基盤を定義し設定することに対する関心がある。しかしいかなる理論も、有益だとみなされる為には価値づけられピアレビューを経なければならない。私は、ただ一人の研究者がツーリズムの無数の側面を説明しうる理論的に完全な一つのモデルを構築することなどできない、と信じている。それに加え、概念の商業化の問題が存在する。即ち、主に経済的インパクトに注力しツーリズムの明瞭な特徴づけの探究を回避するということだ。社会は諸価値や行動や人間そのものの商業化に直面している。大企業にとってのツーリズムとは、単に経済的で商業的な実践に過ぎない。彼等は恰も現象それ自身であるかのように、安楽で安全で消毒された経験を提供する。しかしながら、ツーリズムとはそれ以上のものだ。旅の中には、最初は現れない諸契機が含まれている。即ち、ツーリストの望みや熱望、新たなものの探求、新たな経験の必要性といったものである。ツーリズム研究は旅の中での人間の役割を認識する手助けをするべきであるし、古い諸問題に新たな解答を与えるよう探究すべきである。古い問題とは、頻繁に議論されるが実践的には殆ど進展が見られていない、訪問者とホストとの関係についての問題などである。新たなパラダイムが提案され続けなければならない。何故ならば、私達が正常なものや通念化されたものから身を引き離す時、私達は私達自身とその行動を別の仕方で見える可能性を持つからである。

3. 参考文献

- Acerenza,M.(2002)
Administração do turismo.Bauru-SP:Edusc
- Ascânio,A.(1992)
Turismo: La ciencia social de los viajes. Estudios y Perspectivas en Turismo1(3),185-197
- Ascânio,A.(2007)
El objeto del turismo:Una possible ciencia social de los viajes?
- Beni,M.C.(1998)
Sistema de turismo:Construção de um modelo teórico referencial para aplicação na pesquisa em turismo.
PhD thesis,Universidade de São Paulo.
- Boullón,R.C.(1995)
Las actividades turísticas y recreacionales.
México:Trillas.
- Boullón,R.C.(2002)
Planejamento do espaço turístico.
Bauru-SP:EDUSC.
- Burkart,A.J.andMedlik,S.(1974)
Tourism:Past,Present and Future.
London:Heinemann.
- Cooper,C. et.al.(1993)
Tourism,Principles and Practice.
London:Pitman Publishing.
- Cuervo,R.(1967):
El turismo como medio de comunicación.
In R.Cuervo(ed.) El turismo como medio de comunicación humana(pp.27-40)
México:Departamento de Turismo del Gobierno de México.
- Fuster,L.F(1971)
Teoría y técnica del Turismo.
Madrid:Nacional,Tomo I
- García,M.O.(2005)
El análisis del turismo desde la perspectiva de los sistemas funcionales.
PhD thesis,Universidad Iberoamericana.
- Hunziker,W.and Krapf,K.(1942)
Allgemeine freundenverkehrslehre.
Berna University:Zurique.
- Jafari,J.(1995)

Structure of tourism: Three integrated models. In S.F.Witt and L.Moutinho(eds) Tourism Marketing and Management Handbook(pp.5-17).London: Prentice Hall International.

Jafari,J.and Ritchie,J.R.B.(1981)

Toward a framework for tourism education –problems and prospects.

Annals of Tourism Research8(1),13-34

Krippendorf,J.(1985)

Le tourism dans le systeme de la societe industrielle. In A.Sessa (ed.)La scienza dei sistemi per lo sviluppo del Turismo (pp.167-184).Roma:Agnesotti.

Krippendorf,J.(1989)

Sociologia do turismo: Para uma nova compreensão do lazer e das viagens.

Rio de Janeiro:Civilização Brasileira.

Kuhn,T.S.(2001)

A estrutura das revoluções científicas.São Paulo:Perspectiva.

Leiper,N.(1979)

The framework of tourism:Towards a definition of tourism,tourist,and the tourist industry.

Annals of Tourism Research 6,390-407

Martínez,A.J.J.(2005):

Una aproximación a la conseptualización del turismo desde la Teoria General de Sistemas.

México:Universidad del Caribe.

Molina,S.(1991)

Conceptualización del turismo.México:Limusa.

Nechar,M.C.(2005)

La modernización de la política turística.Retos y perspectivas.México:Centro de Investigación y Docencia en Humanidades del Estado de Morelos.

Panosso Netto,A.(2003)

Jafar Jafari×John Tribe:Um diálogo de

teorias.Boletim de Estudos em Hotelaria e Turismo1(1),1-9

Palomo,M.F.(1991)

Elementos para el studio de la economía de la empresa turística. Madrid: Síntesis.

Sessa,A.(1985)

La scienza dei sistemi per I piani regionali di sviluppo turistico. In A.Sessa(ed.) La scienza dei sistemi per lo sviluppo del

Turismo(pp.53-107).Roma:Agnesotti

Tribe,J.(1997)

The indiscipline of tourism.

Annals of Tourism Research24(3),638-657

Trigo,L.G.G.(1998)

A sociedade pós-industrial e o profissional em turismo.Campinas:Papirus.

Trigo,L.G.G.(2003)

Entretenimento:Uma crítica aberta.

São Paulo:Senac São Paulo.

Urry,J.(1996)

O olhar do turista.Lazer e viagens nas sociedades contemporâneas.

São Paulo:Studio Nobel/Sesc.

Wahab,S-E.A.(1977)

Introdução à administração do turismo.

São Paulo:Pioneira.

『ツーリズムにおける哲学的諸問題』 所収論文・解説と翻訳【2】

「ツーリズムの終焉？ノマドロジーとモビリティ・パラダイム」(Sunderland 大学教授 Kevin Hannam 著) について

(解説と翻訳) 神戸夙川学院大学講師 原 一樹

【目次】

1. 解説
2. 翻訳
3. 参考文献

1. 解説

本稿は、英国 Surrey 大学 John Tribe 教授編集・2009 年出版の『ツーリズムにおける哲学的諸問題』（“Philosophical Issues in Tourism”, Channel View Publications）に収められている、Sunderland 大学 Kevin Hannam 教授による論文の解説と翻訳である。

『ツーリズムにおける哲学的諸問題』は、「哲学的」と銘打つ著作にふさわしく、ツーリズムに対して「真」・「善」・「美」という 3 つの角度からアプローチする 16 本の論文が収録されている。いわゆる「倫理的ツーリズム」や「スピリチュアル・ツーリズム」に関する論文も収録されているが、その中でも Hannam 氏の論文は、「ツーリズムの終焉？」という刺激的なタイトルの下、著名な社会学者 John Urry 氏らにより展開されつつある「モビリティ」概念を軸に据えた包括的社会理論や、20 世紀を代表するフランス人哲学者ジル・ドゥルーズが盟友フェリックス・ガタリと共に生み出した「ノマド（遊牧民）」という形象を参照しつつ、流動性や移動性が高まった現代のグローバル化社会における「ツーリズム」の意味について検

討する興味深い論考である。いささか抽象度が高い議論が続くこともあり、Hannam 氏の議論を十分に理解するには自らの手で氏が参照する理論家の言説に赴く必要があるが、氏の論考はツーリズム研究と社会理論、更には哲学的言説を繋げることを試みる先駆的研究だと言えるだろう。

訳出に際しては、“mobility”の語を「移動性」や「可動性」とすることも考えたが、新たな社会理論のパラダイムを構想する中心概念として提出されていることにも鑑み、敢えて「モビリティ」とした。その他、訳者の拙い語学力およびツーリズム理論に関する浅学の故、思わぬ誤訳をしてしまっている可能性は否定できない。読者諸賢の御指摘・御叱責を待つのみである。なお、人名に関しては参考文献利用の便宜や訳出の困難さに鑑み、原則として英語表記を残した。

2. 翻訳

はじめに

この章では、ツーリズムをより広い社会理論へと位置づける。前提として、ツーリズムはもはやそれ自体としては存在しておらず、モビリティと言われるより広い存在論的文脈内部の特定のプロセスとして理解されねばならないと考える。まずはモビリティ概念について素描することから始め、その後、ドゥルーズに触発された、モビリティに関する最近のポスト構造主義的説明（いわゆるノマドロジー、或いはノマド哲学）の強みと弱みを

議論しよう。このような理論は実証主義における「実証された諸命題の秩序立ったシステム」ではなく、実在を社会的に構築する手法であり、新たな諸問題を問うとみなされるものである。(Calhoun1995:4-5)

その後この章では、最近になり主張されている新たなモビリティ・パラダイムの様々な理論的諸側面に光を当てる。とりわけ、いかに権力についての概念化が相対的モビリティと日常生活の不動性に関する存在論的理解を深める為に用いられてきたかに注意を促したい。現代的モビリティは、日常的移動の局地的プロセスや日常生活における公共空間移動、物質的事象の移動と同様に、世界中に展開する人々・物質・資本・情報の大規模移動をも包摂するものだと言われている。(Urry2007)その後、輸送とコミュニケーションに関する近年の進歩が、モビリティに関する新たな社会的文化的実践(ツーリズム形態を含む)と共に、いかに新たな研究を創発しているかを検討する。最後に、モビリティに関する方法論を議論しよう。

モビリティを理解する

『移動について』という彼の基本的な書物において、Tim Cresswell (2006) はモビリティ概念を議論している。批評家達はモビリティ概念を刺激的だが見逃されがちな研究対象だと言うわけだが、彼によるとそれは学術的書物の中に遍在する。モビリティは存在の基本的な地理学的側面であり、「・・・そこから様々な語りや—そして実際にイデオロギーが構築されうる、或いは実際に構築されてきた肥沃な土壌である。」(Cresswell2006:1) 歩くこと、転居すること、休暇先に移動すること、移民すること、旅行することや探検することは、何らかの意味でモビリティの様々な形式である。しかしながら、近代西洋社会で広く流通してきた多くの意味合い—進歩としてのモビリティ、自由としてのモビリティ、機会としてのモビリティ—

にもかかわらず、「モビリティ」そのものやそれが何を意味するかは、相対的に明瞭化されて来なかった。

モビリティはあらゆる種類の固定性と対照的に表現されてきた。「それは場所、根付いていること、基礎、安定性の対照物として置かれる或る種の空白の空間である。」(Cresswell2006:2) モビリティの最も単純な理解は、それが或る種の移動—場所間での運動を含む—というものである。「運動とは、類型や戦略、その運動の社会的含意が考慮される以前の一般的な移動の事実である。」

(Cresswell2006:3) 場所間での対象移動は時間を消費し、空間を横断する。故に、移動は時間と空間から成る。更にはっきり言えば、それは「時間の空間化と空間の時間化」である。時間と空間は運動に文脈を与えると同時に、運動の結果でもある。しかし決定的なことに、(人間や他の諸事物の)運動は常に意味深い—即ち、権力の生産者であり生産物でもある。故に Cresswell によれば、運動よりも寧ろモビリティが「場所」のダイナミックな等価物とみなされることとなる。まさに「場所」は「位置」と同じ程度に中立的なものではない。場所—それは様々な意味や権力により色をつけられている—は、常にモビリティと同じように経験される。「モビリティはまさに空間的—地理学的—であり、また場所と同じように人間の世界経験において中心的である。」(Cresswell2006:3)

この観点から見るとモビリティは関係を持つ 3 つの諸契機から捉えられうる。(Cresswell2006) 最初に、輸送計画や移民理論において明白であるのは、潜在的に観測可能で測定可能な事実—経験的実在としてのモビリティである。ここでモビリティは純粋な動きを意味し、その最も抽象的状态にある。モビリティについてのこの抽象的概念はしばしば空間的規模を超えてきた。例えばウィリアム・ハーヴェイによる人間の血液循環システムの発見がそうである。即ち、健康が「循環」と連結することになった。この循環という考え方は次

に都市計画の新たな文脈に現れた。「動脈」や「静脈」という語が新しい都市計画者達の言説において馴染み深いものとなったのだ。

次に、モビリティは様々な表象様式—映画、写真、文学、哲学、法—を通して伝えられもした。モビリティに関するこれらの諸表象は極めてイデオロギー的な意味を生み出すものである。ここでモビリティは「自由、侵犯、創造性、生そのものと同義語になる。」(Creswell2006:3)

モビリティに関する第三の契機は、実践され、経験され、具体化されるモビリティという契機である。人間のモビリティはそれ自体、深く具体化された経験である。そして人間のモビリティの直接的経験はモビリティに関する表象的意味と結びついている。同様に、モビリティに関する表象はモビリティが具体化され実践される手法に基礎を置いている。故に、私達は統合プロセスとしてのモビリティの諸契機を読解する必要があると主張されるのである。Creswell は言う。「モビリティを表象への参照無しに理解することも、他方で物質的身体性無しに理解することも・・・ポイントを外してしまう。」(Creswell2006:4)

Creswell (2006) は更にこう続ける。近代西洋社会におけるモビリティ感覚の変容は歴史的に跡付けることができる。ヨーロッパ封建社会においては、モビリティは贅沢品であった。土地での労働に含まれる持続的モビリティは存在したが、モビリティの規模は巡礼や戦争を除けば限定されていた。ヨーロッパ近代初期における商業資本主義の勃興は交易と関係するモビリティを促進し、最終的には封建社会の土地拘束性を緩和した。その代わりに、発展した新タイプのモビリティは新たな社会監視とコントロールの形式を必要とした。ヨーロッパ国民国家の形成は商品と賃労働とに対しより広いマーケットをもたらした。労働は国家規模で移動可能なものとなり、そうなることでモビリティを制御する封建権力は衰退していった。イデオロギー的レベル、及びより世俗的レベルに

おけるモビリティの変容に伴い、人々はヨーロッパの幅広い地域に住み着くこととなった。モビリティは権利となったのだ。即ち、国民国家内部全体を移動する権利である。そこには他の近代的な移動する存在、つまりツーリストの出現が伴っていた。

よって一つの概念としてのモビリティは、比喩的に流通してきたものである。モビリティに関する多くの比喩は、ノマド、放浪者、ツーリスト、(外国に渡り住み込みで働く) 家政婦、船、そしてホテルを含む。そしてこれらが社会的空間的モビリティに関する現代の言説を満たしているのだ。例えば人類学者ジェームズ・クリフォード(1997)は、現代世界は希望に満ちて旅をし、連結を作り速度を経験するノマドや旅行者達の新たなモビリティの世界によって特徴づけられると言った。彼は家庭や固定性の比喩に対して、ホテルのロビーの比喩を利用する。ホテルのロビーは運動や予期せぬ出会いに開かれたステージを作り上げるものだ。こうして、哲学の古い形式の一見したところの固定性は、モビリティに関する様々な比喩により疑問に付されることとなった。

ノマドロジー

認識論的レベルでは、モビリティの理論化は定住者の形而上学がノマド的形而上学により論証を経て代替されてきた場所で領域侵犯的特徴を持つようである。例えば Deleuze と Guattari(1988:52)はその哲学的言説において、平滑的で可動的な空間のモチーフとして、或いは社会の脱領土化のモチーフとして、ノマドという形象を用いている。「ノマドは点も、道も、土地も持たない・・・もしノマドが卓越して脱領土化したものだと言われうるとすれば、それはまさに移民のように事後的な再領土化が存在しないからである。」Cresswell は説明する。「移民が場所から場所へと動き、心の内に安らぎの場所を持ちつつ移動するのに対し、ノマドは道を定めるのに点や場所を用いる・・・ノマ

ドは決して再領土化しない。到着した場所の秩序立った空間へと移民が逆戻りするのとは違うのである。」(Cresswell2006:49) Urry(2000:24)は更にこう説明する。「ノマド主義は、学術的で政治的な言説がそれ自身一つの旅として認識されうるという概念と結びついている。理論を創るためには、人は家を出て旅をする。理論家がそこから出発してそこへと戻るような“家”や固定した点は存在しない。理論家とは、家にも余所にも留まらず、希望を持ちつつ旅をする存在だとみなされる。」今や我々が向き合うのは、このモビリティに関する思考であり、哲学に対してである。

多くの西洋哲学は社会的秩序であれ空間的秩序であれ、世界における秩序の探究に専念してきた。事物がいかに作動するかに関するパターンやプロセス、モデルや理論が提出されてきた。しかしながらその気質に反して、西洋哲学には常に生の秩序化ではなくその基本的な無秩序と複雑性を理解しようとするもう一つの運動が存在してきた。この運動は近代西洋社会と科学的理性の両者に関するニーチェ的な批判を展開するものである。この運動のクライマックスは、フランスのポスト構造主義者ジル・ドゥルーズとミシェル・フーコーの仕事の内に見出される。彼らは知識の生産を批判し、見出されるべき客観的真理や秩序など存在せず、寧ろ全ての知識は力の諸関係に巻き込まれていると主張するのである。「自らと関連を持つ知識領域の構成を伴わない力—関係は存在しないし、同時に、力—関係を前提し構成しない知識なども存在しない。」(Foucault1977:27) フーコーによる近代批判は、近代社会の誕生は解放過程ではなく新たな規律権力—知識体制の設立に過ぎないと主張する。(Cheong&Miller2000, ツーリズムの文脈で参照せよ。)

他方、ドゥルーズによるノマド主義的批判も同様な戦略を採る。D'Andrea(2006:107)は次のように言う。

ノマドロロジーは国家や科学、文明化の定住的論理を暴露し超克しようとする批判的思考のスタイルを指す。・・・それは、脅威、逸脱、問題と見做される放浪者に対し定住者を積極的に評価する、文明化の持つカテゴリー的な二項対立を批判する。・・・モビリティに対する固定性の優位、道のりに対する根付きの優位は、慣習的な主観性の様態に依拠している。同一化と他者性との弁証法は、堅固で排他的な境界線内に自我を拘束する同一性モデルを維持するものである。

『千のプラトー』でドゥルーズと共著者フェリックス・ガタリは「必然的に条里化される社会的世界を含意する、ヒエラルキー的で、構造化されていて権威主義的な樹木と根の比喻に対し、リゾームの比喻を対置する。リゾームの根は水平に分岐し、領土へのあらゆる拘束を逃れるもので、アナキーで包含しつくせない多様体である。」

(Callinicos2007:333) ドゥルーズとガタリは言う。「リゾームは意味的連鎖や、権力組織や、芸術や科学や社会闘争に関連する状況の中で絶え間なく連結を創り出す。」こうして、リゾーム的思考はアムステルダム運河を遊歩することに例えられ、多くの西洋哲学が持つ構造化された二項対立的思考に對比される。(Shurmer-Smith&Hannam1994) 故に、このようなノマド的思考は私達に社会的同一性について考え直させる。例えば「社会的同一性とは常に流動的でプロセスの最中にあり、部分的には自分で自らを構築するが、部分的には他者によるカテゴリー化を受けていて、また部分的には条件、ステータス、ラベル、武器、盾、記憶の蓄積等々でもあるようなものだ。それはブリコラージュを通して構成されるクレオール化された集積である」というように。(Malkki1992:37)

更にドゥルーズとガタリは基本的に2種類の時空に私達が住んでいると言う。条里空間は過度に秩序づけられていてセグメント化されており、ちょうど私達の正確な方位や方向を与えてくれる地

図のようなものである。ノマド的空間、平滑空間はセグメント化されていない、方向無しの変化性を持つ。しかし、「平滑一条里という単純な対立は更に困難な複雑化や異化、重合を生み出す。・・・なぜならば差異とは客観的なものではないからだ。砂漠や草原、海で条里的に暮らすこともできる。都市の中で平滑的に暮らすこと、都市のノマドと成 る こ と も で き る 。

」

(Deleuze&Guattari1988:481-482)

資本や人や物資のこのような流れは現代世界のグローバルなハイパーモビリティを特徴づけており、D'Andrea(2006:98)は「同一性や主観性の形式へのハイパーモビリティの衝撃を示す概念的基盤としてのノマド主義人類学とノマドロロジー哲学との対話」を提案する。しかしながら、この対話の問題点は、ノマドという形象に関する隠されたロマン主義化である。Creswell(2006:54)は言う。

「・・・ノマドの使用はしばしば想像上の新植民地主義の形式以上のものではない。」ノマドロロジーの認識論的前提は、西洋社会とその合理的抽象的科学への有益な批判かもしれないが、私達が前進できるのはモビリティに関する存在論的理解においてのみである。

故に Urry(2003:101)は、「グローバルに統合されたネットワーク」(GINs)に沿って**全体的に**組織化されていて、時間－空間的拘束を無化する予見可能な連結を伴う永続的構造(多国籍企業など)として社会を捉えるのではなく、「グローバルな流れ」という存在論的概念を提示する。「グローバルな流れ」とは、その形がでこぼこしており、偶然的、予見不可能で、「自らの活動文脈を時間の中で創造する」ような、高度なモビリティを持つ粘着質構造である。他方 Hannam(2006)は、私達が人間行動に関する適切な存在論的説明を展開できるのは、(ツーリズムもその一部を為す)現代のグローバルな複雑性を産み出すモビリティと不動性・固着性との組み合わせ(平滑的なものと条理化されたものとの組合せ)の分析においてのみであると

認めている。

モビリティ・パラダイム

ツーリズムはますます、正常な日常生活の外部で実践される社会生活の周縁的な一側面だとはみなされなくなっている。むしろそれは、政治的経済的進展のより広いプロセスに統合されるものであり、日常生活を構成するものだとさえみなされている。(Franklin2003,Edensor2007)確かに、Franklin and Crang(2001:3)はこう指摘している。「ツーリズムは当初より、相対的にマイナーな近代的国民生活の周縁的儀式であることから逃れ、それを通して超国家的近代生活が組織される意味深い様態に成ってきた。」故に、指摘されているのはツーリズムの終焉というよりは寧ろ、現代的モビリティに対する私達の理解の始まりである。

(Sheller&Urry2006:1)は、「社会科学の中に、“新たなモビリティ”パラダイムが形成されつつあるように思われる」とまで言う。モビリティという概念は、日常生活における公共空間移動や物資移動といった日常輸送のローカルなプロセスと同様、人間や物資、資本や情報の世界中での大規模な運動を位置づけるものだと彼らは明瞭に主張する。実際、Urry(2007:18)は更にこう言う。

「モビリティという“レンズ”を通して考えることは、他と区別される社会科学を与える。・・・モビリティ・パラダイムは、それが人々や観念等の様々な移動に対する無視や怠慢を治癒するという意味で実質的に異なるのみではない。それは社会科学を変容させるものであって、他の理論的方法論的風景を正当化する。・・・そのパラダイムは多くの場合目立たず、目につかなかった理論や方法、研究事例を前面に持ってくる。」

こうして、モビリティに関するポスト・ディシプリンの視点からは、単なる**それ自体**としてのツーリズムという概念は、今やむしろ時代遅れのものではないかとみなされることとなろう。

「人々や物資、飛行機やスーツケース、植物や動物、イメージやブランド、データシステムや衛星、これらのものの移動全てはツーリズムを“実践する”ものである。ツーリズムはまた、記憶や運動、ジェンダー化され人種化された身体、感情や雰囲気に関係を持ちつつ移動することに関わる。」(Sheller&Urry2004:1)

再度言えば、ツーリズム、より重要なことに旅行は、社会生活を構成する必須プロセスとみなされるようになりつつある。これは単に別荘購入やツーリズムと移民との繋がりに関することではない。寧ろ、全ての物事が世界中での絶えざる運動に見えるということである。学者、テロリスト、ツーリスト、軍人、ビジネスマン、ホームレス、セレブリティ、移民、難民、バックパッカー、通勤者、学生、友人・・・といった多くの人々が旅をする。そして世界中の飛行機、列車、船、バス、自動車、通りを満たすのである。現代世界における政治や技術、財政や輸送に関する全ての変化が、多くの人々にとってモビリティへの障壁を低くするのに十分意味があった。故にツーリズム、レジャー、輸送、ビジネス、旅行、移民、コミュニケーションの境界線はぼやけ、個別に分析されるよりも、それらが流動的に相互依存しているままに、統一的に分析されるべきである。(Sheller&Urry2006,Hannam2006)

一方で物理的に、潜在的に場所間を移動することは、バックパッカーなどのツーリストにとって地位と権力の源泉となりうる。(Richards&Wilson2004,Hannam&Ateljevic2007)他方、モビリティが強制される場所では、それは世界中の移民や難民にとっての疎外や、ツーリズムによるモビリティを前にした諸部族の強制的な再移住の枠組みをもたらす。(Indra1998,Kofman2002)このようなモビリティや不動態は特にいわゆるツーリズムの「接触区域」であらわになっている。それは国家間の狭間

にあり、「市民権」概念が強く疑念にさらされていて、多数のアイデンティティがますます流動的なものとなっている場所である。

(Bianchi2000,Sparke2006) 故に現代的モビリティを分析することは、様々な速度の流れにある諸社会に位置づけられる、様々な人々や場所にとっての多くの結果の考察を含むこととなる。(Sheller&Urry2006,Hannam2006)

ツーリズムにとってのモビリティ問題

ツーリズムをより広いモビリティ・システムの一部と見なし続けることを試みる際に、私達はモビリティ研究にとっての大まかな問題を描き出すことができる。例えば私達はツーリストがいつどのようにして移民になるかと問う必要がある。(O'Reilly2003)移民や回帰移民、トランスナショナリズムとツーリズムとの関係は更に研究される必要がある。そして勿論ここで、物理的移動が上方への、或いは下方への社会的移動とどう関係するかも中心的な問題である。このような文脈では私達は、ツーリストが上述のいわゆる「接触区域」で自らのアイデンティティや市民権概念をいかに処理するかを検討する必要がある。更に、ツーリストが絶えず移動中である、ハイパーモバイルな存在であるとみなすことは恐らく過度に単純な見方だろう。実際にツーリストであることは、時に自らの選択により、或いは経済的事情により、場所に滞在することや相対的に動かないこと、よりゆっくりとしたコースにいることとの関係が深い。場所や技術や「ゲート」は或る者達のモビリティを強化する一方で、他の者達の不動態(脱モビリティ化)を強化する。そして勿論このようなモビリティ(や不動態)はまた、強くジェンダーの問題を含み、年齢に応じた特有のものである。

存在論的レベルでは、世界規模での人間のモビリティという幅広い文脈におけるこのようなツーリズム研究は、モバイル情報通信技術や生まれつつある安全と監視の為のインフラについての更に

「技術的」な関心に結び付けられるのと同様に、日々の移動や物質文化、空間関係についての更に「ローカル」な関心とも結び付けられる必要がある。社会生活はしばしば遠距離を繋ぐ多様で引き伸ばされた連結に満ちているように思われるが、これらは特定の結節点を通して組織化されている。モビリティはこれら結節点の周囲の新たな社会生活形式を共鳴させるはっきりした社会空間を必要とする。例えば駅、ホテル、高速道路、リゾート、空港、レジャー複合施設、コスモポリタン都市、ビーチ、ギャラリー、ロードサイド・パーク等である。或いは連結はより特権化されていない空間を通して実行されるかもしれない。即ち、通りの角や地下鉄の駅、バス、公共広場や裏通りである。また、輸送に関する多くの研究に反して、旅行に費やされる時間は人々が最小化を望む死んだ時間ではない。輸送に関する論文は旅行を活動から区別しようとする傾向にあるが、登場しつつあるモビリティ・パラダイムは活動が移動中に生じると仮定し、移動中であることは「引き起こされた」諸活動のセットを含みうるとする。(Lyons&Urry2005) によって、登場しつつあるモビリティ・パラダイムの中に位置づけられるツーリズム研究は、ツーリストが経験する様々な様態の旅行が持つ具体化された本質と経験を検討するものとなるだろう。そして部分的に旅行のこれらの様態を物質的で社会的な「移動中の一住居」の形式、様々な活動が生じる場所、様々な活動の為の場所とみなすものである。(Jokinen&Veijola1994,Crouch2000,Johnston2001,Featherstone2004) これらの「活動」は特定の会話や労働や情報収集の形式を含むことができるが、単に繋がっているという事柄のみを含むこともできる。その場合、身体的存在が多くのやり方で様々な集まったり散らばったりするポテンシャルを持つ形で、移動しながら他者と存在し続けることとなる。モビリティからの視点は空間性や尺度に関する私達の日常的考えを捨てるよう導

くのみならず、時間性やタイミングに関して存在する線状的な想定を無根拠化するものでもある。この想定に従えば、行為者は一度に一つの物事しか為しえず、出来事はそれぞれに線状の秩序で生じるとしばしばみなされている。(Hannam2006)

更に、しばしば場所とその場所を旅行する人々との間には明瞭な線が引かれる。度々、場所は人々を訪問させるプル要因やプッシュ要因とみなされてきた。場所は相対的に固定され与えられたもので、そこを訪問する人々とは区別されるものと想定されている。その代わりに私達は、場所という概念は誤って単純なものだと思われているが、問題として取り上げられる必要があると考える。

(Shurmer-Smith&Hannam1994,Creswell2004) 故に、登場しつつあるモビリティ・パラダイムは「場所」と「人々」とを区分する存在論に反して議論を立てる。寧ろ、活動や活動性を通して連結された場所と人々との複雑な関係性が存在する。(Edensor1998,Sheller&Urry2004,Knox2001) モビリティの持つ物質性を再認識するにあたり決定的なのは、私達がそれを通して場所や運動を感覚し感情的地理を構築する、感性的乗り物としての物質的身体を再び中心に据えることである。

(Crouch2000,Bondi2005) 例えば想像上の旅行は、想像力の中で「場所の雰囲気」を経験し予期することを含む。雰囲気は物質的インフラや表象の言説には還元不可能なものである。旅行手段と旅行者との間には複雑な感覚的關係性がある。(Rodaway1994) 故に私達はモビリティの文脈で、ツーリズムの感性的・感情的な地理に関してより良い地図を必要とすると議論できる。

モビリティに関する方法論

モビリティに関する私達の哲学的で概念的な議論を経て、ここで手短かにモビリティに関する方法論の議論に目を向けてみよう。もし私達が十分に現代のモビリティ存在論を理解し、モビリティ・パラダイムが真に登場しつつあるとすれば、私達

は現代の（脱）領土化された社会生活の流動的な（無）秩序や（脱）埋め込みを「捉える」為にモビリティに関する方法論をも必要とするだろう。私達はこの研究を遂行する為にはモビリティ民族誌が最良の方法を提供すると考えるが、モビリティ民族誌は高度に局地化された慣習的民族誌とは区別されねばならない。

（Appadurai1996,Marcus1998）データ収集方法は更に「フレキシブルで形式張っておらず、文脈依存的で、その柔軟性の点で研究対象であるモビリティの主体を模倣する部分を持つ」必要がある。

（D'Andrea2006:113）彼または彼女の視点を拡張することで、民族誌学者は「不明瞭な環境に高速で伝わる、ゆっくり動く実体の震えを知覚し経験するだろう。」（D'Andrea2006:114）故にこのような研究は「位置の繋がりや道筋、細流、結合、併置の周囲でデザインされる。そこで民族誌学者は、民族誌の議論を事実上定義する、場所間における連合や連結の明白な論理を伴いつつ、正確で物理的な存在の諸形式を立証する。」（Marcus1998:90）

D'Andrea(2006:114)は主張する。こうした研究は、

「ハイパーモバイルな現象を含む政治経済学的で社会—文化的なプロセスを考慮すべきである。経済的レベルでは、物質的文脈がいかなる役割を果たすかを問う必要がある。文化的レベルではこう問われねばならない。与えられた場所や回路においてハイパーモバイルな構造に参加する主体に含まれている動機や意味の本性は何か。いかにして特定の経験や意味の場所が彼等の日常生活を支えているか。そして、いかにしてこれらの場所が主観性の形式を構成し表現する儀式的実践や、ハイパーモビリティと重なり合っている親密さや社会性を主宰しているか。」

故に Appadurai(1996)は、「トランスローカルな場所に関するマクロ民族誌」を提案する。D'Andrea(2006:115)はこれを展開し、モビリティ民族誌は3つのレベルで展開されうると主張する。第一に、モビリティ的な主体性、ライフスタイル、アイデンティティについての民族誌が存在しうる。

研究者は、それぞれの特定の地理的場所で「ハイパーモバイルな構造を局地的に構成する下位場面や実践や想像上のものを同定し翻訳せねばならない。」第二に研究はモビリティの諸場面、諸主体、諸コミュニティの社会経済的文脈を分析する必要がある。「経済（ツーリズム・レジャー・広告）や主流／傍流の道德性や、国家による監視が、どのようにモビリティ的な主体と脱領土化されたコミュニティの軌道や戦略に影響を与えるかを理解する必要がある。」そして第三に、多様な場所に関するトランスローカルな民族誌により私達は、様々な場所でのハイパーモバイルな構造の流動的で結合的な本質を同定できる。ここで研究者は「どのトランスローカルな流れや回路やウェブが、いかにしてハイパーモバイルな主体やコミュニティを維持するか」を理解できる。（D'Andrea2006）「移動の只中にある」このような研究手法は、現代の社会生活におけるモビリティ、不動性や固定性に関して、新たな批判的視点を与えるだろう。

結論

この章ではツーリズム研究をより広い社会理論の文脈へと位置づけた。その前提は、ツーリズムはそれ自身としてはもはや存在せず、それはより広い存在論的文脈、即ちモビリティ（モビリティーズ）の特定のプロセスだと理解される必要があるというものである。議論したように、ノマドロジーの強さは認識論的レベルでの西洋科学への批判である点にある。しかしながら、その弱さはノマドという形象を存在論的にロマン主義化する点にある。モビリティ存在論は現代のグローバル化社会の複雑さの分析を通してこの点を回避しようとする。最後にこの章では、モビリティに関する方法論がいかにして現在の研究における方法論的停滞を打破しうるかを証明しようと試みた。

3. 参考文献

- Appadurai,A.(1996)
Modernity at Large: Cultural Dimensions of Globalization.Minneapolis,MN
:University of Minnesota Press.
- Bianchi,R.(2000)
Migrant tourist workers:Exploring the contact zones of post-industrial tourism.
Current Issues in Tourism3(2),107-137
- Bondi,L.,Smith,M.,and Davidson,J.(eds)(2005)
Emotional Geographies. London:Ashgate.
- Calhoun,C.(1995)
Critical Social Theory. Oxford:Blackwell.
- Callinicos,A.(2007)
Social Theory: A Historical Introduction.
Cambridge:Polity.
- Cheong,S-M.and Miller,P.(2000)
Power and tourism:A Foucauldian observation.
Annals of Tourism Research27(2),371-390
- Creswell,T.(2004)
Places:A short Introduction.Oxford:Blackwell.
- Cresswell,T.(2006)
On the move:Mobility in the Modern Western World.London:Routledge.
- Crouch,D.(2000)
Places around us:Embodied lay geographies in leisure and tourism.Leisure Studies19,63-76.
- D'Andrea,A.(2006)
Neo-nomadism:A Theory of post-identitarian mobility in the global age.Mobilities1(1),95-120
- Deleuze,G and Guattari,F.(1988)
A Thousand Plateaus.
London:TheAthlone Press.
- Edensor,T.(1998)
Tourists at the Taj:Performance and Meaning at a Symbolic Site.London:Routledge.
- Edensor,T.(2007)
Mundane mobilities,performances and spaces of tourism.
Social&Cultural Geography8(2),199-215.
- Featherstone,M.,Thrift,N.,Urry,J.(eds)(2004)
Cultures of automobility (Special issue).
Theory,Culture and Society21,1-284.
- Foucault,M.(1977)
Discipline and Punish. London:Allen Lane
- Franklin,A.(2003)
Tourism:An Introduction.London:Sage
- Franklin,A. and Crang,M.(2001)
The trouble with tourism and travel theory?
Tourist Studies1(1),5-22.
- Hannam,K.and Ateljevic,I.(eds)(2007)
Backpacker Tourism.Clevedon:ChannelView.
- Hannam,K.,Sheller,M.,Urry,J.(2006)
Editorial:Mobilities,immobilities and moorings.
Mobilities1(1) 1-22.
- Indra.D.(ed.)(1998)
Engendering Forced migration.
Oxford:Berghahn.
- Johnston,L.(2001)
(Other)bodies and tourism studies.
Annals of Tourism Research 28(1),180-201.
- Jokinen,E.and Veijola,S.(1994)
The body in tourism.
Theory,Culture&Society 11(3),125-151.
- Knox,D.(2001)
Doing the Doric: The institutionalization of regional language and culture in north-east Scotland.
Social&Cultural Geography2(3),315-331.
- Kofman,E.(2002)
Contemporary European migrations,civic stratification and citizenship.
Political Geography21,1035-1054
- Lyons,G. and Urry,J.(2005)
Travel time use in the information age.
Transport research A: Policy and Practice

39(2-3),257-276

Malkki,L.(1992)

National Geographic:The rooting of peoples and the territorialization of national identity among scholars and refugees.

Cultural Anthropology7(1),24-44

Marcus,G.(1998)

Anthropology Through Thick and Thin.

Princeton,NJ:Princeton University Press.

O'Reilly,K.(2003)

When is a tourist? Tourist Studies3(3),301-317

Richards,G. and Wilson,J.(eds)(2004)

The Global nomad:Backpacker Travel in Theory and Practice.Clevedon:

Channnel View Publications.

Rodaway,P.(1994)

Sensuous Geographies:Body,Sense,and Place.

London:Routledge.

Sheller,M.and Urry,J.(2006)

The new mobilities paradigm.

Environment and planning A38(2),207-226.

Shurmer-Smith,P.and Hannam,K.(1994)

World's Desire,Realm's Power:

A Cultural Geography.London:Edward Arnold.

Sparke,M.(2006)

A neoliberal nexus:Economy,security,and the biopolitics of citizenship on the border.

Political Geography 25,151-180

Urry,J.(2000)

Sociology beyond Societies:Mobilities for the Twenty-first Century.

London:Routledge.

Urry,J.(2007)

Mobilities.Cambridge:Polity.

The Overseas Chinese and their Role on Creating a Destination Image of *Nankin-machi* (Kobe Chinatown Shopping District), Kobe, Japanⁱ

School of tourism, Kobe Shukugawa Gakuin University
associate professor Fumihiro Otsuki, Manabu Koiso,
permanent lecturer Daisuke Ebina, Hitoshi Takanezawa

【目次】

1. Introduction and Background
2. Development and re-branding of *Nankin-machi*
3. Attitude and Identity of the Old Chinese
4. New situation posed by the New Chinese
5. Concluding remarks

1. Introduction and Background

This is a case study of *Nankin-machi* (Kobe Chinatown) and roles played by the “New Minority” or the Overseas Chinese in Kobe (Hyogo Prefecture), in town promotion and branding. *Nankin-machi* is a good example of how they influence the destination image by utilizing their ethnic origin. It is also necessary to take note of different groups within the Overseas Chinese in Kobe – i.e. “Old Chinese” (*lao hua ch’iao*) and “New Chinese” (*xin hua ch’iao*) and to understand their different roles. Each group has its own business style and involvement for town management.

The Old Chinese refers to the descendants of the first Chinese immigrants who came to Kobe between the opening of the Kobe port (formally

Hyogo port) in 1868, to the Second Sino-Japanese War of 1937. The most recent and youngest generation belongs to the 6th.

The New Chinese refers to the newly arrived Chinese immigrants who have come to Japan mainly after the 1980’s, when China took economic open-door policy and Japan began to accept Chinese students.

The aim of the present study is to show how the Old Chinese cooperated with the Japanese counterparts in town promotion on one hand and how they have coped with the new situation posed by the New Chinese on the other. It is also important to trace the process of how *Nankin-machi* has changed its townscape through time and developed into a ‘Chinatown’, based on data collected from various informants, documents and maps.

Nankin-machi has always been a focus of attention of historians in general. However when *Nankin-machi* has been converted from mere commercial or market area into a ‘Chinatown’, new field of research, such as architecture, sociology and tourism has gradually gained popularity (Ohashi 2000; Yu and Sugawara 2007).

More recently, gradual increase of number of the New Chinese in *Nankin-machi* has become a focus of attention. They have a different attitude towards commercial activities from the Old Chinese and generating a new trend. Until now, not much has been discussed on how they play their role on sustaining and developing the present *Nankin-machi*. This is the reason why the present paper focuses on this topic.

2. Development and re-branding of *Nankin-machi*

Immediately after the opening of Kobe Port in 1868, *Kyoryuchi* or the Designated Foreign Settlement was set up by the Japanese government for the foreigners from America and Europe which had treaty with Japan. Since China had not yet concluded treaty, the immigrant Chinese (the first generation of the Old Chinese) had opened their shops just outside *Kyoryuchi*, that came to be known as *Zakkyochi* or “mixed residing area” where other foreigners were allowed to live along with local Japanese. Since many of the first generation Chinese came from region around Nanjing, a historical city in China, the area soon came to be known as *Nankin-machi* (the difference in transcription reflecting the different pronunciations). It has grown into one of the three Chinatowns in Japan (the others being Nagasaki and Yokohama), and the only one in Kansai region (Yamashita 2003; Kobe Society for the Study of Chinese Overseas 2004). As far as its architectural features are concerned, however, all the shops were merely common wooden houses indistinguishable from any

other parts of Kobe.

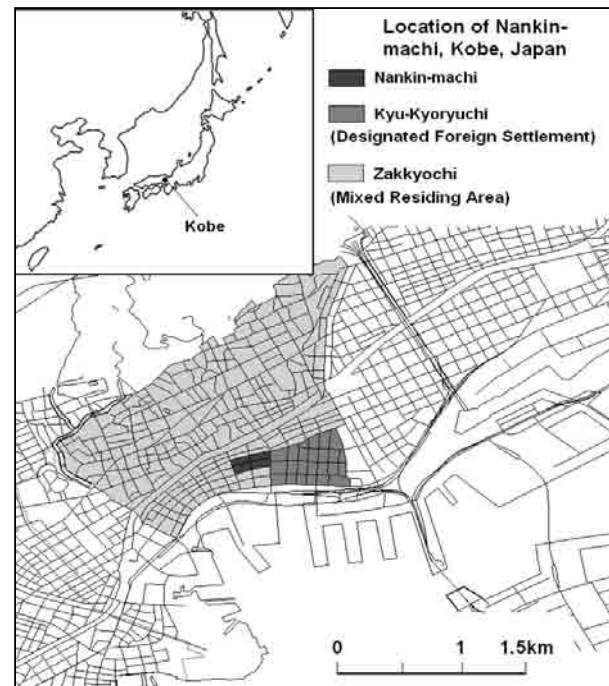


Figure 1: Location of *Nankin-machi*, Kobe

Nankin-machi developed into a prosperous market area by the early decades of the 20th century with various shops (restaurants, butchers, tailors, potters, greengrocers, bakeries, exchangers, barbers, laundries, chemists etc.) run by both the Old Chinese and Japanese (Takahashi and Yu 1996; Chuka Kaikan 2000). Many of the Chinese however, lived not in *Nankin-machi* itself but outside in various other parts of *Zakkyochi*.

With the Nanjing Incident of 1937 and plunge into the World War II, many Chinese closed their shops and returned to China resulting *Nankin-machi* into a notorious state. During the war, *Nankin-machi* was bombed and burnt to ashes. After the war, the shops were replaced by bars for Allied Occupation forces and sailors and lost its former scenery (Kobe Society for the Study of Chinese Overseas 2004).

Table 1 : Brief History of *Nankin-machi*, Kobe from 1867 to Present

year	Event
1867	Construction of the Foreign Settlement (~1868)
1868	Opening of Kobe Port (Jan 1) Designation of <i>Zakkyochi</i> (mixed residing area)
1888	Emergence of the name " <i>Nankin-machi</i> " in the literature Developed into a prosperous market where anything is available
1939	World War II (~1945)
1945	Air Raids on Kobe: the area was burned down End of World War II (Aug 15)
1960-70's	Increase of bars serving foreign sailors, causing security deterioration
1977	Establishment of <i>Nankin-machi</i> Shopping District Promotion Association
1981	<i>Nankin-machi</i> Reconstruction and Environmental Improvement Plan by Kobe city
1982~1993	New Constructions and Activities in <i>Nankin-machi</i>
1982	South Gate
1983	Central Square & Chinese style arbor
1985	Chang'an Gate (East Gate)
1987	First Chinese New Year Festival (with Dragon dance)
1988	A pair of Chinese lion statues at the north entrance
1989	Twelve statues of the Chinese zodiac
1990	Designated as a district for preservation of road scenery under city regulation
1993	<i>Garyoden</i> [Lying Dragon Palace] (public toilet and display of a dragon dance, with office space for the Association)
1995	the Great Hanshin-Awaji Earthquake (Jan 17)
1997	Registration of " <i>Nankin-machi</i> " as a trademark Designation of "Chinese New Year Festival" as an intangible folk cultural asset of Kobe
1998	First Mid-Autumn Festival
2005	Xian Gate (West Gate)

Source: [*Nankin-machi* Shopping District Promotion Association and Kobe *Nankin-machi* Environmental Improvement Council 2007]

It was not until the late 1970's when a group of both the Old Chinese and Japanese gathered to make an effort to restore and redevelop the town of *Nankin-machi*. This has led to an establishment of the *Nankin-machi* Shopping

District Promotion Association in 1977 which plays principal role in development of the area until today. More or less, this coincided with civil movement that gained popularity throughout Japan for preserving historical

townscapes. The Japanese Association for Townscape Conservation and Regeneration was founded in 1974 and historical towns such as Tsumagome-juku (Nagano Prefecture) or Imai-cho (Nara Prefecture) were preserved and protected from modern development.

The City of Kobe also extended help, with the Reconstruction and Environmental Improvement Plan set up in 1981. The main streets of *Nankin-machi* running east-west (160 m) and north-south (110m) both having width of 8m were renovated and new buildings and shops were decorated with Chinese style façade to give a 'Chinatown look' (*Nankin-machi* Shopping District Promotion Association and Kobe *Nankin-machi* Environmental Improvement Council 2007, Yamashita 2003). The entire area was differentiated from outside by Chinese style gateways at each entrance of the main street (Fu et al. 1997; Miyake 2000; Yamashita 2003; Yu and Sugawara 2007). The utmost aim of constructing such new townscape was to make the area into a tourist spot with distinctive character of its own and to attract visitors and tourists from all over Japan (Tsu 1999; Ohashi 2000, 2004).

In 1987, *Shunsetsu-sai* or the New Year's festival (on the Chinese calendar) was organized. Although this is an important traditional Chinese festival, it was celebrated in a large scale for the first time in *Nankin-machi*. Dragon dance was presented, and several years later also Lion dance played both by Chinese and Japanese groups. In 1997, the Kobe city office has eventually designated *Shunsetsu-sai* as an intangible cultural heritage of the region. Also in the same year, the name "*Nankin-machi*" was registered as a trademark,

which meant that only those who (of any nation) joined the *Nankin-machi* Shopping District Promotion Association can use its name for commercial purposes (*Nankin-machi* Shopping District Promotion Association and Kobe *Nankin-machi* Environmental Improvement Council 2007).

3. Attitude and Identity of the Old Chinese

An important fact about the establishment of the *Nankin-machi* Shopping District Promotion Association and its activities towards renovation and popularization of *Nankin-machi*, is that they were carried out jointly with the resident Chinese - i.e. the Old Chinese - and local Japanese themselves (Feng 2001; Yasuda et al. 2001a and 2001b). Such cooperation worked out smoothly partially because the Old Chinese had their distinct attitude which is described as "*Rakuchi-Seikon (luo de sheng gen)*", meaning "a person who starts his new life in a foreign land crossing the ocean, should live harmoniously with former inhabitants adapting himself to the new circumstances" (Chuka Kaikan 2000). *Nankin-machi* has always been a mixed residing area for both Chinese and Japanese (as well as for other nationals who opens shops in the area) since its beginning, and has never been a Chinatown in its true sense. Therefore, the name *Nankin-machi* (and not Chinatown) itself implies its character (*Nankin-machi* Shopping District Promotion Association 2010).

The present Old Chinese who belong to the 5th to 6th generations of the first immigrants to Kobe are the outcome of such attitude, and although their identity remain as Chinese, they have no hesitation to cooperate or to mingle

with the local Japanese, and adopted Japanese language almost as their mother language (Guo

and Zhu 2006; Wang 2003; Zhang 2005).

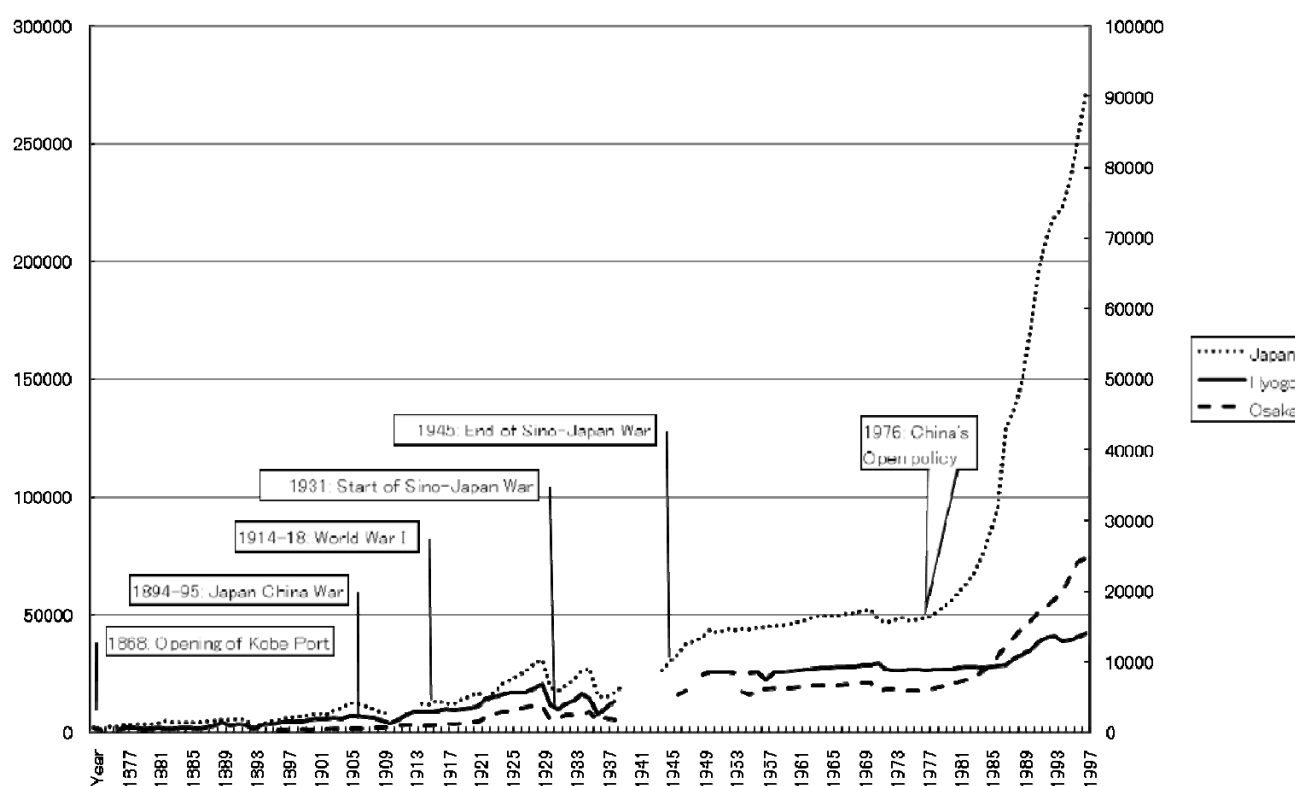


Figure2: Change of Chinese residents in Japan, Hyogo and Osaka

Based on [appendix 11, Chuka Kaikan 2000, p.398]

4. New situation posed by the New Chinese

At around the same time of the establishment of the Association, the New Chinese started coming to Kobe following the open-door policy of China in 1976. Chinese government turned its policy to value overseas Chinese. It also meant that more Chinese could go abroad and that more pre-college and college students from China came to Japan. From 1981, Japanese orphans left behind in China during the World War II started to return to Japan with their family. Immigration by illegal means also increased.

In *Nankin-machi*, at least some of the New Chinese have started to work as part-time

workers, such as shopkeepers, wait persons and cooks. From around mid-1990's, some of the New Chinese started their own business by putting up food stalls on the main streets as well as opening their own shops. Gradually, such entrepreneurs of the New Chinese also began to join the Association.

(i) Shops

In the past one year, some of the shops are being replaced by the new ones, some of which are run by the New Chinese. Now there are about 60 Chinese restaurants and food stores in *Nankin-machi*, within which about 1/3 is owned by the New Chinese. Among 50 restaurants that

are owned by the members of the Association, 8 are run by the New Chinese, which can be divided into following two groups.

The first one is run by relatives of Japanese orphans left behind in China, who returned to Japan after 1981. After starting a restaurant in the east-south part of *Nankin-machi*, they called their relatives from China and expanded their business opening one restaurant after another. Now they own 5 restaurants.

The other is run by one New Chinese who came to Japan with a dream of winning success. He started his career as an employee of a Chinese restaurant owned by an Old Chinese. After earning enough skills and money, he started his own business. He opened two restaurants in *Nankin-machi*, and now also established a language school for Chinese students.

Nowadays such a rapid business expansion is rarely seen in the case of the Old Chinese in *Nankin-machi*.

(ii) Stalls

Originally, stalls were started by local shop owners in late 1980's as temporary installments during festivals. Their intention was to attract visitors to taste local cuisine more casually and at a low price, so as to enjoy the festival. Stalls became more popular after the Great Hanshin-Awaji Earthquake hit Kobe on 17th January 1995. *Nankin-machi* also suffered serious damage. However, the Association put up small stalls on streets of *Nankin-machi* and served boiled-dumplings, steamed buns, noodle soups, croquettes and Shaoxing wine etc., free of charge to those suffering from the earthquake. This encouraged them greatly and was praised

by whole of Japan (Yamashita 2003).

Since then, stalls have become a characteristic element of *Nankin-machi*. At present, 40 stalls are observed, which are all set up right in front of respective shops run by local shop owners. 33 of them sell Chinese cuisine, 7 sell souvenirs and other food items such as donuts and cakes. More than half of these stalls are run by the New Chinese. Most of the New Chinese are not so much fluent in Japanese, and thus their Chinese accent reinforces 'Chinese' atmosphere of *Nankin-machi*. Many tourists stroll along the street with foods in their hands bought from stalls. It is certain that these stalls are the important attraction for the tourists, and it differentiate *Nankin-machi* from neighboring shopping districts.

On the other hand, stalls seem to gradually become a source of concern to the local shop owners. Since the more people go for the stalls, the less people enter and sit in the local restaurants. Some owners worry that tourists pass by their shops and only taste stall food. Furthermore, stalls tend to focus on one-time customers such as tourists, sometimes neglecting local repeat guests as a result. Those attitudes are considered as against the spirit of "*Rakuchi-Seikon (luo de sheng gen)*" of the Old Chinese.

(iii) Difference in behavior

As the presence of the New Chinese in *Nankin-machi* became apparent, their different behavior and attitude from the Old Chinese also came to be noticed in daily business scene, as well as in the town management or the involvement in the festivals.

Staffs of some new shops and restaurants

stand on the main street, distributing pamphlets and luring tourists persistently to persuade them to come to their shops and restaurants. Luring customers is prohibited by the *Nankin-machi* Town Promotion Association. But these shop owners do not obey this rule, since they have not become members of the Association.

These behaviors of the New Chinese sometimes become a source of concern to the members of the Association.

5. Concluding remarks

Nankin-machi historically traces its origin back to Zakkyochi of 1880's and people often regard it natural for *Nankin-machi* to have Chinese atmosphere. But as reviewed in the present study, the 'Chinatown' image of *Nankin-machi* has been constructed artificially as a means to promote this area through cooperation of the Old Chinese, Japanese and the Kobe city office. The designing and transforming of *Nankin-machi* into the 'Chinatown' worked as a tool for *Nankin-machi* to differentiate itself from the neighboring shopping areas, which are mainly in European style.

Through such cooperation, the Old Chinese community has developed strong ties with local Japanese counterparts. This was in accord with their norm of Rakuchi-Seikon to keep cordial relations with the neighbors. It is important to note that residents of *Nankin-machi* have developed common identity based on their township, rather than on ethnicity or language.

The arrival of the New Chinese posed a new situation. As a recent migrant, they naturally maintain strong Chinese identity and strong tie

with China. They are growing into the third important stakeholder in *Nankin-machi*, as a "newer New Minority" with different scope and goals.

It might be imperative for the Old Chinese to bridge the gap between themselves and the New Chinese, if they want to sustain effects of their town promotion. One of the solutions may be usage of the trademark of "*Nankin-machi*". Since it has a strong influence on customer's decision and its use is permitted only for the members of the Association, it acts as an incentive for the New Chinese (as well as Japanese and any other origin) to join and cooperate with the Association.

The future of "*Nankin-machi*" depends on how both the Old and the New Chinese would jointly work for the management and planning along with other members of the Association. To fulfill this goal, it will be important for the members not only to keep the business contacts but also to increase daily communication and joint participation in the branding activities.

Main reference

Interview:

Mr. Eisei So, Chairman of *Nankin-machi* Shopping District Promotion Association,

Mr. Jingun Ko, secretary-general of Kobe Chinese Association

Mr. Hong-Jen Lin secretary-general of Kobe Overseas Chinese History Museum.

Bibliography

Asano, M. and Hyakutake, M. (2007) Ethnicity of Foreigners: A Study on the Community of Kobe *Nankin-machi* (in Japanese). *Shakaigakuzasshi (Sociological review of Kobe University)* 24: 177-180.

- Chuka Kaikan (Chinese Association) (2000) *Rakuchi-Seikon (Roots in a New Homeland : a Hundred Years of Chinese in Kobe-Osaka and their Association)*(in Japanese). Tokyo: Kenbun-shuppan.
- Endo, H. (2007) *Gaidobook-teki ! Kanko-Shakaigaku no Aruki-kata (The Guidebook for "Sociology of Tourism": the Sociological "Lonely Planet")* (in Japanese). Tokyo: Shunpusha.
- Feng, J., Yasuda, C., Miwa, K. and Suekane, S. (2001) A Study on the Process and Estimation of Townscape-Community Planning Consisted of Residents- through the Case Study of Three Districts in Kobe, Kitano-cho Yamamoto-dori, Okamoto, *Nankin-machi*. *Nihon Kenchiku Gakkai Kinki Shibu Kenkyu Houkokushu (Summaries of Technical Papers of Research Meeting Architectural Institute of Japan Kinki Branch)*(2001): 493-496.
- Fu, J., Shigemura, T., Asai, T. and Ito, M. (1997) A Study on the Activities on the Streets in *Nankin-machi* Kobe-Through the Analysis on the Boundary of Building Frontage (in Japanese). *Nihon Kenchiku Gakkai Kinki Shibu Kenkyu Houkokushu (Summaries of Technical Papers of Research Meeting Architectural Institute of Japan Kinki Branch)*(1997): 313-316.
- Guo, Y. and Zhu, X. (2006) A Study on the Cultural Identity of the 2nd and 3rd Generation Overseas Chinese in Japan : a comparative study of overseas Chinese in Kobe and with Fuqing's overseas Chinese in Japan (in Japanese). *Aichi Gakuin University Kyoyo-bu Kiyo (The Journal of Aichi Gakuin University. Humanities & sciences)* 54(1):111-125.
- Kawakita, T., Hanada, Y. and Fujita, H. (2000) Relation between Public and Private Space in Kobe *Nankin-machi* District-Fluctuation between Public and Private Domain in Urban Space. (in Japanese) *Nihon Kenchiku Gakkai Taikai Gakujutu Kouen Kougaishu (Summaries of Technical Papers of Annual Meeting Architectural Institute of Japan)*(2000): 887-888.
- Kobe Society for the Study of Chinese Overseas (ed.) (2004) *Kobe to Kakyo (Kobe and Overseas Chinese: The Steps of Recent 150 years of Kobe)*(in Japanese). Kobe: Shinbun Sogo Shuppan Center.
- Lin, T. (2007) *Hutatsu no Kokyo (Two Homelands: Living as a Resident Chinese)*. Kobe: Epic.
- Miyake, H. (2000) Studies on Specificity like Them-Park in the Street View-Based upon *Nankin-machi* Kobe (in Japanese). *Nihon Kenchiku Gakkai Kinki Shibu Kenkyu Houkokushu (Summaries of Technical Papers of Research Meeting Architectural Institute of Japan Kinki Branch)*(2000): 477-480.
- Nankin-machi* Shopping District Promotion Association and Kobe *Nankin-machi* Environmental Improvement Council (2007) *Nankin-machi no Enkaku (History of Nankin-machi)* (in Japanese)
- Nankin-machi* Shopping District Promotion Association (2010) *Netsuretsu-Kangei Nankin-machi (Welcome to Nankin-machi. The Official Guide Book)*. *Nankin-machi* Shopping District Promotion Association
- Ohashi, K. (2000) "Kobe-Nankinmachi" : Reconstructed Chinatown and Tourism (in

- Japanese). *Rikkyo Daigaku Kankougakubu Kiyou (Rikkyo University Bulletin of Studies in Tourism*, Tokyo) 2: 36-40.
- Ohashi, K. (2004) Tourist Gaze and Reconstruction of Contemporary Chinatown. In Endo Hideki and Horino Masato (eds.), *"Kanko no Manazashi" no Tenkai (Turn of "The Tourist Gaze")* (in Japanese). Yokohama: Shumpu-sha: 99-112.
- So, E. (2004) Chinese Residents in Japan and Town Planning of Kobe *Nankin-machi* (in Japanese). *Kenchiku to Machizukuri (Architecture and Town Planning*, New Union of Architects & Engineers, Tokyo) 326: 6-13.
- Sudo, H. and Endo, H. (eds.) (2005) *Kanko-Shakaigaku (Tourism Sociology)* (in Japanese). Tokyo: Akashi Shoten.
- Takahashi, M. and Yu, V. (1996) A Study of the Formation and Changes in Kobe's Chinatown (in Japanese). *Otemae Joshi Daigaku Ronshu (Journal of Otemae College, Kobe)* 30: 105-128.
- Tsu, T. Y. (1999) From Ethnic Ghetto to 'Gourmet Republic': The changing Image of Kobe's Chinatown in Modern Japan. *Japanese Studies* (National University of Singapore), 1469-9338, 19(1): 17-32.
- Wang, W. (2003) *Sugao no Chukagai (The Real Chinatown)*(in Japanese). Tokyo: Yosensha.
- Yamashita, K. (2003) Formation and Development of Chinatown in Japan : Chinatowns as Tourist Spots in Yokohama, Kobe and Nagasaki. *Chirigaku Hyouron (Geographical Review of Japan, The Association of Japanese Geographers, English Edition)* 76(2): 910-923.
- Yasuda, C., Miwa, K., Suekane, S, Feng, J., Sakakuti, F. and Oe, T. (2001a) A Study on the Process and Estimation of Townscape-Community Planning Consisted of Residents-through the Case Study of Three Districts in Kobe-Kitano-cho Yamamoto-dori, Okamoto, *Nankin-machi* (Part 1) (in Japanese). *Nihon Kenchiku Gakkai Taikai Gakujutu Kouen Kougaishu (Summaries of Technical Papers of Annual Meeting Architectural Institute of Japan)*(2001): 937-938.
- Yasuda, C., Miwa, K., Suekane, S, Feng, J., Oe, T. and Sakakuti, F. (2001b) A Study on the Process and Estimation of Townscape-Community Planning Consisted of Residents-through the Case Study of Three Districts in Kobe-Kitano-cho Yamamoto-dori, Okamoto, *Nankin-machi* (Part 2) (in Japanese). *Nihon Kenchiku Gakkai Taikai Gakujutu Kouen Kougaishu (Summaries of Technical Papers of Annual Meeting Architectural Institute of Japan)*(2001): 939-940.
- Yu, N. and Sugawara, Y. (2007) A Study About Formation and Establishment of Chinese Urban Image in Modern and Contemporary Japan : A Case study in Kobe NanKinmachi (in Japanese). *Nihon Kenchiku Gakkai Tokai Shibu Kenkyu Houkokusho (Summaries of Technical Papers of Research Meeting Architectural Institute of Japan Tokai Branch)* 46: 761-764.
- Zhang, Y. (2005) The Display of Ethnic Identity through a Cultural Presentation: The Case of Kobe Overseas Chinese History Museum (in Japanese). *Kokusai Kaihatsu Kenkyu Forum (Forum of International Development Studies, Nagoya University, Japan)* 29:

153-171.

Tan, R. and Ryu, K (2008) *Shin-Kakyo Ro-Kakyo (New Chinese and Old Chinese-Changing Chinese Community in Japan)*(in Japanese). Tokyo: Bunshun Shinsho.

Web sites:

All About-Glossary (n.d) New Chinese

http://kw.allabout.co.jp/glossary/g_politics/w007514.htm

Cai, L. (2001) New Chinese – definition (in Japanese)

http://www.cnc.takushoku-u.ac.jp/~kakyonet/public_old_html/japanese/situation/sinkakyo/010724sinkakyo_definition.html

Itagaki, E. (2007) Rise of the New Chinese:

Increasing conflict between the Old Chinese and the New Chinese (in Japanese)

<http://blog.goo.ne.jp/itagaki-eiken/e/9a0e31272826f9eafb61111818636c6f>

Kobe Chinese Weblog

<http://www.kobe-chinese.com/weblog/> (in Japanese)

Kobe Overseas Chinese History Museum

<http://www16.ocn.ne.jp/~ochm1979/index1.html> (in Japanese; partially in English)

Nankin-machi Shopping District Promotion Association

<http://www.nankin-machi.or.jp/index.php> (in Japanese)

【要旨】

観光地としての神戸南京町のイメージづくりに果たした華僑の役割

神戸夙川学院大学

小槻文洋、小磯 学、蝦名大助、高根沢均

「ニュー・マイノリティ」と観光の関わりについての研究の一環として、本研究では日本の「ニュー・マイノリティ」の一つである神戸華僑が、神戸南京町の街づくりや知名度アップやブランド化に果たした役割について考察した。

神戸南京町は、ニュー・マイノリティが自分のエスニックな出自を活かして、観光地イメージを築いた好例である。さらに、南京町の事例からは、ニュー・マイノリティを研究するには、その内部の差異にも注目する必要があることも指摘できる。とくに 1980 年代頃以降、華僑には神戸開港以来現在まで 6 代にわたる「老華僑」と、中国の開放政策以降来日した「新華僑」との大きなふたつの流れが見られるようになった。

神戸における老華僑は、開港から日清戦争時までに来日した中国移民とその末裔であり、もっと

も若い世代は現在は 6 代目となる。他方、新華僑は中国の開放政策以降のとくに 1980 年代以降に来日した移民である。「落地生根」の精神で地元根づいた老華僑と、新たなビジネスの開拓に熱心な新華僑とでは、南京町との関わり方にもそれぞれの独自性がある。

神戸南京町は、当初の雑居地に中国人と日本人との商取引等の活動の場として発達し、第二次大戦後には一時寂れたものの、1960 年代の区画整理事業のなかで神戸市の支援のもと復興が図られ、現在は神戸有数の観光地となっている。

本研究では、南京町の街並み（タウンスケープ）の変化を、既存研究、インフォーマントからの聞き取り、地図の検討から確認し、チャイナタウン化の過程をたどった。

1. 南京町のブランド化

南京町のブランド化には、1977 年に老華僑と地元日本人が結成した南京町商店街振興組合が重要な役割を果たした。同振興組合は、店構えや電柱、公園などの意匠を中国風に変更し、町の景観の統一を図るとともに、1987 年以降には獅子舞や龍舞

に伴う春節祭を開催するなど、観光客を呼び込む努力を続けている。

1997年に、同組合は「南京町」全体をテーマパーク化することを目的として「南京町」を商標登録した。2009年には(1)食品の提供、(2)中華食材の販売という2つのカテゴリーの商標を取得し、各店舗単位でも「南京町〇〇店の肉まん」というように店名を入れれば「南京町」を使用できるようになった。

2. 新華僑の参入による新たな変化

1970年代末頃から中国からの「新華僑」が神戸にも参入するようになった。「新華僑」のなかには、南京町で、売り子や給仕、コックとして仕事を始めた人々もいた。その中から、裏通りで店を開いたり、自前の店舗を構える人も徐々に出てきている。近年では、新華僑による店舗経営も増える傾向にあり、南京町商店街振興組合への参加も増えつつある。顕在化しつつある「老華僑」と「新華僑」の両者がどのような形で南京町を支えていけるのが課題である。

1995年の阪神淡路大震災後に定着・増加した屋台が固定店舗とともに南京町のイメージ作りに一役かっているのは事実である。ただし屋台を今後どのようにしていくかについては、老華僑、新華僑、日本人を含む組合全体の課題となっている。

3. 主な観察結果

現在の南京町は、職住近接となっている横浜中華街とは異なり、おもに商業ビルからなる商業地区となっている。

南京北路、東路、南路、西路の大通りは主に中華の料理屋や雑貨店によって占められるが、とくに路地には寿司屋やタイやトルコ料理屋、おしゃれなカフェなどが目立つ。こうした多文化的な側面もまた、南京町が独自の雰囲気醸し出す要因となっており、老華僑、新華僑とともに、これらの多様な出自の店が一体となってこれからの南京町を作り上げていくことが望まれる。

4. 考察

南京町商店街組合によるチャイナタウン景観づくりとイメージ作りは、南京町商店街を近隣の洋風の商店街（たとえば、元町商店街や旧居留地地区など）から差異化するツールとなっており、顧客を呼び寄せるのに一役買っている。

また「南京町」の商標は顧客に強力な訴求力がある。商標の使用は、南京町商店街振興組合の会員にしか認められていない。新華僑をはじめとする新規参入者が振興組合に加わるインセンティブとなると考えられ、新華僑と老華僑、および地元日本商店主の結びつきを強まるきっかけになる、と考えられる。

南京町の将来は、老華僑と新華僑が他の組合会員とともに、いかに街づくり（マネジメントと計画）に協力していいけるかにかかっていると考えられる。その観点からすれば、日常的な商取引だけでなく、南京町のブランド化作業への共同参加が重要であろう。

主要参考資料

曹英生 南京町商店街振興組合理事長

林宏仁 神戸華僑歴史博物館事務局長

黄仁群 神戸華僑総会事務局長

林同春『二つの故郷 在日華僑を生きて』EPIC、2007年

中華会館編『落地生根 神戸華僑と神阪中華会館の百年』研文出版、2000年

ⁱ 本稿は、2009年度神戸夙川学院大学共同研究「文化遺産の価値伝達に関する比較研究：ペルー及び日本のガイドの比較から」のメンバーが2010年1月22～23日に参加したEuropean Academy of Bolzano-Bozen (EURAC research：イタリア)での"International Scientific Workshop on New Minorities and Tourism"での発表内容である。神戸華僑博物館、神戸華僑総会、神戸南京町振興組合の方々には、ヒアリングに快く応じていただいた。また、当時の小磯・蝦名・高根沢ゼミの学生には南京町での店舗の入れ替わり調査に協力いただいた。心より感謝申し上げます。

Rethinking Business Risk

-How should we name and manage Globalizing Risks?

School of Tourism, Kobe Shukugawa Gakuin Univ.
Professor, Akihiro SAWAYAMA

【要約】

海外で事業を行う企業が直面するリスクとして、契約当事者間に限定される商業リスクに加えて、1970年代以後「カントリーリスク」が重視されるようになり、21世紀には「地政学リスク」が意識されるようになった。このような用語法の変化はビジネスのグローバル化と並行しており、今一度これらのリスクの意味するものを検討することによって必要な対応策も見えてくるのではないかな。

今日のビジネスリスクはスケールが各国レベルから複数国家、地域のレベルを経てグローバルなリスクに発展する傾向を示している。同時に、原因は経済、政治のみならず複雑で特定しがたい様相を呈している。スケールと原因を軸にビジネスリスクのグルーピングによって、リスクについて、ある程度適切な表現に近づくことができるかもしれない。スケールについては「カントリー」「クロス・ボーダー」「リージョナル」「グローバル」の4段階、要因としては「経済的」「政治的」「特定不能」の3つから成るマトリックスによってリスクを分類したい。

企業の自己解決努力に並行して、多様なステークホルダーとの広い連携（水平的アプローチ）によってリスク分散を一層効率的なものとする試み、またグローバルに思考することの意義が出てきたと考える。

【Contents】

1. Terminology on Business Risk
2. Country Risk to Geopolitical Risk
3. Definition
4. Change of World, Business and Risks
5. Redefinition
6. Unidentifiable Risks
7. Risk Management-Horizontal Approach
8. Conclusion

1. Terminology on Business Risk

‘Geopolitical Risk’ is a popular description of the business risk seeing the latest case of Tunisia, Egypt and Libya. It is Federal Reserve Bank of US who has used the word for the first time in 2002ⁱ. The terrorists’ attack on 9.11, 2001 was a hot issue at that time, and businesspeople might have seriously expected business with foreign countries may accompany risks of unprecedented and unpredictable scale.

In 1980’s, however, ‘Country Risk’ was a popular concept to describe the economic and/or political risk of each country. What was changed during 80’s to the 21st century?

I would like to hereunder firstly follow the change of the terminology to define the risk of each country or region, which is naturally based on the change of perceptions of businesspeople

on risks accompanied at overseas business broadly.

Terminology is not just for description of the objects but trials to as completely and correctly as possible grasp them. As a devil of a Grimm's fairy tale lost his magical power as he was called with his right name.

There are many references on Country Risk while it is still hard to find ones on Geopolitical Risks which is sometimes used something similar to or more serious than Country Risks, and there are some awareness of necessity to define risksⁱⁱ. In this short thesis, I will mostly rely on my own personal experiences at a trading firm in Japan during 1980's to 90's to focus on changes of perceptions of risks by businesspeople especially in Japan, refraining from ambitions to offer universally useful substitutes for the current terminologies to readers.

2. Country Risk to Geopolitical Risk

Soon after Oil Shock in 1973, businesspeople and economists of the developed industrial countries noticed the risk arising from political affairs independent of commercial risks which could be hedged by means of meticulous contract or insurance.

The Iranian Revolution in 1979 had a devastating effect on Japanese petro-chemical project in Iran (IJPC) resulting in the loss of about 600 billion yen at Mitsui & Co., Japanese key project manager. This has attracted attention of the business community. The trading companies ('Shosha') proud of initiating export of Japan started using the word 'Country Riskⁱⁱⁱ'.

About 30 years later, besides Country Risk, Geopolitical Risk is often mentioned by business people today. Energy Business Group of Mitsubishi Corp. starts their self-introduction in the home page of today in 2011 with the following sentence;

'Rising prices for crude oil and natural gas along with mounting geopolitical risks have brought about major changes within the Group's operating environment.'

I picked out the above as Mitsubishi Corp. Japan has already faced a critically big risk in 2006, namely Russian government had suddenly requested Mitsubishi to revise the contract of natural gas project in Sakhalin. Russia insisted on more dominant shares though the contract had been already concluded. There was a possibility that the project would be suspended. If suspended, Japanese side might have to accept the loss amounting to the level of IJPC in 1979. The crisis has been finally settled through negotiation between Russia and Japanese side.

What to close up here is whether this is a case of Country Risk or Geopolitical Risk. Some call it Geopolitical Risk and it was indeed Russian government who has intervened in the contract but the place was limited to Russia only. Then may we call it Country Risk?

Besides, it is also possible to see this case as a commercial dispute as far as it has started and ended between contractors, namely it might have been a kind of 'Commercial Risk'.

3. Definition

I would like to define the words respecting the original meaning of each, but prior to this trial, considering Geopolitical Risk is popular today, I had better clarify what Geopolitics is. I do not mean its definition but a general background thought of Geopolitics.

Geopolitics is a combination of geography and politics. It is assumed that each country aims geographical expansion namely on the surface of the earth chasing geographical advantages and benefits such as the access to natural resources or politically (militarily) advantageous positions. In Geopolitics, invasive nature of each country is presupposed and it inspires that politics and diplomacy of each country is doomed by each location on a map. The history of invasive Germany in late 19th century to 20th century can be explained in relation to her position in the center of Europe to some extent, and long-lasting Russian and Chinese power owe much to their dominance in the heart of Eurasia. The geographical positions of these countries determine their politics to neighbors and peripheries. Thus Geopolitics is usually handling the relations of more than two countries with expansionary ambitions hidden or open. The area considered in geopolitics is where such countries exist, including countries without ambitions but involved in the potential conflict there. The typical cases of today are Caucasus between EU and Russia, Eastern China Sea including Taiwan between US and China, Korean Peninsula, and chain zone connected by Iran, Afghanistan and Pakistan, where the interest of more than two countries are concerned.

Definition of geopolitics may be on the way but

as far as I trace back to classical but still popular theories of geopolitics.

Noting the above, I summarize the wording on risks expecting less confusion.

Commercial Risk:

1) Scale

Limited to individual overseas business partners such as companies or persons

2) Trouble

Breach of contracts such as default, non-delivery, quality claim due to the partners' inability or intention

3) Settlement or Countermeasures

Definite contracts, insurance measures, legal procedures, negotiations etc.

Country Risk:

1) Scale

Between private companies and individual overseas business partners including state-owned companies and governments

2) Trouble

- Breach of contracts due to governmental policy, political changes, societal unrest, terrorists' attack and war
- Danger of human life of workers involved

3) Settlement or Countermeasures

Insurance measures, legal procedures, negotiations etc.

Geopolitical Risk:

1) Scale

Among private or governmental companies, individual overseas business partners including state-owned companies and governments behind them plus the other countries related

2) Trouble

Breach of contracts and/or danger of human life of those involved due to the confrontation of the partners' country with other powers such as war or terrorists activities

3) Settlement or Countermeasures

Insurance measures (if possible), legal procedures (if possible), negotiations

On Geopolitical Risk, I add some additions taking Iran-Iraq War broken out in 1980 as an example. In case of Iran-Iraq War, the trouble can be summarized as follows:

1) Scale

Some of ongoing business contracts at that time was breached or revised by Iraq, and the influential party in this case was Iran, too. Contractors had to pay attention to the development of the war namely the movement of both Iraq and Iran and even Israel. In Geopolitical Risk, there should be violent movements of one country or influential groups at least or sometimes more as the background.

2) Trouble

The trouble was caused by the war initiated by Iraqi invasion to Iran, namely by the intention of more than one country or organization. Businesspeople stopped business activity and their family had to evacuate from Iraq tentatively. (10 years later, in case of Gulf War, the trouble has totally and decisively damaged the existing business.)

3) Settlement or Countermeasures

There was no valid insurance as war was

defined as force majeure (Act of God).

For businesspeople having contract with Iraqi partners had no choice but to patiently try negotiations on respective trades and projects.

The above definitions are just tentative as I just picked out the prevailing risks only. I will redefine business risks later, but would like to see a short history of risks. The core of above definitions is scale while trouble and countermeasures are the matter of risk management. Only with scale as a criterion, it is hard to think of management. We need another criterion.

4. Change of World, Business and Risks

The difference between Commercial Risk and Country Risk is clear. Geopolitical Risk includes more political and/or military factors than Country Risk. Social unrest of one country should be limited to Country Risk, though it may lead to the political upheaval as in the latest case of Tunisia and Egypt. The case of Sakhalin already quoted should be classified as Country Risk as far as Russia at that time intended revising contract only.

My final goal here is not to clarify the correct terminology of risks but why/how business people especially of Japan (it should basically include all the trading countries of today) have gradually faced the higher level of risk since 1970's. Such a review will provide us with clear understanding on the change of Japanese business and the world Japan is facing, and probably some hints for risk hedging.

In 1960's, Japanese major target countries for export were USA / Europe and there was no

serious risks caused by political or social changes in these countries. In 1970, however, Japanese business people needed to exploit new markets in Asia, Africa and Middle East. Until then, export and import was almost exclusive missions of trading companies specializing in foreign trades endowed with human resources capable of international communications and trading procedures defined by INCOTERMS. It was mainly big scale trading companies called 'Shosha' who exported the products of domestic manufacturers to overseas^{iv}. The trend has changed gradually as Japanese manufacturers have obtained the skill of international trading to USA / Europe and they became less dependent on trading companies who have been just in-between for Japanese makers and overseas users taking brokerage with almost no risk of default or claims of buyers. Trading companies who noticed the necessity to exploit new markets with which ordinary Japanese manufacturers are not yet familiar.

These markets (or potential markets) were candidates of emerging markets in Africa, Middle East or communistic countries such as Russia, Russian peripheries and China. We should note Mitsui & Co., involved in the trouble of the Iranian Revolution (1979), was a major Shosha. Country Risk has become the common risk for all companies trading with Africa, Middle East and communistic countries.

There were more than ten major Shosha in 1970's, but around five in 1990's. Those who failed to find other business models than commission taker as in-between for manufacturers and users were forced to reduce

the commission rate and finally lost attractiveness to manufacturers.

The end of Cold War and development of globalization urged some Shosha to study the feasibility to invest their human and financial resources on emerging markets for export and major suppliers of rare natural resources for import. Shosha stopped sticking to obsolete business-model of brokers and changed into suppliers of natural resources.

This change naturally leads Japanese traders to have firm assets on the exporting countries, not only offices but also lands, mines, plants, fields, warehouses, logistics facilities and people. Then the risks they experience are not defaults only but various with wider range and bigger scale. They could quickly withdraw if they are just exporting or importing firms, but they cannot as they have owned fixed assets and became more vulnerable to any political or societal changes in countries they invest.

On the general process of disappearance of broker business in 1990's, Japanese trading companies initiating overseas business were forced to face higher degree of risks. It matters not only trading companies but also the users relying on them for procurement of overseas products and resources. Meanwhile, we had better note this change has been accompanied by another mega-trend of globalization.

5. Redefinition

Since 1970's, overseas business risks was not limited to default of individual trade partners or governments, and extended to include both economic and political risks, while the geographical range has shown the enlarging

tendency beyond the borders of each partner country of investment and trade. To cover the trend, Geopolitical Risk was introduced, but it is not enough as it can be applied to the places where certain countries have geopolitical interest and intentions, namely will of hegemony beyond their borders. Geopolitical Risk is originally suitable to the area over which some big powers stare at each other to gain control or influence, such as periphery of Russia (ex. Georgia) and Korean Peninsula.

These risks are summarized as sorts of military conflicts or wars. There should be hegemonic intention as background. In this sense, Sakhalin affair of 2006 could be named as Geopolitical Risk if we assume Russia might have intended to obtain some influence over the territory at that time, but it was not so.

Someone may call today a new Cold War era, in which China and US are seeking a equilibrium over some areas. Cold War stays cold when confronting players have reached a stable equilibrium such as the case of US and USSR till 1989. We need not simply discard Geopolitical Risk, but the risk of today is not always military sort or one caused by hegemonic intentions. Besides geopolitical one, there arises a risk easily to develop into global scale economic crisis such as Sovereign Risk prevailing in Europe and potential bubble burst in the emerging markets. Even natural or biological factors such as climate changes and epidemic diseases should be counted as major risks as it will critically damage the supply of agricultural products and can cause social unrest. These are causes of risks and we should not mix them with scale of risks.

For simplification, let me summarize causes

into ‘economic’, ‘political’ and ‘unidentifiable’. ‘Unidentifiable’ means the following causes.

- Mixture of economic and political causes
- Causes difficult to distinguish
- Causes beyond human intention such as biological or natural disasters.

Meanwhile, scale of risks shall be categorized with ‘Country’, ‘Cross Border’, ‘Regional’ and ‘Global’ omitting ‘Commercial Risk’, of which I regard as a part of political risk. Cross Border Risk involves more than two countries and Regional Risk is one not limited to a few countries but extended to regions such as Middle East. Even Regional Risk is not enough if we consider risks extending into much wider global scale such as terrorism, environmental pollution, climate changes and biological threats. Such risks should be categorized as ‘Global Risk’.

Image:

(Scale)	Economic	Political	Unidentifiable
Global	G-e	G-p	G-u
Regional	R-e	R-p	R-u
Cross Border	B-e	B-p	B-u
Country	C-e	C-p	C-u
	Economic	Political	Unidentifiable
	(Causes)		

In the above Image, the part marked with an oval line should correspond to ‘Geopolitical Risk’, namely I redefine Geopolitical Risk as caused by political intention and geographical characters, which involve more than two

countries, sometimes extending to regions and have possibility to be globally critical. Geopolitical Risk is a part of Cross-Border or Regional Risk. In this framework, Sakhalin trouble between Japan and Russia on the natural gas project can be categorized as 'Country Risk caused by political factor'(C-p). Cause of European sovereign risk is economic (B-e) but can grow into Regional (R-e) and further into Global (G-e) as Lehman Shock of 2008.

The latest case witnessed in Tunisia and Egypt ended with political upheaval and they shall be regarded as political risk (C-p) from a viewpoint on consequences as of the mid of February 2011, but it is said the background of people's demonstration was extremely high unemployment and sharp rise of food prices, namely they can be seen as C-e. If we define the risk of Tunisia and Egypt before 2010, we had to name it C-u as there had been both economic and political risk. At present, the issue is what kind of situation will prevail in these two countries and whether and how their political movements influence on neighbors in Middle East. In this sense, the current risk is B-p or R-p. If there joins other factors than political, economic, cultural or tribal factors, the risk is R-u.

If the risks can be focused on respective countries and their cause are identified as economic or political, there will be some countermeasures to C-e, B-p, B-e or B-p, but if we assume the risks whose causes are unidentifiable, accordingly scales are unpredictable (ranging from C-u to G-u), we need to think of new types of hedging methods.

As for terrorism, if we assume a persistent

political intention at terrorizing organizations and characteristic in the certain regions, we may call it Geopolitical under G-p or R-p, but if it is volatile and lacking in political targets like pirates of Somalia, we had better include them into R-u^v. Besides, the category in Image is not fixed. Each type of risk can change and develop into different one. For instance, motivation of Somali pirates is not political but economic at present but there is no denying it may change into unidentifiable one. Risks usually realize with unknown causes and gradually visible whether they are economic or political, but they may be again reshaped into unidentifiable one with change of scale, escalation or convergence.

This is not for a wording game but to mean two things.

- 1) Type of business risk can be defined with scale and cause, and each risk has a possibility of escalation or convergence
- 2) Scale of business risks is showing a growing tendency, and their causes tend to be various and hard to identify

6. Unidentifiable Risks

I left unidentifiable cause just as 'unidentifiable', but I should try to refer more about it.

Unidentifiable cause is not categorized into economic or political and includes non-human factors as natural disaster, while I am tempted to rephrase it as 'social', or 'cultural'. However, the range 'social' or 'cultural' covers is too wide and ambiguous. For example, religious conflicts can be included in it, but if the religious conflict has been dominant, there may be influenced by

not a few political factors as in case of Iraq after 2003. Meanwhile, political and economic causes are sometimes not purely political or economic and accompany cultural or social factors. If we leave ourselves in this vague border of wording, we will finally lose any means to see the risks. It is too ambitious and unrealistic if I eliminate 'unidentifiable' and regard all risks as identifiable such as 'social' or 'cultural'. Then there arise more factors claiming to be representatives, such as 'religious', 'historical', 'traditional', 'ethical', and so on. Each of all the candidates contains again further factors such as political or economic^{vi}.

'Unidentifiable' is a conceptual pocket to avoid confusion, but it is convenient because political or economic risks sometimes turn out to be religious or social and finally reveal themselves influenced by political or economic factors. For instance, religious conflict becomes visible when one religious group is badly oppressed economically and politically by another ruling one, or the both confronting groups are politically forced to be obedient to the autocratic government (as in case of Iraq under Saddam Hussein). Generally, economic and political factors play the role of trigger to develop the existing risks into visible troubles. Economic and political factors tend to be finally ignitions in a room filled with gas of many unaccountable factors.

Besides, though I concentrated on human factors as social or cultural, there are many non-human factors such as natural disaster (ex. earthquake, climate changes, etc.).

With this consideration, I confine the causes to 'economic', 'political' and 'unidentifiable'.

7. Risk Management – Horizontal Approach

Scale-up of the business risk as symbolized in the risk terminology is attributable to globalization especially in economy at first. Every businesspeople have learnt to easily access to the new market and new supply sources since 1990's, but it means business managers are entering the unknown world where nobody is sure what to appear and happen. The partner countries and regions are also changing. Newly emerging markets are prosperous but we should not ignore it has just emerged in the 21st century. In this situation, what kind of risk management is possible and realistic?

If we consider basically, we will be able to find some countermeasures. For this consideration, the categorization as in above section 5 suggests that the risk has a trend to have more dimensions, namely not limiting to a commercial dimension but involving political, economic and unidentified dimensions. Then the hedging of these risks should be also multidimensional or 'horizontal'.

The followings are just simple examples.

(1) Improvement of Conventional Measures

Insurance by public or private sectors are available to some extent, and letter of guarantee issued by major banks is still one of the best means, but we should note what these can cover is mainly default of the partners and some portions of the loss.

Uncontrollable factors cannot be covered by ordinary insurance. It is nevertheless worthwhile for business people to try negotiations with insurance and financing institutions. For such negotiations, the

categorization as Image will be some guidance.

(2) Regional Experts

Old type of brokers taking commission for easy trading is disappearing in many fields. But their substantial function should not be underestimated. They originally functioned as shock absorbers for manufacturers and the users unfamiliar with overseas business. If business community views the current world as unpredictable, it is worthwhile to reconsider employing a new type of broker who vigorously works for the benefit of the client. New ones must be consisting of 'regional experts' with sufficient intelligence of politics, economics, culture and skill of hard negotiations based on their long experience in the region. They have to be well acquainted with culture and mentality of the region as conflicts based on cultural difference can be serious today. Companies have an option to bring up and train regional experts instead of outsourcing if time allows.

(3) Networking

Considering the risks of today are becoming cross boarder not limited to the partner countries only, companies with global networking are in the position of providing the information and advices to others trying to start business with new overseas partners.

Such networking companies should amplify the network further through these works, and their consulting works will develop into a partnership, which is similar to good

brokers as mentioned in (2). It is not impossible for them, with the integrated actions, to negotiate with governments and insurance companies to invent more advantageous insurance means as (1).

(4) Global Thinking

Before entering the contract, there should be one rule, i.e. we must be careful about autocratic countries. If these countries are large, the scale of the risk is proportionately large and the cause is hard to locate. If they are small countries, they are usually relying on big sponsors as North Korea on China or Tunisia on France. It means we must be sensitive to Cross-Border or Regional Risks even on the business with large and rich countries^{vii}. Before outsourcing the hedging means, it is required to think globally.

As far as risks of today are developing in various dimensions not limiting to the core of projects and trades only but involving surroundings to enlarge the scale and seriousness, the countermeasures should be horizontal, not satisfied with vertical approach of intensifying the protective measures for the project or trade only in a country where business is going on. The integrated collaboration is desirable among companies, organizations and governments, who have the common benefits of minimizing the risk in the region. Some think-tanks researchers or institutes can be members of this network, too.

With these horizontal alliance and collaborations, businesspeople will be able to

exchange information and sometimes take preventive, preparatory and containing actions as a basic crisis management^{viii}, to finally save the life of people involved. It may cost more and bring less profit to business people than the case of protecting the own business alone, but it will consequently contribute to dispersion of the risk.

8. Conclusion

Globalizing trend of business risks is in parallel with the change of business patterns in the globalizing world. Diversification of scale and causes is also going on with the development of globalization in the field of economy. Effective countermeasure to the globalizing risks will require the horizontal integration of higher grade by companies, organizations, governments and individual experts. For this, business communities will need recruit and train the brains who can appropriately tackle the risks and settle the troubles, without confusion by inappropriate description of the risk they face.

-
- i Press release
<http://www.federalreserve.gov/boarddocs/press/monetary/2002/20020924/>
 - ii Michel Henry Bouchet, E. Clark, B. Gros Lambert
'Country Risk Assessment' 2003 Wiley pp.9-13
 - iii <http://www.mitsubishicorp.com/jp/ja/bq/energy/>
 - iv For general understanding on 'Shosha', Japan Foreign Trade Council, Inc. is providing information.
<http://www.iftc.or.jp/shosha/english/index.html>
 - v R. Cooper 'The Breaking of Nations' 2003 Grove Press, summarizing the change of the world and its connotations of rising risk by pre-modern type countries as Somalia.
 - vi C.W. Hill 'International Business' (8th edition) 2011 McGrawhill, Chapter 3
 - vii 'Schumpeter - Beyond Economics' an article of 'Economist' (February 12, 2011) summarizes the necessity of global thinking on political risk.
 - viii C.W.L Hill & S. L. McShane 'Principles of Management' (Int'l Edition) 2008 McGrawhill pp.110-111

中国の「ネットによる世論監督」についての分析 —「ダモクレスの剣」になるのだろうか?—

神戸夙川学院大学観光文化学部講師 戴 智軻

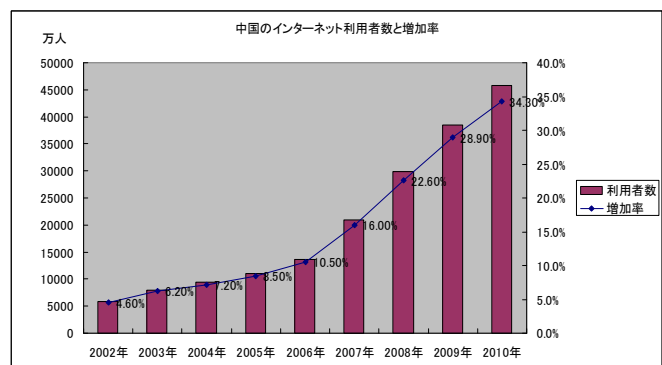
【目次】

1. はじめに
2. ネット世論に対する政府指導者の認識
3. ネット世論に対するコントロール
4. ネット世論による汚職監督機能
5. 結びに代えて

1 はじめに

2008 年、中国はすでにアメリカを抜いてユーザー数世界一のネット大国に成長した。中国互連網（インターネット）信息センター（CNNIC）が 2011 年 1 月 19 日に発表した「中国互連網発展状況統計報告」によると、昨年 12 月末までに、中国のネットユーザーの規模は 4.5 億人に増え、前年よりさらに 7330 万人増加したことになる。一方、モバイルインターネット利用者数は 3.03 億人に達した。しかし、ネットのユーザー数を人口比で見ると三割強にすぎず、すなわち未だ 9 億前後の人々はネットと無縁な存在となっている。内訳は都市 7 割強に対して農村 3 割弱、十代、二十代の若者で全体の 6 割近くに及び、三十代を加えると 8 割を超える。うち、学生が全体の約 3 割である。「都市の若者、そして学生」に偏った構図は今も変わっていないが、ユーザーにとって、ネットがすでに伝統メディアよりも重要なメディアになっているのは事実である。一方、

非ネットユーザーが重要な情報経路とするメディアは圧倒的にテレビである。農村部におけるインターネットの利用が急増しているとも報告されているが、都市部との差が依然として大きいため、現在中国で影響力のあるメディアは「都市はネット」「農村はテレビ」と言ってよいだろう。¹



出所：(CNNIC、2011.1)「中国互連網発展状況統計報告」
により筆者作成

インターネットの急速な普及を背景に、近年中国のネット利用においてとりわけ注目を集めているのは、ネットによる世論監督である。「既成メディアは当局の考えに縛られるが、ネット上の議論は百花斉放である」という指摘にもあるように、中国のインターネットは今ではユーザーによる汚職官僚の告発などによって、従来伝統メディアがおろそかにしてきた「番犬機能」を果し、国内世論を動かし、クリーンな政治を

実現するうえで大きな役割を果たし始めている、と賞賛されている。

中国におけるインターネットの発展を概観すると、一党独裁の政治体制の強化と国際化による経済の高度成長という明らかに対立する国家目標を同時に追求することは、インターネットの発展における政策調整に、従来のメディア規制管理とは異なる柔軟性をもたらしたのは事実である。しかし、結果的に見れば、情報基盤の整備を特徴とする量的発展は今後も維持される反面、政治的現状維持機能を果たすことを強調され、現存の政治体制に脅威を及ぼす状況も容認されるという「情報の自由化」の実現はそれほど容易なものではない、と指摘しなければならない。実際、利用者の増加につれて、各種の法規が相次いで打ちされ、インターネットに対するより完全な規制は絶えず試みられているほか、情報コントロールの巧妙さも増す一方である。

いずれにしても、中国の「ネットによる世論監督」を客観的に評価するためには、まず政府による情報コントロールが大規模に行われている現実注目する必要がある。本稿では、このような視点のもと、ネット世論に対するコントロールメカニズムを概観する上で、近年、「ネット世論が政府を動かし、民意の勝利を勝ち取る」と称される具体的な事例を取り上げながら、中国のネットによる世論監督の効果およびその限界を探ってみようと思う。

2 ネット世論に対する政府指導者の認識

2008年6月20日、中国国家主席胡錦濤

は創刊 60 周年を記念して中国共産党の最大の機関紙、「人民日報」社を訪問し、当該新聞のポータルサイト、「人民網」が運営するネット掲示板「強国論壇」でネットユーザーと懇談し、インターネットの重要性について、次のように強調した。

「中国共産党と政府は、人を基本とし、国民のために政治を行っており、あらゆる政策や方針を打ち出すには国民の意見を幅広く聞く必要がある。インターネットを通じて、国民の意見やアドバイスを募集するのも一つの重要なルートだ」²

これについて、23 日付け「人民日報」は「胡錦濤国家主席の発言は、若者が主体の中国ネットユーザーへの激励である。人民網（ネット）の『強国フォーラム』は中国の指導者がよくチェックするサイトであることが周知のものとなり、対話終了後の 24 時間以内に、フォーラムへのアクセスは 7 倍に増えた」と自社 PR したうえで、「中国のネットユーザーは自ら政治生活に関心を持ち、それに参加する意欲は、世界でトップにランクされているとのことである。中国のインターネットが絶えず規範化され、理性的で成熟な時期を迎えた時、中国の政治文明も新しい段階に入ることが期待できる」と、中国の政治生活におけるインターネットの機能を展望した。

6 月 26 日、中国共産党の理論機関誌『半月談』も、「中国の民主政治のプロセスを加速化させるインターネット」と題する論文を発表し、中国政治の民主化を推進する上でインターネットがきわめて大きな役割を果たしている、と評価するとともに、「ネットを媒介とする『政府—民間』のインターネットアクションモデルはすでに中国政治文明の

重要要素の一つになっている」と指摘している。³

確かに、2003 年の孫志剛事件⁴をはじめに、近年、中国政府の政策はネット世論に影響され、修正を迫られた例が複数ある。しかし、これで、果たして論文が指摘しているように、ネット世論に基づく「政府—民間」のインターアクションモデルはすでに機能していると言えるだろうか。

そもそも胡錦濤をはじめとする中国指導部は、ネット世論に対してどんな思いを持っているのだろうか。07 年 1 月 23 日に開かれた、中国共産党の最高指導機関、中央政治局の勉強会で行われた胡錦濤の発言からその片鱗が伺える。「ネット上に思想と世論の場の建設を強化し、ネット世論の主導権を掌握し、芸術性にこだわって、新技術を積極的に運用し、プラス面の宣伝を強化し、積極的なプラス思考の主流世論を形成させる」⁵ことこそ、どうやら中国政府が目指している真の目標である。一国の人口を遙かに超えるネットユーザーがひしめく中国のサイバー空間で交わされる言論が民意を正確に反映する「バロメーター」だからこそ、中国政府にとっても、ネット世論はもはや無視できない巨大な存在になっている。しかし、胡錦濤の発言からもわかるように、ネット世論を効果的にコントロールし、それを党や政府に有利な方向に転換せようとする、従来の指導方針は、少しも変わっていない。

3 ネット世論に対するコントロール

1. 技術的コントロール

周知のように、中国のネットに対する言

論統制システムの中核に置かれているのは、「ゴールデンシールド・プロジェクト（金盾工程）」と呼ばれるネット統制システムである。米国の大手 IT 企業も開発に関わったと噂されるこのシステムは、国外にある反中のサイトへの国内からのアクセスを遮断することができるだけでなく、ユーザーの IP アドレスごとに履歴を解析し、特定のユーザーの政治的傾向を判別したうえで、接続の可否を判断する、極めて完成度の高い検閲システムとされている。

一方、2009 年、中国政府が「青少年を有害なネットコンテンツから守ろう」と称して導入しようとする検閲ソフト「グリーン・ダム」もまた、金盾工程の一環であり、世界最大のボットネットの構築を狙うものであると指摘されている。

2. 公権力によるコントロール

中国の「サイバーポリス」の正式名称は、国際互連網安全監察専門警察である。「中国警察の最新業種」と言われるこの特殊部門は、その規模が近年急速に拡大している。2000 年以降、各地の公安局に「コンピューター安全検察部」が相次いで設けられ、高学歴で専門知識の豊富な人材が大量に投入された結果、その規模は、現在、3 万から 5 万にも達していると言われている。星の数ほどあるネットカフェの利用状況をリアルタイムに監視することが、サイバーポリスの重要な仕事の一つとされてきたが、最近、警察の格好をするアニメキャラクターが一定の間隔でウェブページに登場する、いわゆる「サイバーパトロール」や、ユーザーの密告を奨励する「サイバー告発シス

テム」の導入、などの手法も多用されている。このような現実をみれば⁶、サイバーポリスの存在感を強調し、「威嚇」によって不穏と思われる言論活動を未然に防ごうとする傾向が強く現れはじめていると言える。

3. 人海戦術によるコントロール

前述のように、中国のネットの利用主体が学生であるため、各大学内の LAN を中心に、学生の言論活動に対する監視体制が厳重に敷かれている。基本的にはあらかじめ定めた「違規単語(危険ワード)」に従い各サイトの管理者などに見張らせるという方式を採っている。例えば「共産党」などの言葉がアップされると、その瞬間にアラームが鳴るシステムがあり、管理者は即座にそれをチェックして問題があれば削除しなければならない。

一方、ネット上の世論を「しかるべき方向」に誘導するために、数は定かではないが、各有力サイトに、専門的トレーニングを受けたものの、あくまで普通のユーザーを装う「専属ネット論客」が投入されている。⁷さらに、最近、党や政府に都合のよい書き込みをすることで小遣いを稼ぐ、「五毛党」と呼ばれる集団の活躍も目立っている。⁸これは、最初、企業から依頼を受け、自分のブログで企業のポジティブな宣伝をしたり、あるいはその企業のライバル会社を中傷、攻撃したりすることで報酬をもらう、いわゆる「業界のオピニオンリーダー」とされる「カリスマブロガー」たちが気軽に行う「バイト」から始まったものだが、その後の「市場の需要拡大」によって、「ネット世論誘導サービス企業」まで現

れるほどの一大ビジネスとして急成長した。

「五毛党」のほとんどは、上述の企業が雇うアルバイト学生であるとされるが、数が多いため、その影響力は絶大である。前出の胡錦濤とネットユーザーの対談も、実は「五毛党」が仕切っていたとの報道をみれば、⁹政府もこのビジネスをネット世論のコントロールに有効利用していることがわかる。今日、中国のネットに絡むすべて事件の背後に、五毛党の存在があるとの論評は¹⁰、決して事実無根の憶測ではないと思われる。

このように、社会の安定に脅威を及ぼさないよう、ネット世論に対する政府のコントロールは、「ハード」と「ソフト」の両面にわたって、実に効率的で組織的に行われているといえよう。

2008 年のチベット暴動や五輪聖火リレー妨害に端を発した欧米の対中批判報道に、中国のネット社会に現れた激しい拒絶反応は、記憶に新しい。海外在住の中国系住民も勇み立ち、西側メディアの報道の杜撰さを摘発するために、「アンチ CNN サイト」まで立ち上げ、中国のネットでとどろく「愛国主義の大合唱」に惜しみなくエールを送り続けていた。ネットを通して、「華人の地球規模の集会」が初めて実現したとも評されるこの世論現象は、ネットの政治的動員機能が遺憾なく発揮された結果であると解釈されている。もちろん、中国当局の後押し、あるいは、「五毛党」をはじめとする「世論操作のプロ集団」の活躍がなければ、このような「国境を越えても高度な一致」を見せるネット世論はまず考えられないものであろう。

時期的に考えれば、これは、おそらく胡錦濤が自らネットユーザーとの対談を行い、「ネットユーザーとの距離をゼロに縮めよう」とした背景的な要素であり、またネット世論を重視し、今後もより効果的な誘導、コントロールを展開していくという指導部の決意をさらに固いものにする、重要な契機でもあったと思われる。

4 ネットの汚職監督機能

1. 「汚職官僚摘発の強力な武器」―「人肉検索」

近年、「孫志剛事件」などのような、ネットから発信されたトピックスが社会全体を熱狂的な議論に巻き込んだ事例をみると、パブリックトピックスを提供し、しかもそれを顕在化させる点において、中国のインターネットはすでに伝統メディアと匹敵するほどの影響力を持ち始めている、といえよう。

もっとも典型的な事例は、「人肉検索（検索）」である。「人肉検索」とは、ネット上で不特定多数のユーザーが、標的にした人物の個人データを暴き出すことである。

若者の間で絶大な人気を誇るウェブサイト「猫撲」に数年前「人肉検索」の専門コーナーが現れて注目を集め、グーグルなど大手サイトも続々と同様のコーナーを設けて中国のネット世界で一大ブームを巻き起こした。そもそも関心のある人や物などについて必要な情報をネットユーザーが協力で探しだし、公開することを趣旨としていたが、その後、政府統制下の既存メディアが報じない不祥事や腐敗にも「人肉検索」

が介入し、権力への監督機能を強める傾向が現れた。

たとえば、2009年初めに南京市江寧区不動産管理局局長の周久耕氏が記者会見に臨んだ時の写真から身につけている時計や値段まで人肉検索によって徹底的に暴き出され、「こいつの給料でこんなもの買えない」とネット上告発された。とうとう当局も周久耕を汚職で逮捕せざるを得なくなったと報道されている。

地方幹部の汚職摘発に力を入れている中央政府は、「人肉検索」などの活躍に静観の構えを見せているが、標的にされることを恐れる地方政府は、むしろ我が身の危険を感じ、その抑制に動き出した。

江蘇省徐州市は2009年1月に、「コンピューター情報システム安全保護条例」を6月より導入すると発表し、「個人情報」の無断ネット開示を禁止し、違反には最高5千元、法人で同1万元の罰金を科すと規定した。

一方、浙江省の杭州市も「ブログ記事や掲示板の書き込みやオンラインゲームの利用する際に、身分証明書を提示しなければならない」を内容とする「杭州市計算機信息網絡安全保護管理条例」を制定し、2009年5月1日から施行すると発表した。

この二つの地方条例は全国的に注目され、地域以外のネットユーザーの間でもその是非についての議論が大々的に展開されている。しかし、中央級の国営メディアの報道から、地方の汚職幹部に批判の矛先を集中させる、「人肉検索」のようなサイトの存在には必ずしも反対しないという中央政府の姿勢も読み取れる。たとえば、「中国青年報」は次のように論評を出している。「本人が許

さないプライバシー公開は、法に触れる恐れがある。だが、通常の方法が通じない状況では、市民はネットの強大な力を使って、権力を監督するしかなく、人肉搜索はその主要な手段となった。徐州市の条例が世論の反発を招いたことは、当然かもしれない。」

そういう「お上」の意向を汲み取ったのかどうかは定かではないが、杭州の条例も結局名ばかりのものになり、杭州市政府は正式な発動に踏み込めなかったと報じられている。¹¹

2、「ネットの汚職監督機能」に対する中央、地方政府の温度差

では、人肉検索に代表される、ネットの汚職監督機能に対して、なぜ中央政府と地方政府の間に、これだけの温度差があるのだろうか。

現在中国共産党が直面する最大の問題は、むしろ自身の先進性の喪失と、それに起因する国民の政権への不信である。五十年間に渡って政権の座に居座った結果、共産党や政府の腐敗や汚職が構造化してしまい、共産党の政権維持にも重大な影響を及ぼすほど深刻化している。

共産党幹部の腐敗、汚職現象の深刻さは、中央指導者の発言からも伺える。第15回党大会において、当時の党総書記江沢民氏は、党内の腐敗の蔓延や汚職の横行は、すでに党や政権を生死の瀬戸際に立たせていると、警告を出している。「ここ数年、我々は終始党の思想政治の建設と組織の建設を強化し、党風を廉潔にし、腐敗との闘争の必要性を強調している。が、幾ばくかの成果を上げ

たものの、党幹部の中で、規律無視、法律違反、腐敗、汚職事件などが依然後を絶たない。一部の事案が示したように、そのひどさ、もしくは関与する人数の多さは、新中国が成立して以来かつてなかったものである。党を治めることを厳しくしなければ、規律が弛み、組織自体も骨抜きにされることが目に見えている。党の滅亡、国家の滅亡の危機がないとは誰がいえようか」。

官僚の腐敗や汚職問題が今日、中国民衆の最大の関心事になっているのは事実である。「人民網」や「新華網」などの国営メディアサイトが2009年の全国人民大会、全国政治協議会議が開催される直前に行った世論調査によると、インターネット利用者が両会議で最も取り上げて欲しかった話題は腐敗撲滅だったという。

これに対して、温家宝総理は2009年2月28日に行われたネットユーザーとの懇談において、腐敗撲滅の重要性を強調した。

「如何に金融危機を乗り越えるのかが重要なテーマになっている今日において、人々はなぜ腐敗撲滅にこれだけでも注目しているのか。経済の発展と社会の公平、及び政府のクリーンさは社会の安定を支える三本柱と私は考えている。そのうち、最も重要なのは政府のクリーンさである」。¹²

党の自浄機能を高めるために、中国政府は、批判報道の推奨など、メディアの監督機能の拡大につながる措置をいくつか導入したが、その効果はもう一つのようなのである。事実、等級化された垂直的、権威的なメディアの管理体制が依然として機能している中で、批判報道の全面的な展開は、困難を極めるものである。上級機関の強い統制、干渉を受けているメディアは、批判、暴露

報道に力を入れようとしても、上級機関ないし同級機関に対する批判、摘発を原則的に自粛しなければならない。その結果、批判、暴露の標的をあくまで下級機関に合わせるしかなく、いわゆる「世論監督の重心を下に移せ」との不文律が存在していると同時に、地元の汚職、腐敗現象に目をつぶり、批判の矛先をもっぱら他地域に向ける、という「監督対象の異地化」現象も起きている。「虎を叩けない」メディアは「蠅たたき」にいそしんでいると民衆に揶揄されている。

従って、伝統メディアの監督機能の不足に焦りを感じている中央指導部にとって、行政機関の末端にいる地方幹部の一挙手一投足にまで細かく監視してくれるウェブサイトが存在は、むしろ好都合であろう。「網絡問責制」と呼ばれる地方政府の執政状況や、地方幹部へのネットユーザーの監督体制は、近年、地方の党組織や地方政府の仕事を監視する重要措置の一つとして導入され、活用される動きが急速に広がっている。

現在、人民網をはじめ、数多くの省政府のポータルサイトに「領導留言板（指導者への伝言板）」¹³が開設され、ネットユーザーからの苦情、文句、批判を受理し、対応している。たとえば、胡錦濤が人民網を視察した後に設けられた「（人民網）地方伝言板」に、わずか一年足らずで4万件以上の書き込みが殺到しており、ネットユーザーの質問や苦情に、直接回答を出した閣僚級の高官が21名、県知事のレベルの地方幹部が40数名もいる。また、ネットユーザーの書き込みを無視し、適切な処理を怠ったとして、地方政府幹部が、上級機関からその責任を厳しく咎められた例も報道されてい

る。

一方、中央規律検査委員会、最高人民法院、最高検察院など、幹部の腐敗や汚職を取り締まる中央関係省庁も「ネットによる汚職監督」を重視する姿勢を見せている。中国国家腐敗予防局馬馭局長の発言によると、国家腐敗予防局は、専属スタッフまで配置し、関連サイトの巡回を毎日実施し、ネットユーザーの告発や書き込みを整理分類し、報告書をまとめている。さらに、「ユーザーからの情報が事実と確認すれば、即時に対応処置をとる」とのことである。¹⁴

中国共産党の最高指導機関、中共中央委員会及び国家最高行政機関の國務院にも、ネットの情報やユーザーの書き込み、告発などを収集分析する専門部署が設けられ、「互連網信息摘要（インターネット情報ダイジェスト）」と題する報告書を、毎日、両指導者機関に提出している。¹⁵胡錦濤や温家宝をはじめとする中国の最高指導者に、ネットの世論を重要視し、それを政策判断を下す際の重要根拠として活用しようとする姿勢が、特にSARSの感染拡大が深刻な社会不安をもたらした2003年以降、顕著に現れ始めたことが、新華社などの報道からも確認できる。

党中央や中央政府の情報収集システムに、新華社や人民日報のベテラン記者が各地で覆面調査をし、その結果を中央指導部に定期的に報告する、いわゆる「内参（内部参考ニュース）」の存在が極めて有名である。2003年を前後にして、ネットからまとめられる「網絡輿情（インターネットの世論状況）」も、中央政府が地方の情報を収集し、民衆の世論動向を把握するためのもう一つの重要手段になっているといえよう。温家

宝総理から、「各級の地方政府の幹部はネットの監督を受け、ネットユーザーの声に耳を傾けなければならない」との指示が幾度となく出されたが、これは、必ずしもネットユーザーに迎合するためのリップサービスだけではないと思われる。

3. 「ネットによる汚職監督」に対する識者の理解

ネットによる汚職監督は「ネットによる世論監督」の一環として、「社会の安定」を促進するうえで積極的な役割を果たすことができると、識者の間でも好意的に解釈されている。

中共中央党校政治法律研究室準教授の劉素華氏は、次のように指摘している。「ネットの発展は情報革命だけではなく、今日の（我々が目指す）民主政治が回避できない発展プロセスの一環でもある。ネットは、すでに民意を直接吸い上げる重要なパイプとなっている。党と政府は、「民衆の力」を利用することによって、幹部の管理体制を改善し、党員を制約する規律メカニズムや、司法による懲罰メカニズムをよりよく機能させることができる」。¹⁶

党や政府の幹部を監督するだけでなく、社会の安定を維持するという視点からでも、ネット世論は大いに期待できると劉氏は主張する。「本来隠蔽されるはずの一部の社会問題はネットによって顕在化させられた。『封じ込め』『逃げ回ろう』『圧殺しろ』などという、これまでの（政府の）やり方では、もはや問題を解決できない。問題を顕在化させる上で、それと正面から向き合うというのは、国家の発展、社会の進歩、民

衆の素質の向上に利する効果的な方法であろう」。

ネットはすでに民衆が不満を表出するためのはけ口の一つになっているため、社会の安定に寄与できる「ガス抜き」の機能が期待できると指摘した上で、劉氏は、ネットをうまく利用することによって、政府を支持する世論環境の造成も可能であると結論づける。「ネットはあくまで意見表出のためのプラットフォームに過ぎない。政府を監督すると同時に、政府を支持することもできる。四川大地震などの例からみてもわかるように、政府の迅速な反応が国内外から高い評価を受けたが、ネットを通して効率的に伝達された情報こそ民衆の注意関心を喚起し、政府への協力行動を促した。これは、ネット世論を政府への支持に結束させる可能性を示す極めてよい事例であろう」。

中国の識者の間では、劉素華氏の主張に同調する意見がすでに主流になっているようである。マス化と匿名性を特徴とするネット世論の存在は、民主制度を保障し、政府に対する民衆の監督や、社会全体の発展をよりよい方向に向かわせている点に、異議を唱える識者は皆無と言っていいだろう。しかし、党や政府に不利なデマや、民衆の不満をあおるような言論はネットの匿名性によって助長され、必要以上に蔓延する可能性もあるため、ネット世論に秘められている「諸刃の剣」の性格に留意し、それを制限する措置をとる必要もあるとの慎重論もみられる。¹⁷たとえば、中国青年政治学院マスメディア学部学部長の展江教授は「今日の中国のネットは、すでに（中国民衆にとって）代替できない重要な情報源となっており、数々の『黒幕』を暴く最初の

発信者でもある。我々は、ネットに感謝をしなければならない」としながらも、「(ネットによって暴露される)問題は、あくまで法律と国民教育によって解決しなければならない」と、ネット世論の過剰な膨張に伴う危険性を危惧している。¹⁸

4. 「ネットによる汚職監督」の限界

人肉検索などの「汚職摘発サイト」で活躍し、「中国最強の民間探偵」とも呼ばれるネットユーザーは、その役割分担によって、次のような三つの集団に大別できる

①「腐敗官僚」の身近におり、その内幕や真相をネットでばらす「情報の発信者集団」。

②ネットの検索エンジンなどを縦横無尽に駆使し、雑多な情報から必要なものを効率よく抽出したうえで、各サイトに流布させる「情報の収集拡散集団」。

③各サイトに掲載された断片的情報をまとめたうえで、推理や分析を加え、論評をする「情報の分析論評集団」。

上述の役割分担はまた「汚職官僚」を摘発し、攻撃するネット世論を形成させるメカニズムそのものでもある。しかし、「悪徳官僚」や地方政府からの報復や迫害を恐れるため、ほとんどのネットユーザーは、書き込みなどをする際に、自らを特定できる個人情報伏せている。三つの集団はいずれも匿名性が高く、その実態がなかなか把握しにくい。①ネットの利用歴が長く②時事や社会問題に比較的高い関心を示す③一定の社会的資源や経歴を持つ都市住民、などが特徴として指摘されている。¹⁹

前述のように、汚職摘発サイトは、汚職

官僚だけでなく、地方政府にとっても、恐れるべき存在になりつつあるが、上述の構成メンバーの社会的集团的属性から考えれば、その監督機能は必ずしも十全なものではない。

事実、「人肉検索」にしても、ネットユーザー個人が立ち上げ、運営している「世論監督サイト」にしても、農村問題、少数民族問題などを取り上げる事例がまったくと言っていいほど見られない。重大な社会的不安を引き起こす可能性があると思われるすべてのトピックスがすっぽりと抜けている。²⁰官僚の汚職を巡る「都会の草の根」の議論は、中央政府の汚職撲滅の決心と合致する場合に限って顕在化する傾向が強く現れている。

剽窃や学歴詐称など、学術腐敗の摘発をメインとする世論監督サイト、「新雨糸」を自ら主催し、「中国学術腐敗摘発第一人者」と呼ばれる高名なブロガー、方舟子氏も、ネットによる汚職監督機能をそれほど高く評価していない。なぜならば、「行政機関の末端にいる階位の低い汚職官僚を告発しても、ネット全体、ないし社会全体の注意関心を引きつけることができない。かといって、高級官僚に監督の目を向けると、即座に取り締まれ、封殺されてしまう。それに、中レベルの官僚に対する監督機能もまた極めて限界がある」²¹からである。

中国最高人民検察院が2011年3月に発表した報告書によると、中国の検察機関が2010年に起訴・捜査した汚職・賄賂・越権などの事件が3万2909件に達し、4万4085人が捜査対象となった。そのうち、中央、地方の局長級幹部は188人、閣僚級の高級幹部は6人であった。上述の数字と比較す

ると、ネットによって汚職が暴露され、処罰を受けた官僚があくまで氷山の一角であり、ネットによる汚職監督機能も決してメディアが褒めちぎるほど強力なものではないことがわかる。

事実、「周久耕汚職事件」、「林嘉祥少女暴行未遂事件」²²、「鄧玉嬌殺人事件」²³など、中国のネット世論を唸らせた一連の事件を概観すると、ネットによって暴露されたとしても、ネットユーザーの関心を引きつけ、ネット世論まで動かせる「汚職ネタ」は、猟奇性、またはニュースバリュのある、極めて少数のものに限られている。一方、「汚職ネタ」が詳細な証拠とともに、内部告発者によって提供される場合、ネットユーザーの信頼を獲得しやすいが、陰口を叩くと思われがちな「怪文書」は必ずしも人気がない。方舟子氏が指摘しているように、「普通のネットユーザーが重大な腐敗事件に関する確固たる証拠を入手できないため、たとえそれをネットで暴露しても、信用されることはまずない」。²⁴

5 結びに代えて

中国インターネット情報センター（CNNIC）が2011年1月に発表した中国ネットユーザーの利用行動統計からみれば、インターネットで利用する機能としては、検索が81.9%と最も多くなり、以下ネット音楽が79.2%、ニュース77.2%、インスタント・メッセージ77.1%、ネットゲーム66.5%、ブログ64.4%、ネット映像62.1%、メール54.6%、SNS51.4%などとなっている。

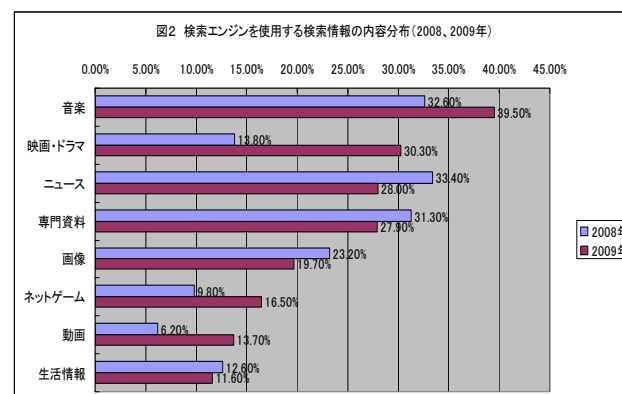
一方、同センターが2009年9月に発表

したネットユーザーの検索エンジン利用行動についての研究報告書によると、検索情報の需要分布の1位は音楽、2位は映画、ドラマ、3位はニュース、4位は専門資料、5位は画像などとなっている。

表1 2010年中国ネットユーザーのネット利用内容および利用率

利用内容	利用率
検索エンジン	81.9%
ネット音楽	79.2%
ネットニュース	77.2%
インスタント・メッセージ	77.1%
ネットゲーム	66.5%
ブログ	64.4%
ネット動画映像	62.1%
メール	54.6%
SNS	51.4%

出所：（CNNIC、2011.1）「中国互連網発展状況統計報告」により筆者作成



出所：CNNIC（2009.9）「2009年中国搜索引擎用戶行為研究報告」により筆者作成#

インターネットの利用状況に関して、両報告書がともに、「娯楽機能の拡大が目立っている」と指摘している。

インターネットは「軽チャー化」されつつある伝統メディアに続いて、政府から中国民衆へプレゼントされた最高の「暇つぶ

しのオモチャ」である。ネットユーザーの関心を、娯楽的コンテンツに向けさせることによって、民衆の政治参加の情熱を沈静させ、政府や党に対する不満を解消させる点において、インターネットは「麻酔的逆機能」を遺憾なく果たしているといえよう。

現在、中国は「ネット上の海賊版コンテンツの横行を黙認し、著作権への侵害を無視する」と国際社会に厳しく批判されている。これに対して、厳罰主義で違法的、低俗的コンテンツを一掃すると中国政府は高々と宣言し、著作権の保護に本腰を上げる構えをみせているが、ネットユーザーから「オモチャ」を取り上げ、その不満を煽るような「愚行」を自ら犯すはずがたぶんないだろうと思われる。

「無知、盲従、激情に走りやすい、物見高い」などのレトリックで中国のネットユーザーの性格を表現するのはやや誇張であるが、中国のネットで人気のある話題が「三つの情」、すなわち情感、情欲、情緒に総括できる、という現実をみれば、娯楽機能をネットの最重要機能に据えるという中国政府のやり方は、実に若年層を中心とするネットユーザーの需要を的確に把握し、その有り余るエネルギーを効果的に消耗すると同時に、かなり高い「利用満足」をユーザーに与えることができた、賢明な施策であろう。

今日の中国では、メディアに対する中国共産党の絶対的支配体制を継続させる基盤の一つである社会体制には想像もつかないほどの激変が起きつつあるが、メディアは「党の代弁者」であるという大原則を支える経済的、政治的要素の均衡関係を、インターネットをはじめとする新しい技術が根

底から変えることはなかったのである。

ほとんどの場合、党や国家の利益と一致する出来事を現実として選択的に報道するのは、伝統メディアの今日まで継続してきたやり方である。もちろん、そこには、党や国家が必要とする国民の意識を形成させるために、現実をねじ曲げてでも少しも躊躇しない情報操作が数多く存在している。ネットという競合的な情報伝達ルートの出現によって、不利な情報を完全に封じ込めることはさすがに難しくなったが、伝統メディアは議題設定などの操作的な手法によって、社会の見取り図をあらかじめ規定し、人々が自分を取り巻く環境を理解するための概念的なカテゴリーと理解の視角をコントロールし、提供する点において相変わらず絶大な影響力を発揮している。

もちろん、インターネットの登場が、「条件付きの表現の自由」を人々にもたらした結果、経済的に恵まれたユーザーたちから、中国で批判的で、選択的で、参加型の新しい文化を構築しようと、リーダーシップをとるべく立ち上がった人も現れた。彼らは、すなわち伝統メディアから押しつけられたものに満足せずに、情報が自由に流通しているウェブやネットの世界から、ほしいものを調達しようとする、デジタル型のオピニオンリーダーである。

しかし、支配的社会価値、伝統文化の規範を、特に学校教育を通じて内面化した大多数のネットユーザーが、「情報の自由」に同調はするものの、その行動が「内なる準拠棒」を乗り越えるのは必ずしも容易なことではない。「市場の検閲」と「国家の統制」という二重規制が敷かれている中国のインターネットは、伝統メディアほど共産党の

主義主張に興味関心を示さないとしても、全体として、この種の「内なる準拠枠」を意識的に維持し、伝達しようと努力している。一部のネットユーザーは時にはこれらの準拠枠を独自に解釈し、突破しようと試みているとはいえ、伝統メディアが提供する素材に基づいて展開されている議論の空間には、対抗的な解釈を生み出す余地が少ないのは、無視できない事実であろう。

「ネットによる世論監督」の実施は、上述のネット利用状況を踏まえつつ、情報化がもはや回避できない世界的潮流であると判断した中国政府が繰り出した実験的なやり方であろう。言うまでもなく、そこには、ネット世論に対する大規模な統制システムがすでに効果的に稼働していることが大前提となっており、社会の安定に脅威を及ぼしうる「ノイズ」を最小限に抑えると同時に、小出しにしながら、政権の安定や党自身の浄化機能の向上に必要な世論批判を容認していくことによって、党や政府のイメージアップを図るという指導部の思惑も見え隠れする。

政権獲得期においても、かの文革大革命期においても、中国共産党は、「思想自白」、「告発手紙」、「大字報」などに代表される「密告」を制度的に取り入れることによって、党員の忠誠を確保し、党組織の浄化を絶えず行ってきた。その意味から言うと、今日の「領導伝言板（指導者への伝言板）」は、「密告制度のネット版」という意味合いもなきにしもあらずといえよう。

重ねて指摘しておきたいのは、「人肉検索」のような民間サイトは、庶民の身近にいる「小物官僚」を監視する機能があるにしても、民衆から遠く離れ、情報の遮断が

厳しく行われている「雲の上の存在」にはその触角がとても及ばない、という点である。一方、「人民網」や各地方政府のポータルサイトの「官営密告サイト」にだけ政府が「真剣に向き合う姿勢」を見せていることから、ネット世論による汚職監督は、今後少しずつ政府がコントロールできるサイトに収斂することになるだろうとも予測できる。

しかし、「金権癒着」を特徴とする権力のレントシーキング問題が指摘されて久しい中国では、汚職官僚と、前出の「世論を操作することが訳もない」と豪語する「五毛党」との癒着も早かれ遅かれ現れるだろう。ネット世論による汚職監督は、果たして中央政府が期待しているように、「密告サイト」が中小役人の頭上につるされる「ダモクレスの剣」となり、「ネット世論」の批判が腐敗官僚への警鐘として機能するかどうか、少なからぬ疑問を感じている。

¹ CNNIC が 2010 年 4 月 15 日に発表した『2009 年中国農村インターネットの発展状況の調査報告書』によると、2009 年 12 月末までで中国農村部のインターネット利用者の規模はすでに 10681 万人に達したという。利用者の規模は増加を維持しているが、しかし、普及率、インターネット利用者の構造、ネット応用の、この 3 点から見ると、都市と農村 間のインターネットの格差が拡大し続けているという。

²

http://news.searchchina.ne.jp/disp.cgi?y=2008&d=0623&f=politics_0623_002.shtml

³ 「互聯網加速中国政治民主進程」『半月談』、2008 年 6 月号

⁴ 2003 年、広州市で臨時居住証明書を持たない地方出身の青年孫志剛が強制収容され、収容所で職員に暴行され死亡した。事件の一部始終を目撃したネットユーザーがそれ

をネットで告発し、ネット世論を賑わせた。ネットユーザーの怒りが治まる気配がないと判断した当局は、「収容法」を改正した。これは、ネット世論が政府を動かし、民意の勝利を勝ち取った第一号とされている。

⁵ 『新華網』、2007年1月24日

⁶ 「サイバーポリスは如何にネット犯罪を取り締まるか」、『新華網』、2008年2月18日、

http://news.xinhuanet.com/legal/2008-02/18/content_7622254.htm

⁷ 『南方日報』、2005年5月9日

⁸ 書き込み一本で、0.5元（五毛）が支払われることから、「五毛党」と名付けられた。

⁹ 『亜洲週刊』、2009年1月28日

¹⁰ 同上

¹¹ 新華網杭州支局の記者は、2009年5月23日にサイト「杭州網（杭州ネット）」の掲示板に書き込みを試してみた結果、書き込むために身分証明を必要としていない実情を紹介し、この新しい条例については、実際に施行が難しいことを指摘している。

¹² 『新華網』、2009年2月28日

¹³ 『人民網』は、「輿情チャンネル」という専門サイトを設け、輿論分析を専門とする専属スタッフを十数人も配置し、ネット世論の集計分析を行っている。その成果の一部をネットで公開するほか、局長クラス以上の高級官僚を対象とする「網絡輿情」という内部刊行物を周二回出している。鄭蘊彤「人民網輿情頻道對網絡問責平台的構築」『人民網—メディアチャンネル』、2009年7月10日

¹⁴ 「網絡問責力度增強」、『星島環球網』、2009年6月20日

http://www.stnn.cc/china/200906/t20090620_1049884_1.html

¹⁵ 胡泳（2009）「中国語境下的網絡世論場」、『網編参考』

¹⁶ 「学者熱議網絡世論稱網絡民意有利於社会穩定」『中国青年報』、2009年3月5日

¹⁷ 王瑤（2009）「網絡世論監督的優勢和不足」、『青年記者（ネット版）』

¹⁸ 「網絡民意有利於社会穩定」『中国青年報』、2009年1月23日

¹⁹ 最近、ネットからの募金などを活動資金にし、ネットで話題になっている事件を調

査し、立証することを生計とする「専門ネット調査員」も登場したと伝えられているが、その数が極めて少ない。『南都週刊』、2009年7月20日

²⁰ 『人民網』の「ネット世論分析報告」からも同じ傾向を示すデーターがみられる。暴動など、社会の安定に影響を及ぼす可能性があると思われる事件は、特に地方政府の情報統制を受ける可能性が高いため、それについてのネット世論も抑制され、存在が薄い。「官方媒体公布上半年地方対応網絡輿情能力排行」、『新華網』、2009年7月24日

²¹ 『星島環球網』、2009年7月21日

http://news.backchina.com/2009/7/21/gb2312_49559.html

²² 2008年10月29日夜、中国南部・新圳市では、海鮮料理店で小学校6年の女兒を中年男が男子トイレに連れ込もうとし、何とか難を逃れた女兒の訴えで両親が男に抗議。すると、「俺は交通運輸省から派遣された役人で、ランクはおまえの市長と同じだぞ。俺と戦えると思うか」と逆にすごんだ。しかし、一部始終が映った店内の防犯ビデオの映像がネットに流れると、新圳市海事局の林嘉祥副局長と判明。経歴や携帯電話、自動車ナンバーなどが人肉検索で暴かれた。林嘉祥は2日後停職になり、11月3日に解任された。

²³ 2009年5月、湖北省のある小さな町のカラオケボックスで働く21歳の鄧玉嬌さんは、自分に性的暴行を加えようとする現地の官僚を殺したため、当局から精神病患者の扱いを受け、殺人犯として逮捕された。この事件の真相が掲示板で広まり、インターネットで大きな反響を呼び、ネットユーザー鄧さんを支持するなど彼女は一躍にして国民のヒロインとなっている。政府もネット世論などを考慮して、結局鄧玉嬌を無罪放免した。

²⁴ 同注21

交通・通信環境発展史に向けての試論

神戸夙川学院大学観光文化学部講師 原 一樹

【目次】

はじめに

1. 交通・通信環境の零地点
2. 交通・通信環境発展史における四つの重要契機
 - 2.1 マス・コミュニケーションの成立
 - 2.2 交通の高速化
 - 2.3 交通と通信の分離
 - 2.4 マス・コミュニケーションの発展
3. 反復される二つの価値対立
4. 現在進行中の交通・通信環境の変化と私達の生活

おわりに

はじめに

現在、人類全体の未来に関わる問題として論じられる機会が多いのは地球規模での自然環境問題だろう。しかしおよそ「環境」概念が、何らかの行為主体及びそれと関係する周囲の外界というカップリング構造のあるところでは広範に使用可能な極めて緩やかな概念であるが故、人間には自然環境以外にも、大きくはそれと対を成す社会環境、更にその下位区分の職場環境・教育環境等、様々な環境が開かれている。この時、交通・通信環境とは、人と人、集団と集団を結合し、また分離する作用をもつ交通・通信技術と人間との関係により成立するものであることとなる。人間は自然環境を離れて生きていけないのと同様、他人と完全に関係を持たずに生きていくことはできない。その意味で、自然環境と同様の根源性を交通・通信環境が持つことは動かない。寧ろ特定の交通・通信環境の発展段階に入り初めて地球規模での自然環境問題が発生したとも表現できよう。私達は現在、抜き差しならない形で複雑な交通・通信環境を生きることを余儀なくされている。そこで本

稿では、重層的に構築されてきた交通・通信環境の内実とそれが人間に与えてきた影響を解きほぐすことを筆者なりの観点から試み、今私達に与えられているものは何なのか、その意味の理解を深めたい。最新の情報通信技術については十分に触れることができなかったが、以下の各問いを展開することで、現在に至るまでの交通・通信環境の発展史を大局的に俯瞰することをまずは目指す。

展開される問いは以下である。

1. 交通・通信環境の零地点はいかなるものか。
2. 私達はいかなる歴史的蓄積を経て、現在の重層的交通・通信環境に到達したか。
3. 歴史を通し反復的に登場する価値対立はどのようなものか。
4. 私達が直面している交通・通信環境をどう理解すべきか、その可能性と課題は何か。

1. 交通・通信環境の零地点

私達は現在、極めて重層化された交通・通信環境に生きている。ここで、限りなく交通・通信技術が零度に近い地点を想定してみると、それはどのようなものだろうか。

原初的通信手段が話し言葉であるのは明らかだろう。自他未分離な生を生きる赤ん坊は、前言語的コミュニケーションしか存在しない世界に生きている。そこに十全な意味での他者との分離はなく、同時に「私」も十全な意味では存在しない。私達は、言語獲得により自他の分離を生き始め、同時に言語的コミュニケーションの可能性を、換言すれば新たな方法で他者と結合する可能性を持ち始める。無論、言語は私が生まれる以前から在り続けて来たものであり、私にとって他なるものとも表現できる。しかし人間は、この他なるものを己のもの、強く言えば己自身となすことで十全

な意味で「私」となるのであり、同時に、言語を知らぬ存在者とは異なる次元で、他者との結合と分離を生きることにもなる。言語を語る存在者が、固有の「他者との結合と分離」を生きようになる為には、最初に根源的結合が必要である。

原初的交通環境において私に与えられているのは、己の身体と、他の誰かによって踏み固められ、皆が通るものとして既に出来上がったものとして在る「道路」である。話し言葉と同様、これらは私の創造物ではなく、他者が私に与えるものである。他者の先行性と優越性という意味で、ここにもまた根源的結合があると表現できよう。

以上は、交通・通信環境の零地点における根源的結合の成立を言うものである。交通・通信技術は人と人、集団と集団を結合すると同時に分離するものだが、生まれ来る人間の視点に立てば、人間はまずもって他者が与えてくる交通・通信環境へ結合せねばならない。私達は次節以降、交通・通信環境が様々な形で「人間の結合と分離」をもたらしてきた事態を検討するが、いかに交通・通信環境が変化しようともこの事態は動かない。

さて、「人間の結合と分離」には政治的・経済的・心理的等の様相が存在する。話し言葉・身体・自然発生的道路のみからなる交通・通信環境の零地点においては、次の事柄が指摘できよう。生存の為の利害を共有する一集団を想定すると、たとえその集団が交通・通信環境の零地点にあるとしても、その中にはやはり政治的分離(支配者と被支配者)、経済的分離(富者と貧者)、それらに相関的な各成員間の心理的分離が存在するだろう。話し言葉・身体・自然発生的道路がそれらの原因だとは言えないが、少なくとも必要条件ではある。次に、このような集団が散在する世界を想定すると、集団間の結合は比較的弱い。これは、交通・通信環境の零地点においては、権力が力を及ぼす範囲が限られ、集団間の交易も限定的にしか為されえないことを思えば理解できるだろう。この視点から見ると、交通・通信環境の零地点は、特定の一集

団の結合の度合いを強めるとも表現できる。換言すれば、政治的・経済的・心理的な意味での人間同士の結合の度合いが相互に一致している。

以下、次節では交通・通信環境の発達史を概観するが、その意義の理解において、交通・通信環境の変化が政治的・経済的・心理的な「人間の結合と分離」をいかにもたらしてきたかと問う視線を一貫して保持していくこととする。

2. 交通・通信環境発展史における四つの重要契機

現在私達が生きる交通・通信環境に至る歴史的過程には、画期的契機が幾つか存在する。本節では「文字・印刷物・新聞の誕生によるマス・コミュニケーションの成立」・「交通革命による交通の高速化」・「電気メディアによる交通と通信の分離」・「ラジオ・テレビによるマス・コミュニケーションの発展」の四つを挙げ、簡略に歴史を回顧しその意義を考察する。

2.1 マス・コミュニケーションの成立

周知のように、コミュニケーションにはパーソナル・コミュニケーションとマス・コミュニケーションの区分がある。典型的には、通常私達が言語を用い相手と対面して相互的に行うものが前者、或る特定の情報発信者が大多数の受け手に対し一方的に情報を発信するものが後者である。前節の零地点においては話し言葉のみしか存在しないと想定したので、そこで為されるマス・コミュニケーションはせいぜい発話者の声の届く範囲で行われるものに留まる。零地点にある一つの集団の権力者は、集団全体に対して語りかけただろう。それは一つのマス・コミュニケーションではあるが、限りなくパーソナル・コミュニケーションに近い。それに対し、文字と印刷術、新聞の誕生が、私達が現在生きている、政治的・経済的論理に強く巻き込まれるマス・コミュニケーションの可能性を拓いた。

紀元前 3000 年には既に存在したと言われる文字は、人間の幾何級数的な知識の蓄積を可能とした。話し言葉に対する文字の読み書きの特徴として、それが他者や自分の過去の思考の痕跡を残し、改めてそれに触れる機会を与えることで、話し言葉のみを持つ人間に比べ反省的人間を生み出す点が挙げられる。「人間の結合と分離」の視点からは、文字は過去の人間と現在の人間を会わせるという意味で、話し言葉以上に人間の結合を可能とする一方で、近代に至るまで社会的少数者だった文字の読み書きができる人間とその他の人間との相違を生み出し、身分的不平等という人間の分離を促進したと言えよう。政治的視点から見ると、紙に書かれた文字が整備された道路を走る車輪を利用した使者により伝達されることで、権力がより広範囲へ力を及ぼすことが可能となった。話し言葉・身体(=徒歩)・自然発生的道路のそれぞれに対応した、文字(と紙)・車輪・権力により敷設される道路、の出現によって、広範囲の政治的結合を可能とする条件が整った。

1445 年のグーテンベルクによる活版印刷の発明以前も、木版印刷や口述筆記、写本により文字の複製は行われていたが、活版印刷の発明で同一文書が手軽に、かつ大量に流通するようになった点が重要である。活版印刷は、文字が原理的に可能とした事態を、量的に拡大させた。1700 年に至るまで印刷物の 50%以上が古代・中世の書物だったとされているが、活版印刷は、時間幅から見ても量的に見ても、過去と現在の人間の結合を、その出現以前に比べ更に推進したと言えよう。しかし逆に見ると、遙か古の書物の読書は、過去の世界の信念や習慣と読者自身のそれらとの相違(=分離)への覚醒をもたらし、同時に過去の世界に関する知識を持つ人間と持たない人間との間にも心理的分離をもたらす事態だったとも考えられる。つまり読書の経験は、歴史相対的意識や自己意識の強い個人をも生み出した。その象徴は「聖書を読む個人」だが、活版印刷が聖書の一般信者への流通

を可能としルターの宗教改革を支えたとの認識は周知だろう。つまり、読書経験に裏打ちされた個人の登場は、「(聖書を読む)平等な個人」の形成に寄与したという意味で人間の政治的結合に寄与した。同時にその裏面として、僧侶と一般信者の政治的分離(=身分不平等)に基礎を置いていた教会中心の共同体の解体が生じたという意味では、人間の分離がもたらされたと言えよう。

活版印刷の誕生から約 200 年後の 1660 年にドイツで最初の日刊新聞が誕生したのを皮切りに、欧米では 19 世紀に一般大衆も購読可能な廉価な新聞が登場するに至った。日本でも明治維新前後から近代的新聞が発刊され始めた。マクルーハンも指摘するように、新聞は書物一般とは異なる原理に基づいており、それが可能とするマス・コミュニケーションはまた新たな質を持っている。つまり、書物はあくまでも一人の著者が自分自身の視点から物事を一貫して語るものであるのに対し、新聞は多様な情報をモザイク上に集合させたものであり、書物とは全く異質な形式から成る。ここでは新聞が二重の意味で政治に関係することを指摘しておきたい。第一に、新聞は近代国民国家に対応したマス・コミュニケーション形態である。新聞は単一言語で書かれ、また、無関係である様々な事象をそれらが或る時間幅の間に或る特定空間内で生起したというのみの理由で同一紙面に並置する。この二つの特徴のうち、前者は母国語というナショナリズム装置と対応し、後者は近代国家の国民の想像力にその根拠を持つ国土空間と対応している。新聞は国家という特定単位の間集団の(心理的結合を基礎とした)政治的結合を強める。それは同時に国家を異にする人間同士の結合を困難にするということでもある。第二に、新聞はその社主や時の権力により操作されうる。この点は既に周知の認識ではあろうが、完全に中立な報道など不可能性であることは繰り返し銘記すべき事実である。常に私達は、報道される事実や報道のされ方が、中立を装いつつも実は何者かの利益に

結びついていないかを問う批判的姿勢を忘却するわけにはいかない。

2.2 交通の高速化

I・イリイチに次の言葉がある。「人間の動く速度はキュロスの時代から蒸気の時代まで変わらなかった。・・・ヴァレリーの言葉を借りれば、ナポレオンもやはりシーザーと同じくらいゆっくりと進まねばならなかった。・・・パリ、トゥールーズ間はローマ時代には約 200 時間を要していたが、1782 年に定期の駅馬車でもやはり 158 時間を費やしたのであった。19 世紀になって初めて人間の移動する速度が増した。・・・ナポレオン 3 世の主張するところでは、1855 年には列車はパリ、マルセイユ間を平均時速 96 km で走っていたのである。一世代の内に各フランス人が一年に移動する平均距離は 130 倍も増加し、イギリスの鉄道網は最大限にまで拡大された。」¹イリイチが言及するこの 19 世紀交通革命は、蒸気鉄道や蒸気船による輸送の速度・量・規則性の拡大、運輸費の引き下げをもたらした。日本は、1872 年の新橋―横浜間の鉄道開業以来、第一次大戦期までには全国に稠密な鉄道網を張り巡らせた。他方イギリスやアメリカにおける鉄道黄金期は第一次大戦時までで、その後、不況による貨物輸送量の激減と自動車普及が鉄道を衰退させていった。これに対し日本では第二次大戦終了時まで鉄道が陸上交通の独占的地位を保持し、高度経済成長期に自動車産業が国家産業に位置づけられモータリゼーションが進行した後、1960 年代に自動車にその地位が明け渡された。以降も日本は欧米諸国と比較する限り旅客輸送における鉄道のシェアが高い(多少古いデータではあるが、1993 年実績で合衆国 1%、ヨーロッパ諸国 6～8%、日本 35%)。しかし、旅客・貨物とも自動車が 60% 近くのシェアを持つ現状は、自動車優位社会と表現すべきだろう。また、ジェット機等の大量高速交通機関や情報通信システムの発展を一因として、1980 年代以降、人・物・金・情報

の国境を越えた往来が増大してきたが、日本の場合、旅客にはほとんど航空機が、物流には外航海運が利用されてきた。しかし輸出入製品の軽薄短小化が進む現在、物流に関しても航空輸送の需要が増大しつつある。象徴的に言うと、現在私達は、「36 時間世界一周」が可能な高速度世界を生きているのである。

以上の交通の高速化の歴史を思想的次元で捉えれば、「権力の交通支配から権利としての交通へ」とスローガンのように表現できよう。近代以前の権力は交通の支配によりその力を維持・増大してきた。例えば徳川幕府は武士や民衆に移動の自由を認めず、旅行に厳重な制限を加えていた。具体的には鎖国による海外渡航の禁止・農民の土地への緊縛・大名の参勤交代等である。交通手段に関しても、大船の建造と使用の禁止、街道における車の禁止、主要街道の架橋禁止等、様々な制限を設けていた。また江戸―大坂間を結ぶ飛脚に関しても、潤沢に資金を投入できる幕府が圧倒的な高速度を独占していたと言われる。現代フランスの「速度の思想家」、ヴィリリオは次のように言っている。「権力は富と切り離せませんし、富は速度と切り離せません。・・・権力とはいつも、伝令者や輸送手段や通信手段によって、領土を管理する力のことなのです。」²

しかし、近代国家の時代に至ると権力と交通の関係は端的な独占という形を変化させることとなる。近代国家が特に資本主義初期段階と戦争時に交通手段を敷設したり所有したりするといった事態は存在し続けたが、近代以前との決定的相違は、「近代国家の自由かつ平等な国民」が基本的人権の一つとして「移動の権利」を獲得するに至ったことである。そもそも資本主義の成立条件として、自由な移動を許された人間が自由な労働力となり、それが職業選択の自由と結びつくという動きが存在しなければならぬのだから、この意味で近代における人間の移動の権利の承認と資本主義の発展とは並行的事態だったと言えよう。日本におい

ては憲法が第 22 条で「移動・職業選択の自由」を認めているが、高度経済成長期以降のモータリゼーションの流れの中で、特に地方で公共交通の衰退・廃止が進んだことへの配慮や、今後の高齢化社会の見通しの下、「国民が、誰でも、いつでも、どこへでも安全で低廉に、かつ便利、快適、正確に移動でき、かつ自由に貨物を送り受け取ることができる権利」としての「交通権」の概念を社会的に定着させる必要があるとの主張が 80 年代以降存在している。³

以上の、交通の高速化の歴史とその思想的次元での把握を踏まえ、「人間の結合と分離」の視点からは次の事柄を理解しておく。交通革命以降の交通の高速化は人間の活動範囲を広げ、遠距離にある人間同士の交流を容易にし、結果的に都市の発展・経済発展をもたらしてきた。交通の高速化は移動にかかる時間の短縮をもたらし、人間が特定の距離について抱く「遠さの感覚」を縮減してきた。現在も日本は「地域半日交通圏」(各地方の生活圏の中心となる都市から中核都市へおおむね一時間以内、中枢拠点都市圏や主な物流ターミナル等へおおむね二時間以内のアクセスを可能とする)というスローガンの下、人間の緊密な結合を更に促す政策を展開しようとしている。交通の高速化は、速度による物理的距離(人間の分離)の克服を行うことで、人間の心理的結合を強めると言えよう。しかし他方、例えば高速鉄道が開通した地域で、列車が停車する離れた地点間同士の結合が強まり、列車が通過する中間地域の経済が不振になる等、高速度が本来ならば近い位置にあるはずの人間集団の経済的・心理的分離をもたらしてしまうという事実も忘れてはなるまい。

交通の高速化について、今後私達が問題とすべきは何だろうか。かつてイリイチは「人間が旅行する際の特定の速度がその人間の属す階級と仲間を決める」と語った。より高速度の航空運賃が、それより低速度の鉄道運賃に比べ必ずしも割高ではない現在の日本社会を見る限り、この表現は今や強

い説得力を持つものではない。また「高速度＝高経済力」の象徴的存在だった超高速旅客機コンコルドの営業が停止され、それに替わる超高速移動体の商業化が構想されない現在、新たな「高速度＝高経済力階級」は今後誕生しえないようにも見受けられる。しかし、イリイチの主張が全世界を視野に入れたものだったことを忘れてはなるまい。全世界規模で見れば、ジェット機等の高速移動と全く関係を持ちえない人間が圧倒的多数を占めているのは明らかである。無論、必ずしも高速移動が絶対的に価値あることではなく、現在ジェット機で高速移動をする人間の大半がビジネス上の必要に迫られているとも表現できる。経済的必要から高速度を強制されている人間が多々存在するのである。つまり世界規模で見ると、低速度に縛られた人間と高速度に縛られた人間の双方が存在するのであり、経済のグローバル化を視野に入れた上で、いかなる適切な「速度の体制」を構築していくべきか、これこそが今後私達が解決すべき真の困難な問題だと言えるだろう。

2.3 交通と通信の分離

一般に交通は物資や人間を運び、通信は情報を運ぶわけだが、電気時代に入る以前の通信の代表格だった郵便に典型的のように、通信は長い間物資や人間を運ぶ交通網・交通手段に依存することでのみ存在しえた。情報伝達は物資や人間の伝達速度を超えられなかった。無論、物資や人間から独立した情報のみを伝達する試みは、狼煙や手旗信号の形で存在してきたが、それらは距離的限界を持っていたり、気象状況による制約を受けたりして、交通からの通信の独立をもたらす力は持たなかった。

1844 年のモールスによる電信の発明、1876 年のベルによる電話の発明が、この状況を変革した。これにより、二地点間に電線を張りさえすれば、情報のみの伝達が可能になったのである。遙か遠くの情報や他人の声が「今・ここ」に瞬時にしても

たらされる時代に人間は入ったわけだが、これが人間社会にもたらした強い衝撃は「情報革命」と表現しても良いだろう。モールスによる最初の電信が伝えたメッセージ、“What hath God wrought(これは神のなせる業である)”は、人間という存在者の大きな変容を象徴する言葉である。

更に、電信・電話が情報伝達の為に電線を必要とする限りで交通との構造上の類似性を持つのに対し、1896年にマルコーニが発明した無線通信は完全に交通から独立した通信の領域を開いた。無線通信はケーブルが敷設しにくい場所での通信や移動体との通信を可能としたが、天候に影響を受ける点や受信機があれば他人の通信を傍受できる点等が問題点だった。しかし、無線通信がラジオ・テレビという放送事業、マス・コミュニケーションの発展形態を可能とした点が何より重要だろう。

さて日本では、明治政府が1872年から76年のわずか5年間に列島全体への電信ネットワークの敷設に成功している。これは近代国家の確立と交通・通信システム(鉄道・電信)の確立との同時進行性についての解りやすい事例と言えよう。電話は1890年に東京一横浜間で開業したが、電話機を所有できる世帯は裕福な少数者に限られていた。第二次大戦後、60年代の積帯期を経て一般大衆にまで電話が普及するに至ったが、現在の視点からは、85年の通信事業自由化の結果、民営事業者が誕生し通信産業を巡る競争が開始されたこと、95年のPHS登場が伸び悩んでいた携帯電話の開発競争を刺激、その普及を推進し今や携帯電話が私達の生活に不可欠なものとなったことを記憶しておけば良いだろう。

以上が交通と通信の分離の歴史的概略である。その思想的次元での意義は、情報があたかも物理的制約を超越したものであるかのような高速度を獲得したことである。その結果、電信・電話等の「距離の超越」をもたらす通信技術を用いた情報入手が政治的・経済的戦略行動において決定的に重要になった。例えば日露戦争の際、バルチック艦隊

の対馬海峡北上の第一報が即座に伝達されたことが日本海海戦の勝利につながったと指摘されているし、1912年のタイタニック号事故では、無線連絡の失敗が事故を防止できず、救助の遅れをもたらしたと言われている。これは逆から見ると、従来、物理的距離が与える有利さに依拠しつつ情報を独占し政治的・経済的力を保有していた行為者が、その特権を喪失するに至ったことを意味する。マクルーハンによると、かつて周縁の地方新聞は中央の大新聞に依存せねばならなかったが、電信の発明がこれを破ったという。電信の発明により、中央で形成される「最も進んだ考え」が郵便・鉄道を介し周縁へと伝播していくという「情報による中央一周縁体制」が崩壊したと言うのである。

交通と通信の分離について、「人間の結合と分離」の視点からは何を理解すべきか。マクルーハンは「電気メディアは空間的次元を拡大するというより、寧ろ無効にしてしまう。電気によって、我々は至る所で、ごく小さな村にでもいるような人と人との一対一の関係を取り戻す。」⁴と言っている。一つ目の文章は前段落で述べた事態を示唆するものである。二つ目の文章に関連して、特に電話という通信技術に着目して次の二点を指摘しておく。

第一点、電話による対話は直接対面状況での対話とは完全に異質な経験である。一方で電話は(盗聴の可能性を措けば)対話者二人だけのコミュニケーション空間を開く特性から、親密さを醸成する傾向にある。姿形や身振りが介在しない音声のみによるコミュニケーションであるゆえ、私達は相手と直接つながっているかのような錯覚にも陥る。しかし逆に視覚的要素の不在は、電話が匿名性と結びつく傾向にあることをも意味する。この匿名性とは、通話者の属性に関する匿名性でもあれば、相手の状況が自分からは不可視だという意味での匿名性でもある。つまり、電話は親密さと匿名性(=よそよそしさ)という正反対のベクトルを兼備する奇妙なメディアであり、パーソナル・コミュニケーションの一つではあるが、対面的コ

コミュニケーションとは異質なコミュニケーションを可能としている。

第二点、電話が可能とする親密さと匿名性の混在した経験は、物理的・政治的・経済的・心理的、それぞれの意味での「人間の結合と分離」の度合いの同調性の破綻を象徴する。想像するに、第一節で扱った交通・通信環境の零地点に生きる人間は、無論一つの集団内部の他のメンバーに対して、それぞれ異なった程度で物理的・政治的・経済的・心理的距離を持っていただろう。しかし他集団の存在を視野に入れると、それら全ての距離がどれも相対的には「近い」人々と集団を形成していたとも表現できるのではないだろうか。交通・通信環境の重層的発展に応じ徐々にこの状況が崩壊し、物理的・政治的・経済的・心理的距離が比例的に変動するという人間集団に対するイメージが強いリアリティを持たない、現在の複雑に入り組んだ社会に至ったという見方は、大雑把ではあるが的外れだとは言えないだろう。この視点から見ると、政治的・経済的・物理的な意味で極めて「遠く」にいるはずの人間とでも、心理的にのみ極めて「近い」関係を構築することを可能にする電話は、様々な意味での距離の不一致を特徴とする現代社会を象徴するメディアであると言えよう。

見方を変えれば、電話というメディアの存在は物理的空間に基盤を持つ社会組織の質を変容しつつある。特に現在、携帯電話が家庭という組織に及ぼしつつある影響は解りやすい。家庭に固定電話しか無かった時代は、家族構成員はその電話を通じて家族外の人間と連絡を取るしかなかったが、携帯電話の普及に伴い、家庭の内にながらにして家族の誰にも知られることなく外部の人間との連絡が可能となった。そもそも固定電話自体が、家庭という親密な空間によそよそしさを持ち込むものではあったが、携帯電話は更にその度合いを増したと言えよう。逆に携帯電話は「どこにいても人からの連絡を逃さない」という意味で、家庭に居る安心感を街中へ延長することを可能とした側面

を持ち、また、電波圏内であればトラブルの際に他人に助力を要請できるという新たな安心感をもたらしもした。これまでの、住居という物理空間の内側＝家庭は親密・安心な場所、それに対し住居の外側＝世間は疎遠・危険な場所、という漠然としたイメージは崩れつつある。距離の超越をもたらすメディアは、家庭以外にも企業や交友関係など、様々な次元での「人間の結合と分離」のあり方に変容を迫っているだろう。

2.4 マス・コミュニケーションの発展

世界初のラジオ放送局が誕生したのはアメリカ合衆国ピッツバーグ、1920年11月2日のことだった。500人から1000人ほどのリスナーはその日の大統領選挙の開票速報を耳にしたという。この後合衆国では21年から23年にかけて、ラジオ産業の成長率は当時の花形産業だった自動車産業を上回った。日本でも22年には放送施設の設置許可を求める請願が通信省に提出され、24年から25年にかけて、東京・名古屋・大阪に非営利民間組織として放送局が成立した。しかしその直後26年、これら三局の統合で社団法人日本放送協会が設立され、通信省の介入と支配が強まっていく。ラジオ放送開始時の聴取契約者数は約34万だったが、政府政策の後押しもあり十五年戦争の間に急増した。他方、戦後ラジオに代わり広範な大衆の支持を得ることになるテレビは、36年イギリスBBCが最初の正式放送を開始した。日本でも30年代後半、40年に予定されていた東京オリンピック(結局は未開催)を念頭にテレビ開発に力が注がれたが戦争の激化で一旦この動きは弱まった。終戦後、53年1月16日、NHKが初の本放送を行い、同年日本テレビも放送を開始した。放送開始直後はテレビ受像機の価格も高く家庭への普及は困難だったが、価格の低下、街頭テレビによる新しいメディアへの馴染みの深まり、59年の皇太子ご成婚パレードや64年の東京オリンピック等の報道を端緒として、テレビは日本中のあらゆる家

庭に入り込んでいった。63年には最初の日米衛星中継がケネディ暗殺を伝え、69年のアポロ11号月面着陸は世界で7億人以上の人間が同時に視聴したという。次いで、70年以降日本の全テレビ放送はカラー化され、84年には直接受信衛星放送が、2000年には高画質・高音質に加えデータ送受信が可能なBSデジタル放送がスタートした。

以上がラジオとテレビに関する歴史的経緯の概略である。とりわけ政治的意味での「人間の結合と分離」の視点から、その意義として以下が指摘できる。

まず、ラジオとテレビは政治的結合を形成する為の極めて有効な手段となりうる点に注意すべきである。先に新聞が近代国家に対応するマス・コミュニケーション形式であることと、それが社主や時の権力により操作される可能性について述べた。しかし新聞は情報伝達において時間的遅延を持たざるをえないし、近代国家が唯一の新聞の独占的発行を行うわけではない。これに対しラジオは第二次大戦中ナチスや日本軍部に利用されることで新聞のネガティブな可能性を完全に実現し、それ自体が近代国家を支える骨組みとして作動した。中央から地方に至るまで、電波により担保される国土空間へと均質かつ瞬間的に情報を伝播できるラジオというメディアが、権力にとり極めて有効な大衆操作の道具だったことは明らかである。新聞が多量の情報を紙上に羅列することで読者の主体的読解行為を許すのに対し、ラジオはスピーカーから流れてくる一つの声へと聴取者を引き込み、語る者との想像的同一化を喚起し、具体的判断や行為へと導いてしまう。ここで、テレビはラジオの特性を単に映像付きで発展させたものとみなすことはできない。マクルーハンは「ヒトラー統治下にテレビが大規模に普及していたら、彼はたちまち姿を消していただろう」と言う。理解すべきは、テレビは一方でラジオ同様に私達を惹き付けるが、他方同時に私達はそれへと完全に没入できず画面上の事柄から心理的距離を取ること

である。ヒステリックに獅子咆哮するヒトラーの映像が毎日家まで送られてくることを思ってみれば良い。ラジオはそれが流す音や声に対しての求心的運動を喚起するのみだが、テレビはそれが流す映像に対し求心的かつ遠心的な運動を喚起する。よって、テレビ時代に大衆の人気を得る政治指導者は、テレビ俳優のような素質を持っていないといけない。J・F・ケネディがその代表例だったとはよく指摘されるところである。この点は、遂にメディアの形式の方が、逆に政治権力の在り様そのものにまで影響を及ぼすに至ったことを示す事例として極めて興味深い。

次に、取り立てて意図的政治主体を想定せずとも、テレビの経験自体が擬似的記憶の共有という形で心理的結合を作り出し、結果、政治的效果を持つ点を理解すべきである。

私達は具体的には職場や学校等でそれぞれの社会生活を営んでいるわけだが、それらがあくまで「私が生きる断片的社会」であるのに対し、「社会そのもの」の統合的イメージをもたらすものとしてテレビ空間が存在すると言えるのではないだろうか。漠然とした「皆も見ている」という想像に支えられ、テレビは想像的な日本社会の纏まり、擬似的一体感を作り出しており、実際テレビ発の流行等の存在はテレビ空間から現実的社会空間への働きかけを意味してもいよう。また、この映像上の共同体は半世紀の歴史を経て、「同じテレビ経験の共有＝同じ記憶の共有」という形で、同世代の個人間の結合を強める作用も持っている。とりわけ日本社会においては、限られた数の大手新聞社と民放キー局が明白な系列関係を持っており、それら巨大メディア資本の力で「戦後日本国民文化」が形成されてきたことは確かである。新世紀に入って以降10年来のインターネット普及等を見て今後テレビの影響力は相対的に低下するという知見もあり、若者のテレビ離れが語られもする。しかし平均テレビ視聴時間に大きな変化は見られないとの報告もあり、テレビがどのように変貌を果たし

ていくかは注視し続ける必要がある。

テレビ経験の共有により或る人々に心理的結合感がもたらされること、それ自体は政治的には無記だと言って良いようにも思える。しかしテレビ経験の政治的効果について考えるならば、テレビには必ず「見えるものと見えないもの」の二つが付き纏う点、及びテレビが生み出す人間の結合はあくまで「視聴者の受動的結合」であり、「行動者の実践的結合」ではない点に着目すべきだろう。前者については、テレビが特定の話題を選び放映する背後に、放映されないが実は視聴者にとり重要な事実が隠されているかもしれない可能性や、多くの娯楽番組の存在が本当はより見るべき価値のある事象を隠蔽しているかもしれない可能性に思いを致せば良い。「見せることによって、隠す」という振る舞いをテレビは為しうる。また後者については、私達は環境問題の深刻さや世界の飢餓の状況、中東やアフリカで展開される戦争等に関する多くの情報や知識をテレビから獲得するが、それが必ずしも自分自身の何らかの実践へとつながるわけではない点を反省してみれば理解できることだろう。テレビは視聴者達に擬似的結合感を与えるが、彼(彼女)らが政治的に真に結合し連帯すべきはずの人間達との間にある分離を必ずしも埋めるものではない。これは先に指摘したテレビの持つ求心的・遠心的な二つのベクトルにより生み出される効果だと言えよう。

3. 反復される二つの価値対立

さて第一節で交通・通信の零地点を瞥見した後、第二節でそこから現在私達が生きる社会までの概略的見取り図を描いた。零地点で通信手段として話し言葉のみを、交通手段として自分の身体と自然発生的道路のみを持っていた人間は、今や、文字・印刷物・新聞・鉄道・自動車・飛行機・電信・電話・ラジオ・テレビ等様々な交通・通信手段を持ち、それを環境として生きる者である。第二節の議論で、交通・通信手段が様々に「人間の連結

と分離」に影響を及ぼしてきたことが了解されただろう。次に、デジタル情報通信技術を視野に入れ、私達が今後生きることになる交通・通信環境を検討せねばならないが、その前に交通・通信技術の歴史において通時的に成立してきた、繰り返される人間同士の価値対立の在り様の内実を二つ、簡単に把握しておきたい。

一つ目の価値対立として、特定技術の普及に伴う経済的利害の対立がある。交通・通信技術は何者かの発明により世界にもたらされ普及されるが、問題はこの普及の場面にある。一方には文字や車輪など、あまりに古い過去の事柄であるゆえ、その普及過程が鮮明にならないものもある。しかし殊に現代に近い発明に関してはそれからもたらされる利益が大きいゆえ、普及に際し何者かの意図が介在することが多い。意図的普及推進主体としては国家が筆頭に挙げられる。事例としては、鉄道や電信が近代国家自身の立ち上げと同期して敷設されたこと、戦後日本が国家産業として自動車産業を後押ししたこと、合衆国が 90 年代 IT 産業を国家基幹産業として推進したこと等であろう。また意図的普及主体として企業も存在し、第二次大戦後合衆国の自動車会社 GM はロサンゼルスやニューヨーク等全米 45 都市の市電を買収した上で廃止し、石油使用のバスを導入して利益をあげた。これら国家や企業による特定技術の普及推進に対しては、明らかに経済的不利益を蒙る主体からの批判や反対行動が出現するという動きがある。例えば、1861 年にイギリスで、馬車業者と鉄道業者が蒸気自動車の使用を禁ずる法律を通した。

もう一つの価値対立として、特定技術の特性そのものを巡る価値対立がある。遙か昔、文字が人間の記憶力を減退させるとして批判されたのを筆頭に、ヨーロッパでは自転車が女性を解放的にしすぎる、或いは自転車のような高速度で走ると「自転車顔」になってしまう等の批判を受けた。また、評論家大宅壮一がテレビは「一億総白痴化」を招くと断じたのはテレビ時代の幕開けの 1957 年で

あったし、携帯電話など新たな通信メディアへの批判的言辞は私達の耳にも新しいものだろう。一般に特定技術そのものに対する批判は、それが何らかの形で人間という存在者の質や人間社会に問題を引き起こすとみなす点に根拠を持つ。特定技術の批判者は、自らの経済的利益の擁護の為ではなく、より中立的な立場に立っているとの装いの下、批判を行なう。しかし、現実には批判者が特定技術に対していかなる利害関係を持っているかは、各ケースに応じて注意深く吟味される必要があるだろう。

以上の二つが、交通・通信技術の歴史において反復的に生じてきた価値対立の代表的な形であると言えよう。これらについて次のように理解し、次節に繋げることとする。

特定の交通・通信技術はそれ特有の快樂をもたらすと一般的に言うことができる。また、一旦特定の技術に馴染んでしまえば、その相対化は困難である。よって様々な技術に対する批判者達を一括りに懐古主義者と切り捨てるわけにはいかず、特定技術の導入に対する慎重な姿勢を学ぶべきである。しかし、やはり私達が自転車にもテレビにも携帯電話にも慣れてしまいそこから多大な恩恵を受けている現実はある。無論、各個人が特定の交通・通信技術と自発的に関係を持たないことは可能だが、技術の社会的普及は、否応無しにその社会で生きる人間全てに対し直接・間接に影響を及ぼしてしまう。文字・自転車・テレビ・携帯電話に対する批判の言説は、それらの普及を止める力にはならず、否応無しに私達は新しい交通・通信技術の普及を生きてきたという歴史的現実がある。この事実を見据えた時、現代を生きる私達にとって重要な問題は、現時点での新しい交通・通信技術の導入の意義をいかに理解すべきか、ということになる。

以上で交通・通信技術を巡る価値対立の簡単な把握を終え、次節では二つの問題を検討する。それは「新たなデジタル情報通信技術の社会への浸

透をどう理解するか、何が問題か」、及び「現在の交通・通信環境の変化は自然環境問題といかに関わるか」の二つである。

4. 現在進行中の交通・通信環境の変化と私達の生活

現在私達の生活に深く浸透しつつあるコンピュータの誕生は 1946 年、以来コンピュータは記憶容量の爆発的増大やインターフェースの改良等、様々な技術革新を経てきたが、入力装置で人間の命令を受け、演算処理装置で数値・論理計算を行い、結果を人間に報告する過程を高速で行う基本的性格に変化はない。現在当然視されているコンピュータの通信機能の開発開始は 1965 年、それ以来、合衆国国防総省が軍事目的用に開発していた高度のコンピュータ・ネットワークを端緒としつつ現在のインターネットに至る通信網が発展してきた。日本ではパソコンの一般への普及が 1995 年以降進み、今や職場や家庭での生活必需品となったと言っても過言ではあるまい。情報通信産業はかつての自動車産業同様に、経済の牽引役となるべく期待もされている。日本の得意分野である情報家電やモバイル端末技術を活かした「いつでも、どこでも、誰でも利用可能なネットワーク(ユビキタス・ネットワーク)」社会の実現と、そのモデルの世界発信が政策に掲げられてもおり、情報通信産業の市場規模は全産業中最大に達している。

以上を踏まえ、デジタル情報通信技術の独自性として次の二点を確認しておこう。

まず、インターネットはパーソナルとマスという両方のコミュニケーション特性を兼備する。典型的に言えば、電子メールは前者、従来マスメディア情報の一方的受信者だった一般市民によるホームページやブログ形式での情報発信が後者に対応する。電子メールは電話と同様、直接対面的コミュニケーションとは異質な経験を可能とした。つまり、電子メールは郵便に比べ圧倒的な高速通信性、電話と比べコミュニケーションの時間的・非

同期性を特徴としている。ホームページやブログ形式での強力な情報発信手段の獲得は、従来自己表現の場を持たなかった人々にそれを与えた点、一個人と企業や政府との力関係の変化をもたらした点が評価されるだろう。（「2ちゃんねる」等の掲示板サイトの位置づけは難しいところだが、匿名性という特性が一方で社会的制約を越えた純粋な社交可能性を開くと同時に、他方でそれを悪用した他人への誹謗中傷等をも生み出している点は、つとに指摘されている。）

次に、インターネットは発信可能な情報が文字・画像・音楽・映像と、マルチである点が特徴である。ネット上での表現一般について以下が指摘できる。電話が19世紀に開発された当初、その有効な使用法として音楽配信が構想されていた事実を想起すると、ネット上での表現様式が現存するものに限定されると考えるべきではない。確かに既存の有料コンテンツ事業者がインターネットをベースとしてコンテンツ配信を行うという図式が展開されている。しかしそれによりネット利用者の視聴者化・消費者化が進むだけであるならば、インターネット固有の可能性の展開とは言えないだろう。フェイスブックやツイッターといったコミュニケーションメディアの内実と可能性を含め、メディアを使う人間の社会的想像力が何を生み出しうるか、注視し続ける必要があるだろう。

さて、「人間の結合と分離」の視点から、デジタル情報通信技術に関して理解しておくべき点は何だろうか。経済的視点と政治的視点からそれぞれ次の事柄を理解しておきたい。

まず、経済的な「人間の結合と分離」について。現在、情報通信産業の市場規模が全産業中最大である点は先に述べた。しかし当然、情報通信産業の発展が日本社会に住む万人に対し同程度の利益をもたらすわけではない。「万人を結合させる」と謳われるインターネットではあるが、情報通信産業の隆盛が、社会学者等によって2000年代以降度々指摘されてきた、「人間の分離」と表現できる

だろう日本社会の階層分化傾向にいかに関係するかが問題となる。年齢・性別・所得・居住地別に存在するデジタル・ディバイドを問題化する理由は様々でありうるが、この視点からは、デジタル情報通信技術を巡る能力が就労機会の格差、ひいては所得格差につながるか否かという問題がとりわけ注目される。

次に、政治的な「人間の結合と分離」について。注目すべきは、新たな情報通信技術が国境を越えた人々の結合を喚起している点である。1997年のノーベル平和賞を受賞した、多数のNGOから構成されるICBL(地雷廃絶国際キャンペーン)はインターネットを駆使して活動していたし、イギリスからの独立を謳うIRAに対してはイギリスや合衆国のアイルランド系市民がインターネットを通じイデオロギー的支援を与えている。前者は肯定的意味合いを含め「サイバー・アクティヴィズム」、後者は否定的意味合いを含め「遠隔地ナショナリズム」と称されるが、価値判断を抜きにすれば、両者ともこれまで関係を持ちにくかった人間同士がネット空間上では結合できる事実とその成立根拠を持つことは動かない。更に本稿では取り扱う余裕が無いが、ツイッターによるコミュニケーションが世界の政治地図を大きく塗り替えつつある事実の意味についても、稿を改めて考察する必要があるだろう。

さて、今取り上げた二つの現象を、メディアと経済的不平等の問題・メディアの政治的利用の問題と一般化すれば、それらはインターネットの特性そのものに由来して出現したわけではない。インターネットの謳い文句を、「いつでも・どこでも・誰とでも関係を結ぶ可能性」、及び「世界中の情報の大量収集可能性・個人による情報の大量発信可能性」の二つに纏めてみると、これらに対応して出現する新たな事態や問題として以下が挙げられる。

まず、「いつでも・どこでも・誰とでも関係を結ぶ可能性」について。この可能性はそもそも実現し

尽くされておらず、表現の意味も曖昧である。携帯電話が「いつでも・どこでも」に関する可能性を拓いたとすれば、インターネットの独自性を謳うこの表現の最重要部分が「誰とでも」であるのは明らかである。事実「いつでも・どこでも人と関係を結ぶ」可能性は、特に携帯電話からのインターネット利用普及率が世界第一位の日本社会においては何重にも保証されており、今後は「いつでも・どこでも必要な情報を入手する」可能性の実現の為に、ウェアラブル・コンピュータの実用化やユビキタス環境の整備が目指されている段階にある。これに対し携帯電話では「誰とでも」関係を結ぶことは容易ではなく、故にそれがインターネットの重要特性にもなる。しかし、ネット上の使用言語の70%が英語だと言われる点、及び世界全体を見た場合のインターネット普及が極めて地域限定的である点を再強調する必要がある。最初から極めて大きな限定付きの「誰とでも」であるのは明らかである。更に、先述した遠隔地ナショナリズムやニュースでも伝えられたネット自殺のように、ネット共同体が社会通念上否定的に評価される行為を誘発する現象がある。この背景には、しばしば指摘されるようにネット共同体が細分化された話題に興味を持つ人間同士によりタコソボ的に成立している事態がある。タコソボ化は、それ自体としては価値的に無記だが、新聞・ラジオ・テレビ等のマスメディアが各人の興味の無い情報への接触を否応無しに要請することで各人のローカルな興味関心への閉じこもりを許さず、結果として各人の社会全体への包括的視点の保持を保証するのに対し、インターネット上の情報取得形式はそうではなく、よってその排他的全面化には問題が伴うと言うことはできよう。インターネットは「誰とでも」関係を結ぶ可能性を技術的には拓くが、私達はそもそも無差別的かつ自発的に「誰とでも」関係を結ぼうとするわけではない。

次に「世界中の情報の大量収集可能性・個人による情報の大量発信可能性」について。個人による情

報の大量発信可能性は、先述したインターネットのマス・コミュニケーション特性により可能となっている。情報発信形式としてはメール・マガジン(ML)やホームページ(HP)、ブログ、Youtube等があり、ネット上には膨大な個人発の情報が氾濫している。情報の質や実際に情報を発信している人口など検討の余地はあるが、少なくともその中から「インターネット独自の新たな表現」の模索・構築に成功する人間が生まれることへの期待は保持するべきだろう。情報収集に関しては、技術的には言語の壁や検索機能の不完全さが問題であり、翻訳ソフトやより使い勝手の良い検索システムの構築が研究されている。しかしそれとは別次元に、情報の信頼可能性の問題がある点は動かない。これは特定事象に関する情報源が膨大になるに比例して、逆に情報の正当性が確保されにくくなるという事実由来し、単なる技術的解決を許すものではない。また、本当に重要な政治的・経済的情報の授受に関しては、寧ろインターネットの方が安全性の面で不安があり、結局対面的コミュニケーションや封書、電話という手段に立ち戻ることになるという事態もあるだろう。更に経済的視点から見ると、これまで情報生産者(作曲家・小説家等)と消費者とを媒介することで利益を得ていたコンテンツ仲介業者(レコード会社・出版社)は、直接的な情報授受を可能とする技術の誕生により、少なくとも従来通りの姿勢を維持することはできない。また、そもそもネットの普及を受けて、近代的所有権という概念そのものの再考が必要ともなっている。

さて、本節の最後に、インターネットやユビキタス環境への問題提起や価値判断に関連して、次の二点を述べておきたい。

第一点、現在のデジタル情報通信技術に対する批判的見解は、それが「身体の喪失」をもたらすと主張する。例えばフランスの「速度の思想家」ヴィリリオは「瞬時双方向活動という超一乗り物技術によって、私達は遂に自分自身からも追放さ

れ、生理的な最終参照基軸を失うことになる。即ち、運動する肉体のずっしりとした重さという指標、或いは中心基軸、より正確に言えば、運動機能とアイデンティティの中枢さえも失うことになったのだ⁵と述べ、合衆国の哲学者ドレイファスはより具体的に、身体の喪失が「物事の関連性を認識する能力」・「技能の修得」・「人々と事物に対するリアリティの感覚」・「真剣なコミットメントとリスクを伴う、意味のある生活」の喪失をもたらすと言う⁶。詳細の検討の余裕は無いが、彼らの主張は部分的には理解できる。しかし、インターネット或いはサイバー空間での生活が全面化するという仮定自体に問題があるのではないだろうか。現に、逆にドイツのメディア論者ボルツは、社会にデジタル情報通信技術が浸透するほど、ダイエットやスポーツ、化粧等の意義が増大し、私達は「身体の発見」に到達するだろうと言う⁷。筆者としては以下を指摘しておきたい。それは、(ボルツも含め)これらの論者が言う身体は聊か抽象的で、一人の人間は20～30年間に体重の100倍以上もの食物を消費するという事実の内に現れているような「身体」ではないという点、寧ろ情報化と身体の問題に関しては、情報化がいかに進展しても「交通＝物資の移動」を要請し続けるこの意味での身体を見落としてはならないと指摘しておくべきではないかという点である。

もう一点、ユビキタス環境化に関して個人情報や自由という視点から問題提起が為されている。ユビキタス環境においては家電や商品等あらゆる事物に通信機能が搭載され、人はいつでも必要な情報を獲得できるとされる。人々の期待はそれを利用した安全性確保のサービスにあるようだが、企業は商品購入への巧妙な誘導装置としての使用法を想像していると見られる。都市の特定位置にある人間に対し、以前の商品購入に関する個人情報の分析から最適の商品を選択し通信で推薦する等の手法である。この未来予想に関し、個人が選択の自由の有無すら意識しないほどに企業の

経営戦略に巻き込まれてしまうという懸念が提出されているが、この点については今暫く展開を見守る必要があろう。ただ、都市空間への監視カメラ設置が進行しつつある現在、デジタル情報通信技術が張り巡らされた空間で生きる人間がいかなる意味で従来の自由を維持しうるか、或いはいかなる意味で自由の概念に変容がもたらされるか、この問いは今後常に念頭に置いておく必要がある。

おわりに

本章では、他人と関係を持たずに生きていけない存在者である限り、人間にとって自然環境と同程度に根源的な交通・通信環境を筆者なりの観点から検討した。その歴史的蓄積過程の回顧により、それが様々に「人間の結合と分離」の在り様を変え、私達の生をより複雑なものとしてきたこと、或いはそれが政治や経済の論理に様々に巻き込まれ、逆に政治や経済の在り様に影響を及ぼしてきたことが理解されたと思う。人間は一つの技術に馴染んでしまえばそれを相対化するのは困難であり、喪失した価値は事後的にしか見出されない、この点は繰り返し銘記すべき事実である。よって私達は、同時代的に進行中の変化を今後も注視し続け、その意義の理解に努める必要があるだろう。

【註】

¹ Energy and equity(Ivan Illich,1974)、『エネルギーと公正』(大久保直幹訳・晶文社・1979)、p35－36

² Cybermonde, la politique du pire: entretiens avec Philippe PETET(Paul Virilio, Editions TEXTUEL, 1996)、『電脳世界 明日への対話』(本間邦雄訳・産業図書・1998)、p7

³ 補足しておきたいのは、まさに近代以降交通が商品として販売され購入されるに至った事実、端的に言えば近代以降の「交通の形式」自体が、そもそも「平等な個人」なる観念の成立を促進した点、人間の政治的結合を強めた点である。これは、鉄道等の輸送機関が運賃格差以外は利用者の人格主体を平等に取り扱う、つまり利用者は乗客という不特定多数の一人として平等に待遇されるという事実から看取されるだろう。近代以降、「交通の

権利」を持つ個人が出現したが、まさにそのような権利主体としての平等な個人の誕生に寄与したのが、商品としての交通という近代的交通形式だったのである。

⁴ Understanding Media:The Extensions of Man (Marshall McLuhan, McGraw-Hill Book Company, 1964)、『メディア論 人間の拡張の諸相』(栗原裕・河本仲聖訳・みすず書房・1987)、p262

⁵ L' inertie Polaire(Paul Virilio, Christian Bourgois Éditeur, 1990)、『瞬間の君臨 リアルタイム世界の構造と人間社会の行方』(土屋進訳・新評論・2003)、p216

⁶ On the internet (Hubert L. Dreyfus, Routledge, 2001)、『インターネットについて: 哲学的考察』(石原孝二訳・産業図書・2002)、p9

⁷ Weltkommunikation(Norbert Bolz), 『世界コミュニケーション』(村上淳一訳・東京大学出版会・2002)、p243

【その他の参考文献】

- ・『現代交通論』(池田博行・松尾光芳・大坪嘉春編著、税務経理協会、1994)
- ・『メディアの技術史 洞窟画からインターネットへ』(齋藤嘉博著、東京電機大学出版局、1999)
- ・『コンヴィヴィアリティのための道具』(I・イリイチ著、日本エディタースクール出版部、1989)
- ・『デジタル・メディア社会』(水越伸著、岩波書店、1999)
- ・『高度情報化社会のガバナンス』(坂井利之・東倉洋一・林敏彦編著、NTT 出版、2003)

現場力と日本企業の競争力優位

神戸夙川学院大学観光文化学部教授 内藤 敏樹

【目次】(8. 5 p t)

1. はじめに
2. 日本企業の競争力低下
3. 経営における「現場」の扱い
4. 現場力とは何か
5. 現場力の低下
6. 現場力をこえて
7. 結論

1. はじめに

近時、日本企業の国際競争力低下が多く指摘されている。その原因の一つとして「現場力」の低下を上げる論がある¹。他方、日本企業における戦略の誤り（あるいは不在）が競争力喪失の原因であり、現場にその責めを負わせるのは正当でないとする反論がある²。本稿ではこの点に着目し、日本企業の現場力は本当に低下しているのか、現場力を向上させることが競争力を強化することになるのでしょうかといった諸点について検討する。

2. 日本企業の国際競争力

最初に、日本企業の国際競争力が低下しているのかどうかについて考えてみたい。実はこの国際競争力という用語は、わかったようでわからないものである。実はバブル崩壊以前から、日本企業の平均的利益率・投資収益率は米国企業に比して必ずしも優れたものではなかったという指摘がある³。競争力＝経営資源に対する経営効率という点からすると、別に今に始まったことではないということになる。

いうまでもなく国際市場における製品の競争力

は、一義的には価格競争力である。これはそれぞれの国の生産性、各国間の為替レートなどが複雑に関連して決まってくる。二番目は品質ということになるが、この点についてはどのような因子が企業間の「品質」競争力を決定する要因になるのか、まだ十分解明されているとは言えない。市場評価がメーターであるとするれば、後述する製品評価誌・サイトなどの評価と企業収益を結びつけることなどによってある種の解析がなし得るかも知れないが、いわゆるファッション・ブランド企業と電子機械などを同一に比較することが可能になるかどうかはわからない。この点は今後の課題である。

ところで上の論¹は、例えば日本企業製品のリコールが増えたり、国際市場でのシェアが低下したりということを国際競争力低下の具体的な現れとしている。おそらくその背後には、バブル崩壊後もいわば **best and brightest** 日本企業であったトヨタ自動車㈱が赤字に転落したことの心理的な影響も大きかっただろうと思われる。

ただ、現時点でこの点について実証的な分析を行うのは手に余るので、いずれ稿を改めて検討することとし、感覚的にうなずけるものがあるという程度で論を先へすすめたい。

3. 経営における「現場」の扱い

我が国社会で「現場」という用語は少し特殊なニュアンスを持って用いられることがある。現場は「site」の日本語訳ではないかと思われるが、英語の **site** が単に設計事務所に対し施工現場という場所的な意味であるのに対し、社会的には肉体労働という感覚が、経営的に（あるいはサラリーマン的に）はトップ・経営者でない、中間管理職を

含めた組織の一部を示すという概念規定は、大方の同意を得られるのではないかと思う。

日本的経営の特色として「ボトムアップ」もしくは「ミドルアップ」ということが言われたことがある。裏を返せばトップの戦略不在、リーダーシップ不在を意味しかねないこの言い方が、少なくとも国内ではそれなりの共感をもって受け止められていたということは、多くの日本企業でブランドデザインの欠如にもかかわらず国際的な競争優位がある程度確保できていたからだろうと思われる。そしてその優位は、後述する QC 活動などにより築き上げられた「品質」によるものだという事、企業人たちの自負だけではなくある程度国際的にも常識として通用していたといつてよかったのだろう。

安かろう悪かろうの代名詞でさえあった「メイド・イン・ジャパン」が、いつの間にか観光客が「日本製」のタグを確認して土産物を買うようになるまでになったについては、プロジェクト X をはじめとする数多くの資料があるが、本稿では細かくは触れないことにする。

4. 現場力とは何か

さてそれで「現場力」とは何かという点だが、先の論¹では「企業の現場における問題発見能力や問題解決能力」と定義している。逆に言うと現場以外（企画・一般管理部門とか経営者とか）の手・指示を借りずに当面の問題を解決してしまうことが現場力ということになるのであろう。

現場力という言葉は、早稲田大学ビジネススクールの遠藤教授が 2004 年の著書「現場力を鍛える」の中で使われたのが最も早い時期であろうと思われる。この本は早稲田大学ビジネススクールにおいて行われていた「現場学」の授業内容を基に作成されたものであるという。ただし若干ニュアンスは違うが、同じ文脈でとらえられるものとして「現場イズム」という言葉がある⁴。我が国企業の「知」の在り方から論を発する考察であり、

同書にある明治初期「お雇い外国人」の技術移転に端を発するのではないかという指摘は興味深い所である。

おそらく製造業の多くでの「現場力」は、生産性向上運動、QC、小集団活動などと呼ばれる一連の動きに端を発していると考えられる。従ってその中で進められてきたことは、品質改善と生産性向上の二つであったといつてよいだろう。その中で発掘され、解決されてきた「問題」とは、不良品の発生であり無駄の発生であった。そして後には「不良品」だけでなく「不具合・不都合」は販売現場で得られる「顧客の声」として「発見」され、企画設計部門を含めた形で「カイゼン」が進められてきたというのが日本製品無窮神話の根底にあるものだったと考えられる。

5. 現場力の低下

現場力の低下は、国際競争力以上に定義が難しい。これまでの考察では例えば自動車の「リコール」多発などがその現れとして挙げられている。それこそ「現場」の感覚的な見方としては、以下のような点が挙げられるのではないだろうか。

① 技能水準の低下

製造加工の場で、従事者の主に身体的な能力によって製造物の品質や生産効率に差が出てくるとするもの。「以前の工員に比べて今の工員は視力も根気も低下している」などとするのが代表的な例だろう。ただし加工技術・機器が急速に進歩しており、現実には新しい機器を使いこなせないことの方が問題だろうし、その指摘の少なからぬ部分が「今どきの若いものは」的なメンタリティーから発しているのではないと思われる。

② TQC、小集団活動の低迷

小集団活動は、無報酬で就業時間外に行われることが多かった。従業員は自分の将来キャリアプランに不安がなければ、それを自分に対する一種の投資として受け入れること

が出来た。しかし近年のように雇用が流動化するようになり、あまつさえ派遣労働者にはマニュアルワークしかさせないということになると、従業員がかつてのような形で「カイゼン」にコミットすることを期待することは難しくなる。このあたりの事情が現場力低下の原因として指摘されてもいる。

③ 伝統的な「OJT」の機能低下

OJT がそれこそ明治時代のお雇い外人の技術伝播活動から始まったという指摘もあるが、現場の業務能力育成・伝承の手段としてこれまで伝統的に用いられてきた「OJT」という手法、悪く言えば「とにかくやってみろ」「体で覚えろ」という指導法がかなり以前から有効に働かなくなっている感がある。体験の重要性は「暗黙知」論でも指摘されているし、そのことは現在でも変わっていないと思うが、やはり「イッテキカセテヤッテミセテ」でなければ効率的な伝承は受け取る方によほどのインセンティブがないと困難になっているのだろう。ベスト・キッドのトレーニング手法はやはりお話の中だけだと思う。

もう一つ考えられる要因として、メカトロニクスの進展による「ブラックボックス化」があるだろう。従前のギヤ、カムといった機械部品によるメカニズムはセンサ、IC、アクチュエータといった電気・電子部品に置き換わるようになり、電子回路もデジタル化し、さらにハードワイヤードロジックからソフトウェアに移行すると、生産現場（あるいは販売・サービスの現場）では製品の不具合を目で見ることで、つまり問題発見が極めて難しくなっている。

よく言われることだが、最近の自動車や家電製品の修理は専用アナライザがないとかなりのベテランでも歯が立たなくなった。勿論その前提として、それら耐久消費財の性能品質・耐久性は飛躍的に向上している。必要な進歩であったかどうか

は別として、ある種パラダイムが変わっていることは事実であろう。

さらに日本企業のありようを考える上で大きな要因になっているものがもう一つある。それは急速な国際化の進展である。生産現場が海外へ移転してしまうと、果たして「現場力」がいつまで日本企業優位の源泉であり続けられるかが疑問になってくる。かつて半導体メモリーは日本企業のお家芸であった。外国（米国）製品は歩留りが悪く、新製品の技術開発に先行することが出来ても量産化には時間がかかり、後発の日本製品に逆転されてしまうという事態が度々あった。原因は製造工程の無塵化徹底にあったそうだが、そのことがわからない当時は「半導体製造は農業である、出来るまで何が出来るかわからない」とまで言われていた。日本流の細かい工夫の積みかさねで「問題解決」がなされたそうだが、そこで解決策が示されてしまうとそれはマニュアル化し移転可能な技術になってしまう。今日の半導体はますます高額化する製造設備をいち早く導入するだけの決断・リスクテイクが経営陣に出来るかどうかで勝敗が決まるという面もあり、「現場力」の出番はあまりないように見える。

他方で、例えば米国市場でコンシューマーレポート誌の自動車特集で、かつては上位を独占していた日本ブランド車が次第に地位を下げ、代わってヒュンダイやキアが場合によってはベストバイになってきたことも、場合によっては現場力低下のあらわれとしてとらえられるかも知れない。しかし米国で（それを言うなら日本を除くほぼ世界中の市場で）販売されている「日本車」のうち、日本国内の工場で最終アSEMBリされている製品がどれだけあるというのだろうか。「現場力」は日本の現場にのみあるものなのか、それとも日本企業の関連するものならば例えば海外の現場にもあるものなのか。そしてそれは同じ地にある非日系企業にはないものなのか。

日本企業が海外で生産活動を行うようになったのは昭和30年代に遡る（戦前の国策的展開は除く）。各地の生産現場で品質の向上・維持に大変な努力をされてきたのは、これもプロジェクトXものであるが、その中で国内に定着している小集団活動を導入しようとした例が少なくなかった。しかしその多くは無給の時間外自主的活動としては成立せず、かといって給与を払って活動させたのでは価格競争力が失われる—というジレンマが各地であったとされている。また技術伝承（本来はテクノロジートランスファーであるべきなのだが、日本企業のそれはスキルトランスファーに過ぎないという批判をかつて東南アジアの研究者から受けたことがある）を制度化し、研修と資格認定の形にしたところが、その資格を受けたとたんに関社へ「ジョブ・ホッピング（転職）」されてしまったという苦い経験も少なくなかったという。

6. 現場力をこえて

現場、改善ということになるとトヨタ自動車のお家芸であり、製造業分野に限ったことのようなイメージを受けることがあるかも知れないが、現場という表現は他のサービス業でも日常的に用いられている。30年ほど前、電子部品の販売商社で「あの人は現場歴が」というような表現を聞いて、耳慣れない言い方だと思ったことを覚えている。要は商売敵、ライバルの代表者に対し、顧客と接するポジションにいた期間のことを言っていたのだが、その背後にはライバルを好敵手として認めるニュアンスがあったように思う。

現場と経営、地方・出先と中央、前線と司令部、その他さまざまな言い方があるだろうが、実際の活動（営利・ビジネス行為）を行う立場と、そこに対して指揮命令をする立場との間には利害対立があり得る。1914年、第一次大戦の西部戦線に向き合っていた英独軍兵士が、自然発生的に（つまり司令部の意向に反して）クリスマス休戦・交歓会を行ったことは、ゲーム理論の教材になってい

るほどである。

司令部と前線の情報連絡が適切でないと、「現場の独走（暴走）」という事態が生まれる。もともと戦時には情報連絡がうまくいかないことの方が通常であり、前線はいちいち司令部の判断を待つ余裕がないので自己責任で動く（つまり独走する）ことがかつての軍隊（特に陸軍）の常識であったという。この点は大災害が発生したときの行政組織とよく似ている。

暴走であるかどうかは結果で判断せざるを得ない。意思決定に民主的な手続きがとられていたか平時の基準で判断するのはあまり意味がないだろう。東日本大震災をはじめとする大規模災害時、被災地の事業所・行政機関等は上部機関の指示を受ける手立てが全くなくなってしまい、上部機関としても被災地の状況を知る手段が極めて限られることが多かった。災害対策マニュアルはそれなりに用意されていたかも知れないが、圧倒的な現実の前にはほとんど役に立たない。最後に残ったのは末端の、すなわち現場の人たちが自ら判断し、自ら動かなければならなくなった。このような状況下で適切に機能することが出来たことを「現場力」とし、さらにここから展開して、「現場力」は結局人材であるとする見方がある。中越大震災の時に、「（行政の職員が）使える奴かそうでないかはこういう時に分る」と、記憶では長岡市の幹部の方だったと思うがおっしゃっていたのも、おそらく同じコンテキストだろう。

従って職員・従業員は「考える力を持て」という風に論が展開していくのだが、社員・部下に丸投げするのではなく、何らかの基準が示されるべきだろう。社訓・社是、あるいは経営理念とは本来そうあるべきものなのだろうが、感覚的には外資企業の方に一日の長がありそうな気がする。正確には外資ではないが、TDLが今回の震災時に適切な措置をとれたのは第一に明確な指針（SCSE）、第二に繰り返し行われた実地訓練だったというのは示唆するところが大きいと思う。

7. 結論

日本企業における現場力は低下しているのか。現場力を「現場単独での問題発見・解決能力」と捉えれば、定量的に示すことは出来ないがその低下は否定できない所だろう。ある意味堂々巡りなのかもしれないが、日本企業の国際的競争力低下と表裏の関係にあるというのは正しいと言える。

他方で、現場力ということが製造・サービスの現場におけるスキルを意味するとすれば、それはおそらく違うだろうという意識を持っている。現場の技術革新は極めて早く、10年前の技能が全く役に立たないことも少なくない。10年前に皆が持ち合わせていた技能を今の従業員が持っていないからといって、それは批判できないだろう。

ある意味現場力は諸刃の剣である。現場力があることが競争優位の源泉になる場合と、必ずしもならない場合がある。現場力で対応できなくなった時は経営陣のグランドデザイン力がなにより必要になるのだが、現場力に頼っているとそうした戦略構築力が低下するのではないかとも思われる。

第二は、人材力としての現場力である。自律的に動くことが出来る人材はないよりはあった方が望ましい。ただしそのような「考える力」は、やはり系統的に訓練していくことが必要なのだろう。神戸市が震災で得た教訓を組織として伝承していくために、各地へボランティアを派遣しているのは効果的な取り組みの一つと言えるだろう。

第三に、トヨタの「カイゼン」運動は現場力そのものだと考えられているような節があるが、私見では顧客の反応（あるいはその他もろもろ）から得られる情報を歪みなく吸い上げ、上に伝えていく（見える化）ことにその本質があるように思われる。上述した企業全体としてのマネジメントループを回すためには、情報伝送回路に歪みや偏りがあっては困るわけで、いわば問題発見の基本的なツールなのではないかと近年思っている。

参考文献

- 1 遠藤功、加登豊、河野宏和、成生達彦 座談会「日本企業の現場は本当に大丈夫か」、ダイヤモンドオンライン 2010年12月27日～2011年1月24日
- 2 代表的なものとして三品和弘、「やさしい経済学」、日本経済新聞 2009年4月7日～21日
- 3 2001 鳥居昭夫、日本企業の経営効率、NTT出版
- 4 2004 遠藤功、現場力を鍛える、東洋経済新報社
- 5 1997 安室憲一・（財）関西生産性本部編、現場イズムの海外経営、白桃書房
- 6 2003 今井宏、トヨタの海外経営、同文館出版
- 7 日本生産性本部、「労働生産性の国際比較」各年版

ホテル産業の可能性

学生のキャリア指導に向けたホテル産業の基本理解について

神戸夙川学院大学観光文化学部教授 蒲池由雄・澤山明宏

【目次】

1. はじめに
2. 学生のホテルについてのイメージ
3. ホテル業界の一般的特性
4. ホテルへの調査
 - (1) 転職の可能性
 - (2) 学生に期待するもの
5. 総括—安定と学習機会

後記

- (1) 学生指導に向けて
- (2) グローバル化時代に

1. はじめに

観光立国が唱道される近年、海外からの客も視野に入れたホテル産業の人材ニーズが高まる一方、大学卒業後にホテルへの就職を検討する学生のホテル産業に関わる情報提供は十分であろうか。その理解が貧弱なものであるとすれば、観光産業の中心であるホテル産業にとって、マッチングした人材の確保が困難になると同時に、学生側もまた皮相な理解のままホテルに就職する、あるいは逆にホテルでの能力発揮の機会を逸していく事態が生じる。

本稿はこのような問題意識を背景に、改めてホテル産業の基本的構造と現状を明確にし、将来のホテルに求められる人材イメージを考察することによって、ホテル産業およびホテルへの就職を考える学生を中心とする若年層へのヒン

トを抽出することを目指すものである。¹

方法として、まず学生がホテル産業についてどのような理解をしているかアンケート調査を元に学生のイメージの偏向をまとめてみる。次に、経営学の基本概念を援用しながらホテル産業についての一般的かつ先験的な展望をまとめることしたい。その上で、ホテル産業に従事しておられる方々へのアンケートおよびインタビューを通じて、ホテル産業でのキャリアアップの実態を捉えていきたい。このような実態→推論→実態→推論のサイクルを通じてホテルのキャリアアップを現実的に理解したいと考えた。

ここではあえて大まかで基礎的なアプローチをとるつもりである。その目的は、本論文の対象をホテル業界関係者、ホテル産業およびホテル実務の研究者よりも、ホテルについてその内奥に接する機会に乏しい学生と、ホテルについて漠然とした理解のままこれを考察しようとする意味での初歩研究者、特にホテルへの就職を希望する学生へのキャリア指導に当たっておられる方を主な対象として想定しているからである。特にホテルの基本およびホテル事業の可能性を今一度虚心坦懐に基本に立ち返って確かめたいと願っている。すでに有名ホテルの動向のみをもってホテル業界地図を作る、あるいはホテル実務の詳細を扱うあまり研究者・実務家以外が興味の持ちにくい高度専門的な研究があるが、その合間を縫うことが論者の目指すことである。この試みがあまりに初歩的レベルに落ちたり、実情を無視したりすることがないように

¹本稿における「ホテル」は主にシティホテルを想定しているが旅館も含めて問題はないと考えている。

にするために、ホテルの従業員とのインタビューと、論者の一人(蒲池)のホテル総支配人経験をもって適宜修正することとした。

2. ホテルについての学生のイメージ

調査対象を神戸夙川学院大学・観光文化学部
の学生にアンケートへの回答を求めた。観光を
学ぶ者として、彼らはホテルについて相応の関
心あるいは理解を持っている学生であるが、対
象を1年生と3年生に絞り込んだ。1年生は入
学後約半年後であり、ホテルについての知識は
これからという状態にありホテルへの関心・知
識は観光学に無縁の学生と大きく変わらないと
推定した。一方、3年生はホテル関連の授業を
受講しているか、就職活動でホテルを就職対象
として評価しなければならない立場の両方がい
ずれかにあり、選別をかなり意識していると見
る。以下、結果と評価を記していく。

	3年生		1年生	
	希望者	非希望者	希望者	非希望者
レストラン	10	14	17	5
フロント	10	9	10	7
ドアマン	9	3	7	4
ベルボーイ	11	9	8	6
清掃	9	6	5	1
ルームサービス	3	3	2	2
宴会	3	2	5	1
クローク	2	1	5	0
営業	2	0	1	0
ブライダル	1	0	3	2
コンシェルジュ	5	2	7	3
警備	1	1	0	0
管理・総務	5	2	3	0
その他	0	4	1	0
語彙数計	71	56	74	31
(一人当たり)	4.7	3.3	6.7	3.9

(1) 就職先としてのホテル

まずホテルへの就職を希望するかしないかに
ついて「希望する」「どちらかと言えば希望する」
を「希望する」に、「希望しない」と「どちらか
と言えば希望しない」を「希望しない」として
集計した。

	希望する	希望しない	計
1年生	11	8	19
3年生	15	17	32
計	26	25	51

同じ学生に対し「思いつくホテルの仕事を自
由に記載する」ことを求めた結果は次のとおり
であった。

挙げられた職種がいずれも通常、ロビーなど
で見られやすい職種（フロント、ドアマン、ベ
ルボーイ、クロークなど）に偏る傾向は否めな
い。希望者の場合、アンケート回答者一人当た
りが挙げる職種数は非希望者より高いが、1年
生の希望者の方が6.7と3年生希望者のよりも
多くの職種を挙げたことは、1年生の段階では
漠然としながらも想像を広げようとしているの
に対し、3年生になると職種を限定している傾
向がうかがえる。ホテルについて知識が多く就
職先候補として捉えている3年生の方に職種の
イメージの幅が表面でしか見えないものに狭ま
っているとすれば、関心が浅いか、あるいは情
報が不足しているのではないだろうか。
このようなイメージに基づいて、就職の希望、
非希望を次のように理由付けている。(複数回答
を可能とした)

希望理由	3年生	1年生
国際性がある	8	5
職場がきれい	4	7
スタッフがきれい	4	5
収入がいい	0	1
仕事を楽しそう	10	7
その他	3	1

不希望理由	3年生	1年生
マナーがきびしい	6	3
忙しそう	4	3
収入が悪い	4	2
業界が不安定	0	2
試験が難しそう	3	1
その他	2	4

希望者においては、学年を問わず「仕事の楽しさ」「国際性」への期待が圧倒的に多く、非希望者では「マナーのきびしさ」が多い。

非希望者については、マナー（あるいはマナー教育）のきびしさを嫌うことからホテルの厳格なイメージを持っていることは理解できる。しかし、希望者においてもその積極的な評価はイメージに頼っている。国際性の概念も外国人客が多いことを想像してのことであろうが、ロビーに外国人が見られる頻度はいずれのホテルでも均一に高いわけではない。また仕事の楽しさというイメージもホテル業界や個々のホテルの事例を検討しての上ではないだろう。

観光学に関心がある学生がこの程度であるとすれば、他の学部の学生のホテルに対するイメージがこれを越えることはまずないと見ていいだろう。最近の就職難を背景に「ホテルでもいい」という安易な姿勢で臨む学生は、大学自体の定評がかなり高いレベルにあるか、ホテルの採用担当者が余程の潜在能力を評価しないかぎり採用されることはない。逆に、観光学部系の学生としても、上記の程度の浅いイメージでホ

テルを志望することは無謀に近い。

これをもって私たちは学生の浅薄な知識を批判するのではなく、相応のホテル業界への理解の機会を学生に提供するという課題を改めて認識すべきであると考え。また、ホテル側からも学生のホテル理解を向上させることが、良質の人材確保という人事の観点のみならず、ホテルの広報およびマーケティングの観点からも望ましいと言えるだろう。

では、ホテルとして、また学生への教育者としてどのようなホテル理解を学生に促すべきだろうか。

3. ホテル業界の一般的特性

ホテル業界の一般的な特性を整理してみたいが、すでに述べたように大まかなアプローチをとる。ここで要約される特性は次の三つである。

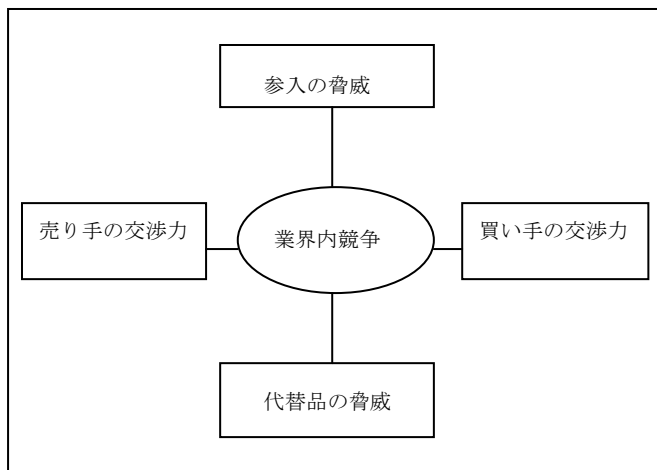
- (1) 一般的な特性
- (2) 職務の特性
- (3) マーケティング戦略上の特性

(1) 業界としての一般特性

すでに古典化したとも言えるマイケル・ポーターの業界分析の枠組みを利用する²。これによってホテル以外の業界との比較が本論を超えて読者にも容易に行えることになることを期待している。

ポーターは一般的な業界分析の観点を、①新規参入者の脅威、②代替品・サービスの脅威、③売り手（供給業者）の交渉力、④買い手の交渉力、⑤業者間の敵対関係、という五つの競争要因に集約させる。（次図参照）

² M・E・ポーター「競争の戦略」（土岐坤他訳）1995年ダイヤモンド社



このフレームワークをホテルに当てはめると次のようになる。

①新規参入者の脅威

業界への需要が成長過程にあったり、投資収益率が高かったりする場合、新規参入の脅威が続くが、ホテルの場合、参入者は膨大な固定資産（土地・建物など）を準備しなければならない。したがって参入者にとって、確立したブランドを抱えての参入か、既存ホテルの買収による参入が効率的になる。前者は 2000 年代前半の外資系ホテルの参入に見られたが、そのピークは終わった観がある。後者のケースは既存ホテルの経営体としての存続率を高める結果にもなっている。すなわち近年のわが国のホテル数は安定傾向にあり、強度の参入脅威はないと言えるだろう。

②代替品・サービスの脅威

例えばエコノミー・ホテル（ビジネスホテル、カプセルホテルなど）とシティホテルの間には顧客の目的別のセグメンテーションが明確になっており、基本的に代替関係にはなく、ラグジュアリーをもって競争が発生することもない。また、ホテルの基本サービスを宿泊、宴会、レストランと規定した場合、シティホテルがこの三つを抱えながら、独自の差別化を行うかぎり、

ホテル利用客が大体のものを見出す可能性は極めて低い。

③売り手（供給業者）の交渉力

ホテルは規模を生かした原材料やサービスの大規模調達を行うことによって、供給業者に対して一定の交渉力を発揮できるだろうが、その供給業者の供給する内容によって差異が生じることは言うまでもない。例えば、コンビニが食品メーカーに対して高級食品の大量発注による廉価高級品製造を促すようなケースはホテルについてはまだ見られない。売り手の交渉力の点では中立的である。

④買い手の交渉力

買い手をホテル利用客とだけすれば、客に選ばれかぎりホテルに大きな交渉力があるわけではない。しかし、ホテルのサービスを商品として陳列する仲介業者（例：旅行会社など）を買い手とすれば、ホテルの交渉力は近年格段に上がっている。すなわちインターネットによってホテルと最終利用客の間が直接繋がることによって仲介業者を省くことが容易になっている。これはかつて問屋を必要とした業界が中抜きで問屋を素通りした経緯と類似している。この典型が旅行会社であり、ホテルや交通機関が顧客と直接結び付くインターネット時代には、従来の仲介型旅行会社の経営は困難になっている。

本来、ホテルは利用客に対しては「ノー」が言いにくく「ノーがない」ことをセールスポイントとするホテルもある。買い手の交渉力はホテルにとってサービス開発のヒントにもなっている。

⑤業者間の敵対関係

ホテルは顧客のセグメンテーションを通じて安易な価格引き下げ競争に陥ることは稀と見てよい。各ホテルの差別化・集中のあり方による

が、出張目的、観光目的、イベント開催目的などの顧客のセグメンテーションとそれに適ったマーケティングを発揮する場合、ホテルは自らの地理的環境（どのような交通手段に近い、付近にどのような施設があるか、など）を中心に戦略を立てている。同クラスのホテルが近接して開設され、相互に差別化が困難な場合は別として過当競争が生じることはまずないだろう。

以上の考察から、ホテル業界一般の特性は、「安定的」という表現で総括できる。無論、内部での工夫や努力は容易なものではなく、その成果が収益にただちに反映される。そのような工夫努力を組み立て発揮できる場として業界が安定しているのである。また、全国のホテル数が 2005 年以降、微増傾向にあることもこの推論を支持していると考え³。

（２）職務の特性

ホテルの職種は門外漢であっても複数挙げられる。

【ホテル業務の職種の簡略化】

●宿泊部門

予約確保→ルーム準備（備品整備、清掃）→チェックイン→ルームサービス対応→防犯管理→クレーム対応→食事対応→チェックアウト

●レストラン部門

原料調達→顧客受け入れ→受注→調理→デリバリー→クレーム対応→チェック

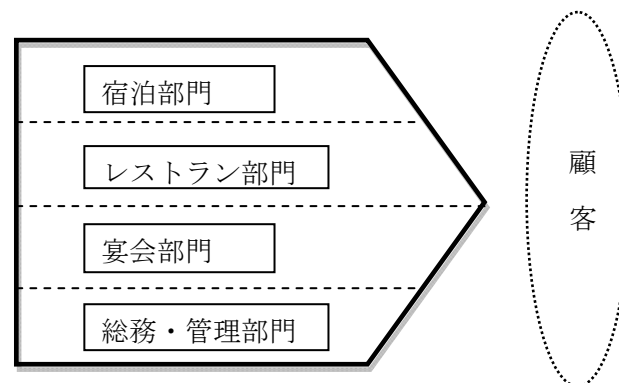
●宴会部門

予約確保→テーブルセッティング→食事準備

→サービス体制準備→サービス開始

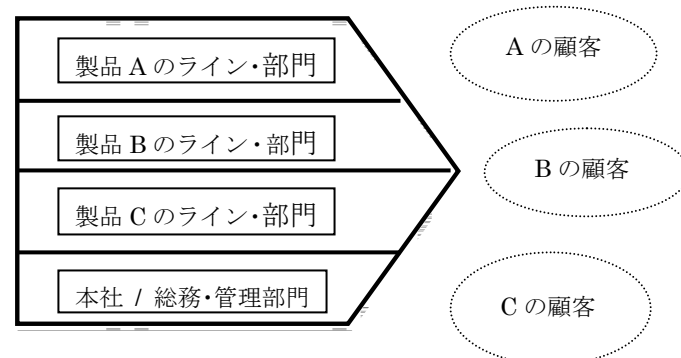
これらをバリューチェーンのイメージに置き換えてみよう。

■ホテルのバリューチェーン・イメージ



上記は非常に単純化したホテル内部部門の流れのイメージである。便宜上、ホテルを「サービスのメーカー」あるいは「サービスの総合商社」とイメージしてみよう。その場合、メーカーとしては多数の製品ラインを、また総合商社としては多数の商品部門の並列を想像できる。しかし、ホテルはメーカー、商社とはまったく異なるものである。

■メーカー・商社のイメージ



メーカーの場合、複数の製品ラインは複数種類の個別の顧客・マーケットを前提にする。そして部門（ライン）の製品が商品としてデリバリーされていくことで部門の行動は完了し成果が計上される。しかし、ホテルにおいては、部門間は個別に活動しても、顧客がいずれの部門

³ 全国のホテル営業件数の推移

2005年 2006年 2007年 2008年 2009年

8,990 9,180 9,442 9,603 9,688

(厚生労働省大臣官房統計情報部資料)

にも重なる頻度はかなり高い。また商社にたとえても、商社のように部門別独立採算制を基本として部門間、時にはチーム間の間仕切りを作ることにはホテルでは危険である。ホテルの場合、各部門は食事という共通項を持っているが、食事にかぎらず顧客のリピートを期待する以上、高度の連携と統合が必要になる。簡略図において各部門間の間をホテルの場合は破線、メーカー・商社の場合は実線としてこのことを示してみた。

連携と統合とは使い古された言葉であるが、ホテルにおいてその達成度は他業種に比べて存続を左右するほどに高いレベルを要求される。それゆえにホテルの従業員が単一部門のみを経験するというキャリアコースはあり得ないのである。

すなわちホテルは複数業務から構成される複数のバリューチェーン⁴を擁し、多様な付加価値を作り出しながらも最終的には統合的なサービスとして顧客に提供する。その統合的なサービスの質において成果を問われるのである。例えば「宿泊は問題があったがレストランは満足」というような評価をしてリピートする顧客はいない。このホテルは「いい」か「悪い」かのいずれかの判定しかなく、「悪い」と判定した客は二度と来ない。

既述（１）においては、ホテル業界の「安定性」を結論し、（２）においては、ホテルが複数多様なバリューチェーンを統合的な成果を創出する「統合的な企業体を目指さなければならない」ことを要約した。このことがホテルの経営戦略にどのような特性をもたらすかをまとめてみる。

①統合的経営

宿泊、レストラン、宴会という三大収益源を統合的に運営しなければならない。これらの前

後にも途中にもさらに総務・管理・マーケティングなど多数のプロセスが関連する。このようなホテルの複雑さにもかかわらず、ホテルはこれをもっとも達成しやすい組織である。なぜなら具体的な顧客が見えていることから、経営者と従業員の組織全体がマーケティング志向を持たなければならない、また持つことができるというマーケティング上の理想的な形態に近い組織である⁵。これはメーカーや総合商社・金融機関など一般サービス業に比較しても歴然としている。それだけに統合力を発揮できない人間がトップに立ったり個別部門のマネージャーに就いたりすることはホテルにとって致命的なことになる。

このことはホテルの専門家でなくとも容易に想像できる。既述のアンケートにホテル就職の希望理由を「仕事が面白そう」と回答した学生は必ずしも垣間見たホテル従業員の笑顔だけで判断したのではなく、多様な客に接する機会に興味を見出しているとも評価できる。すなわちホテルの従業員は個々の担当部局の内側にこもることは許されず、どこかで顧客との接点を持たなければならないのである。

②他分野との連携

複数のバリューチェーンをほぼ完結的に運営しなければならない事情から、ホテルは多数の業界や職業分野との連携を必要とする。これら外部に対して統合的な交渉力を発揮しなければならないという課題を意味するのであるが、他方で他分野への進出による業態の改善、開発も可能である。例えば、旅行会社の仲介に依存せず、自らが旅行の企画と運営を行い、バスなどの資産も抱えて運営しているホテルもすでにある。鉄道、航空会社との連携を発展させれば神

⁴ M・E・ポーター「競争優位の戦略」（土岐坤訳）1985年ダイヤモンド社

⁵ 「コトラー＆ケラーのマーケティング・マネジメント第12版」（恩蔵直人監修）2009年ピアソン・エデュケーションおよび恩蔵直人「マーケティング」2004年日本経済新聞社

戸のホテルが四国や九州までの簡易旅行を顧客のために手配することもできる。ホテルの対面業界が多いほどにホテルの業態開発の可能性は大きいと言える。

③多数職務経験者の養成

多様複数の職種があるゆえに、従業員はこれらを一通り経験することによってキャリアコースを歩んでいく。すなわちホテルにおいても人材の開発と教育が重視されるわけであるが、これが一般学生には特に重圧に感じられるかもしれない。人材へのケアに重点を置く業界であること、また多数職務の経験が②に述べた対面業界の多様性から、従業員もまた多様な人脈を築ける機会を持てる。すべての学生にこれに気づくこと期待できないかもしれないが、ホテル側から積極的にアピールしてよい点であろう。

④地域との連携

地域密着型の旅館と比較して、シティホテルは都市指向型の企業組織であるが、都市の自治体もまた地域特性を強調しながら都市の発展を望むのであれば、ホテルの貢献を無視できない。ホテルもまた地域特性を生かすことによって差別化戦略の強化を図ることを期待できる。例えば、神戸市のホテルは神戸への集客と同時に有馬温泉など兵庫県各地への顧客の観光を促すことも可能な位置にある。あるいは医療関連施設や医学関係の学会が頻繁に開かれる場である地域特性を活用して会議（宴会）にウエイトを置く戦略を現に採用しているホテルもある。

⑤リピーター確保に伴うリスク＝チャンス

ホテルは他産業と比較した場合の顧客の囲い込みは、部門ごとの垣根を越えたマーケティングとホテルマンの努力が直接成果に連動すると解釈したが、この事情の持つ意味は大きい。すなわち他産業の場合、一度商品・サービスの購入が発生し

た時点で客は必然的にリピーターとなる可能性がある。例えば、銀行では窓口へ口座を開いた客はその銀行の接客態度に不満があっても必要に迫られて再び顧客となって往訪するリピーターとなる。また、メーカーの場合、一次客は製品購入後に不具合が生じたら再度来訪かまたは往訪してそのメーカーとコンタクトを取らねばならない。しかし、ホテルにはこのような再来の担保はない。つまり一次的顧客にはなり得ても、継続するリピーターとなるかどうかは、利用時に「感動」「満足」の達成度によって決まる。リピーターになるように連動させなければ、その日その時だけの利用客つまり一元客になり、常客や顧客にはならない。ここにリスクがある。「感動」「満足」の逆の「不満」を持った客はホテルに対して黙して語らぬまま口コミを通じて他の客への悪しき伝達連鎖も生みかねない。これをリカバーするチャンスがホテル側に与えられる可能性はきわめて低いゆえに、一次利用客をリピーターとして取り込む最初のチャンスを逃さないことが肝要になる。すなわちリピーターを得るか失うかというこのリスクと抱き合わせのチャンスに常時直面する事情がホテルに真剣勝負を強いる。これに習熟することによって、ホテルの部門別垣根は低くならざるを得ず、ホテルマンの技量も鍛えられることになる。そうでなければホテルは存続できない。

これらの戦略上の特性を思考上でも可能にする基礎として、ホテル業界が基本的に「安定的」かつ「統合的」な業界であることを要約しておきたい。無論、ホテル間の競争が激烈なケースもあり、いかなる産業においても水面下の奮闘なくして安定を維持することはできない。安定的、統合的とは安定と統合へのたゆまぬ工夫が必要かつ可能な環境にあるという意味である。一般的にホテルは、経営学原則が求める競争優位性確保のための差別化戦略を多様に展開できる状態にあり、同等のホテルが隣接したような

場合は別として、本来備わっている他分野との連携、そして地域との連携によって差別化を行える環境にある。

4. ホテルへの調査

既述のホテルの一般特性について、私たちの推論がどこまで耐えられるのかをホテルの従業員へのアンケート、インタビューを通じて確かめることとした。特に、既述のような特性を持つホテル業界に従業員として身を置く場合、キャリア経験の発展上に転職が可能であるかどうかについてホテル従業員が意識しているかどうかを調査し、さらにホテルへの就職を希望する学生に対しどのような能力を磨くことを期待しているかを確かめてみた。調査に当たっては、大阪・神戸市内の三つの大型ホテルの計 62 名の従業員の皆様に広くご協力を頂いた。この場で感謝申し上げます。

(1) 転職の可能性

「ホテルでの経験を他業種に利用可能と考えられるか」という質問に対して、「活用できると思う」および「どちらかといえば思う」を含めた回答は次のようになった。

【ホテル勤務経験は他業種で使えると思いますか？】

	勤務年数		計
	15 年以内	15 年以上	
思う	25	28	53
思わない	7	2	9
計	32	30	62

(性別：男性 42 名 女性 20 名)

勤務年数を問わず、圧倒的に肯定的に回答されている。この質問に併せて、「ホテルに勤務してよかったと思うか」も尋ねた結果は次の通り

であり、ホテル勤務を振り返って満足していない従業員も他の業界に使える能力を得たことについて確認している。

【ホテルに勤務してよかったと思いますか？】

	15 年以内	15 年以上	計
思う	26	26	52
思わない	6	4	10

回答者は宿泊、宴会、レストランいずれのカテゴリにも偏っていないが、レストラン関係者に「若干勤務してよかったと思わない」方が目立っている。「勤務してよかった」と思う方が転職しても経験を使えると答えることは当然という私たちの先入観をチェックする目的でこのような質問をした。85%の方が汎用性の高いスキルを身につけたという意識を持たれている。今回の調査先は創立以来の日本法人であり、回答者が今後転職する意図を持っているかどうかは不明であるが、62 人中 13 人が他業種から現在のホテルに転職してきている。ちなみに同クラスの外資系ホテル（神戸市）において、転入転出を含む転職者が総支配人以下かなり多く、ホテル業界では珍しいことではないことを聴取している。

(2) 学生に期待するもの

学生にホテルへの就職をすすめるか、という質問に対する回答は次の通りであった。

【ホテルへの就職をすすめますか？】

	15 年以内	15 年以上	計
すすめる	19	21	40
すすめない	13	9	22

ホテル人勤務してよかったと思う従業員が 85%であったことと比較すると、65%が「すすめる」との回答であり、20%の方が「自分は勤

務してよかったが、他人にはすすめない」ということになる。これについての推論を出す前に、回答者が就職希望の学生にどのような能力を期待しているかを見てみたい。

この質問に当たっては、私たちから具体的に10項目を挙げて複数選択可能とし、さらに追記も自由とした。頻度が高かった5項目は次の通りであった。

【希望学生が身につけるべきこと】

	15年以内	15年以上	計
マナー	23人	18人	41人
外国語	17	20	37
忍耐力	16	14	30
体力	11	13	24
国語力	10	6	16

62人中、66%の方が「マナー」を挙げている。「マナーは就職後に身につけられる」というコメントもあったが、大勢としては事前にマナーを身につけることを求めている。次の「外国語」についても回答者は全員が現在外国人客と接する職種に就いているわけではないが、経験からその必要を感じていることになる。「忍耐力」はほぼ半数の方が挙げている。これは「体力」に比べ、精神的な面を意識していると見る。すなわち顧客への笑顔や丁寧な応対を維持しながらトラブルに対処するなどの局面での忍耐力である。またストレスも相当にあると想像できる。「体力」を挙げた方も少なくない。立ったままで働く場面が多いことを想起すれば理解できる。次に「国語力」であるが、これは並行して追記が多かった「コミュニケーション能力」「一般常識」とほぼ同じ意味を含めたと見たい。従業員同士、顧客への対応という場面において、的確な表現ができなければ現場での問題への即応は難しく、また顧客や外部関係者との会話を弾ませ円滑な関係樹立を図る上では一般教養も

相当に求められるだろう。(ちなみに「ホテルの知識」を事前に必要とした回答はわずか2名であった)

以上を総括すれば、「ホテル従業員は体力知力共に求められる」ということになる。

これらを参考にして、35%の方が「ホテルへの就職をすすめない」と解答した結果について考えてみた。

学生に求める能力の高さを考えれば「こんなに大変だからやめておく方がよい」という解釈に傾きかけるが、「勤務してよかった」という回答が85%あったことは軽視できない。「自分はつらかったからこんな苦勞をして欲しくない」というネガティブなメッセージではないのである。むしろ「これほどにやっている(やってきた)ことに満足であるが、あなた方がその心構えがあるか、ないのならやめておきなさい」と解釈することが妥当であろう。

英語(語学)ができたからといってデスクに座ったままの知的労働に集中することはできない。厨房に入ったからといって顧客との会話が無縁にはならない。とにかく人間対人間が基本の仕事である。その中で多くの顧客、業界従事者との関係を充実させてきたからこそ、「勤務してよかった」という回答になる。しかし、このような満足は勤続期間に比例して体験できるものでもあると想像しやすいが、勤続年数5年以内の若手従業員で「勤務してよかったと思う」と回答した率は82%であり、一概に長い経験者ほど肯定的に解答するとは結論し難い。

今回の調査結果の概要：

- ・ホテルの存続のためには従業員は高度の専門的な技量を求められる
- ・就業経験は他のホテルや業種でも使える
- ・早期から目標とし情報を得られない学生には合格のハードルは高い

5. 総括 - 安定的競争と学習機会

前節にまとめたホテルからの回答の背景には、企業としてのホテルが安定的な経営を継続していることも示唆している。ここでいう「安定」は安泰ではない。過当競争を回避しているという意味であり、水面下の経営努力の内容は本稿では語りきれぬものである。参入や倒産の波が一応収まり、異常な値下げ競争がない現在、ホテル経営者の経営資源の最善の活用努力を前提に今日の日本のホテル産業が存続している、という意味である。将来、新たな衝撃が襲ってこないともかぎらない。闇雲に売上げを増やす、価格を上下させる、顧客を選別する、リストラを行う、経営者が変わる、といった不安定な経営振りでは専門能力を養う余裕もない。しかし、すでに見たようにホテルの従業員には「他社でも使える能力を身につけている」という自信もうかがえる。このような自信の養成、人材養成は環境がめまぐるしく変わる産業では期待できない。この人材養成功こそが日本のホテルの経営を支えており、ホテル業界の安定の証左であると言える。

すなわち、ホテルはその存続のために従業員には厳格なマナーを始め、多様な業務における高度の技能発揮を要求する。このことを忌避してホテルを志望しない学生がいる。しかし、この裏返しとして、ホテルは従業員に一貫して持続的な「学習機会」を提供している。「高度技能の要求」すなわち「競争力の確保」と「高度の学習機会の提供」が両立している産業は他にどれだけあるだろうか。一般にサービス産業において、従業員は消耗品扱いされかねない面がうかがえる。また企業側が訓練機会を提供したくとも、IT産業のように業態の変化が激しい業界、市場が異常な速度で拡大あるいは縮小していく業界ではこれは困難である。ホテルにおいて、業態も市場規模も著しく変わる状況にはない。この安定的競争と従業員の学習機会の充実が並

立している業界・企業がホテルである。

本稿前半での私たちの推論は今回の調査でほぼ確認できた。以上が僅かでもホテルに向けての人材育成と、ホテルを志望する学生への指導の責務を担う方への指針となれば幸いである。学生においては、ホテルに対する過大過小いずれの期待や幻想をも排することが重要であり、ホテルにおかれては、その積極的な面をさらに学生に向けて発信して頂くことを期待したい。

後記

(1) 学生指導に向けて

以上の結果を踏まえながら、最後にホテル志望の学生を教育する上での基本的な方針に触れたい。

まずその前に我が国の歴史上で明治23年(1890年)来日したラフカディオ・ハーン(小泉八雲)の「我が国のその時代の人物評価」を語らねばならない。訪日前の彼の評価では、日本人は非常に野蛮人であり、すぐに怒っては人を切る、また反省時には自らの命には腹を切って詫びると極端なサディスティックで乱暴な国民と思っていた。しかし来てみて驚いたのは「彼らは非常に礼儀正しく、また神仏を敬い、朝晩には挨拶をする。またもっと驚いたのは欧米諸国よりも言語について教育の進歩が見られて文盲は少なく多くの日本人は文字の読み書きが出来る事であった。」そして道德観や修身の教育は、学校でも家庭でも実施している事が常識であると述べている。敬語は元より、尊敬語、謙譲語、丁寧語も駆使する国民だと記述されている。外国人への「もてなし方」では、非常に親切で笑顔を絶やさないのである。

それに反して現代の我が国での日本人気質とはどうであろうか? マスメディアの影響で外資系ホテルのホスピタリティ精神がクレドなどで持て囃されていて、出版物などではこれが最大

評価とまで言われており、経済界では新規ホテルの経営に外資系ホテルの冠を導入する。言わば欧米人へ営業受託を依頼する大企業の経営者が多いのである。言いかえればホテルの経営だけでなく「ホスピタリティ（もてなしの心）」までもが欧米系の方が優れている崇拝主義に落ちているのが現代日本人の気質なのである。その方々へ問いたい。「貴方がたは、欧米各国のホテルへ滞在してどれほどの優秀なもてなしを受けられたのか？」と。

先ほどのハーンの考えている日本人の心構えは「世界でも最優秀のホスピタリティ精神を持った国民ではないか、」いやだったのではないか。忘れ去られたそのDNAは有る筈なのだ。それらが先刻のホテルマンたちのアンケートには十分に書かれてあった。

その最たる証拠に「貴方は、ホテルの職業が他産業にも活用できると思いますか？」という問いには86%の人が「できる」と答えている。その自信は一体どこから来るのか？私自身が解釈すると、それらは「ホテルビジネス内でお客様への規律やマナーは当然であり、本質はホスピタリティ精神を発揮していなければ勤まらない職業である」という確信からである。そして是非に付け加える必要あることは、日本人はホテル利用時に客側に立てば世界のどの国よりも求めるサービスについて高度でハードルが高いということである。（しかし、彼らは海外旅行でそれを求める事を絶対にしない、言わば同国人には厳しく、外国人には極甘の矛盾性があり、差別観を持った国民気質なのである。）

一方、東アジアからの留学生たちは、口ぐちに言う。「日本ほどサービス精神の優れた国は無い、世界一だ」と。「それらを是非に学びたい」とも。

今、学生たちに問いかけて、やって見せる必要なホスピタリティ精神とは？それは、日夜繰り返し広げられるお客様とホテルマンたちのホテル

内の様々な葛藤がある接客事例なのである。事例の検証を解説し解釈させる事が今こそ大学において必要に迫られていると思慮する。

（蒲池）

（2）グローバル化時代に

米国のコーネル大学、スイスのローザンヌ、ラロッシュなど、欧米のホテル専門学校の定評は高い。ルクセンブルクのような裕福な小国にも国立ホテル専門学校がある。専門学校といえど日本では高校に準ずるイメージであるが、欧米のそれは職業専門大学である。高度な実務教育とリベラルアーツ教育が行われ、アジア各国の留学生も学んでいる。それほどに今なお世界のホテル産業では経営・運営の技量の基本的内容が欧米標準となっている。

このことは日本のホテル志望の若者に重要な意味を持つ。一つは、ホテルに就職する若者には汎用性の高い実務技能を持って一つのホテルあるいは日本にかぎらず広くホテル業界で活躍するチャンスがあるということ。

もう一つは、近い将来、欧米の高度職業教育を受けたアジアの人材と競わねばならない可能性があるということである。日本がアジア市場に広く足場を築くほどにホテル業界も広くアジアの人材を求めるようになるだろう。実務体験、マナー、語学力をすでに身につけているアジアの人材と若い日本のホテルマンはいかに競っていくのだろうか。

ここで問われるのは日本の大学の職業教育との関わり方であるが、ホテルに関するかぎりやや楽観的になれる。なぜなら日本のホテルは学習の場を広く提供することと競争力を維持することの間に現時点では矛盾がなく、日本ではホテル自体がホテルスクールになっているからである。日本の独自性を生かしていく対応も可能であり、これは特に旅館に当てはまるだろう。しかし、ホテル産業は例外的である。

グローバル化の進展速度を見るに、大学（特に文系）は職業教育を企業の仕事として外部に放置したままである。「企業の多くは日本の大学教育を信用していない」（北城恪太郎氏。中央教育審議会委員・日本IBM最高顧問）という意見もある（日本経済新聞 2011 年 2 月 21 日）。大学がこのまま安閑としておられるとは思えない。ホテル産業の特殊性を見ながら考えることである。

本稿の作成に当たっては蒲池教授が総支配人を務めておられたリーガロイヤルホテル（「週刊ダイヤモンド」（2011 年 2 月 5 日号）の特集調査で日本のベストホテル第 3 位）はじめ、大阪、神戸のホテルの皆様には多忙の中、アンケートやインタビューに積極的に応じて頂いた。幾重にも感謝申し上げたい。また、蒲池教授には各ホテルとの折衝を主導頂き、全般を通じて逐次経験者としての情報・意見を仰いだ。改めてホテル産業とホテルの人材の奥深さに感じ入っている。

（澤山）

<エッセー：ホスピタリティの解釈>

神戸夙川学院大学観光文化学部教授 蒲池 由雄

(まえがき)

私は、最近つれづれに思うのは、どんな場面でも丁寧な「挨拶」をしなくなった風潮が至極当たり前になったように思います。

たとえば、夫婦の間でも友人同士でも、企業や学校でもまったく見られる風景が無くなりつつあります。

誰でも過去幼少の頃、小学校の1年生になったら教室で先生、お互い同士に「おはようございます」を習った記憶があるはずです。

しかし高学年に進級したらそれをしなくなります。

さらに進学して大学生になったら尚の事、校門にいる守衛さんが毎朝登校する教職員、学生たちへ「おはようございます」と挨拶し敬礼をする際にもそれに返答する様子は、一部の人を除いて大半の学生は素知らぬふりです。

私は、礼儀やマナーへの第1歩は、先ずはこの丁寧な挨拶が出来てこそはじめて完成された社会人の基礎基盤であると信じたいのです。

古来、我が国には、礼に始まり、礼に終わる「武道」があって「礼」すなわち「礼儀作法」の小笠原流派もあります。

日本人は、礼儀やマナーが良いと世界中の人々から賞賛された時代がありました。また、日本人のサービスは世界一だと絶賛されています。

伝統や文化とは、良いものを残し、悪いものは消去するのが歴史だと思います。

しかし、その世界中から絶賛された風潮もこのままだとやがて滅亡しそうです。

なぜならば、大学の3年生が個々に就職活動時に企業の方々への訪問の際に先ずは挨拶から始まるのだがこれがまともにできない、と批評される有り様です。

大学3年生になって急に就職の目的で教育し直すのでは、正直に言うと小手先だけの付け焼刃的育成方法であって日ごろからの行いでは無いので身についていないのが現実なのです。

こんな世情を嘆いているのは私だけでしょうか？考えさせられます。

現代の若者たちの多くは、一般社会人としての基礎教育である、規律、マナーそして人に対する思いやり、優しさが欠落しているようにしばしば見受けられます。これは幼児教育から高校教育に至るまでの人間としての基礎を作る時期に「ゆとり教育」と言われ他人を思いやるという魂の教育をあまり重要視されずその志が大切だという事を何も教わらなかったことに原因があるのかも知れません。

ですから彼らこそ教育で思いやる心を何も教わらなかった被害者と言えるのかも知れません。

そこで文科省でも観光学を教える大学の指導要綱に教育の一環として（カリキュラム）基礎教育に「ホスピタリティの精神」を養える教科を加えるように指導され、それがいわゆる『人間力』を高める教育として推進されています。

それゆえに本学では観光文化学科の教育において4つの基軸柱の1つとして「ホスピタリティの精神」を養える科目も設定されています。

では「ホスピタリティ精神」とは、一体どのように教育をするのでしょうか？

ホスピタリティ精神を和訳すると「もてなしの心」とあります。これを教育として指導するにあたり、お手本にすべき文献、教科書も無いに等しく教える側としてもやっかいな講座でありました。

ところが、気をつけて良く見ると「ホスピタリティの精神」は私たちの身近に豊富に見受けられます。

それは「シティホテル、旅館のおもてなしの心構え」の本質だからです。

ホテル産業では基本理念の基軸としてその事を教えているのです。

どこのホテルの社是にもお客様へは、心からあたたかくお迎えするおもてなしの心構えとしてC S（顧客満足）を高める事を第一と教えています。

ホテル産業では業務の基礎としてお客様からの苦情やお褒めを基としてホスピタリティ理論を完全に理解するまで習得させられます。

そこで私はホテル産業に長年従事してきた数多くの経験から事例の検証（ケース・メソッド）という方法で事例を披露して自らを考えさせ理解させるという独自の講義を本学にて教員就任後、学生たちにおこなってきました。

そして学生からは「ホスピタリティ理論の実践力」のレポート報告を義務付けました。

その中より今回の表題にうってつけの優秀作を4作紹介します。

今後、後進の学生向けの教材としてこれらの優秀作を利用したいと思っています。

（女子学生Aの話）*Aは以下の文章内で「私」

私はランチクルーザーでウエイトレスのアルバイトをしていました。

ある日のこと、いつものようにウエイトレスの仕事をしていた時に

若いお母さんと小さな女の子がやってきました。女の子は車椅子でした。

そのお客様を担当することになりました。

女の子は、にこにこ顔でとってもかわいい子供でした、私は、ふと考えてたまにしかサービスをしないが風船をあげようと思いつき倉庫から持って来てふくらましてその女の子にあげました。

女の子はとても喜んではいやいでました。私はサービスした事をとても良かったと思いました。

その母娘は料理を食べ終え、お礼を言われて明石海峡を見たいので船の屋上へと上げられました。

船は、遊覧を終えて岸壁に到着しました。先ほどの母娘のお母さんが私のところにやってきて「実は、あの子は今入院中で今日は、体の調子が良いので先生から外出の許可がおりたのです、それでランチクルーザーを申しこんだのです、貴女がとても親切にいただいたので、今日は娘も体調良くとても喜んでいます。本当にありがとうございます。」と言われました。私は、恐縮しながら「どちらの病院に入院なのですか？」と伺いましたら同じ神戸市内の病院でした。

そうして数日経ってからごく普通に私は、女の子が入院している病院へアルバイトが終えた日にお見舞いに行きました。女の子はベッドに寝ながら「風船のおねえちゃん」と覚えていてくれました。そして「〇〇は、大きくなったら風船のおねえちゃんみたいに船のウエイトレスになりたい。」と私に言います。「早く良くなっ

て元気になったらまた船に乗ってね。」と私は笑顔で答えました。その時です私の耳元でお母さんが小さな声で「この子は、足が小児性の麻痺で一生涯車椅子でなければならないのですよ。」と耳打ちされたのです。私は大きなショックを受けました。そして涙があふれました。そうしたらまた、女の子は、言うのです「船のウェイトレスさんになりたい、お姉ちゃんみたいになりたい。」と私は、彼女のいじらしさとけなげな気持ちに涙が止まりませんでした。たった一つの風船をあげただけなのにこんなにけなげに感動して喜んでくれて挙句には私のようにになりたいと言ってきて胸がキュンとつまる気持ちでいっぱいでした。その時にふと思い出した事があります。「そうだ大学のホテルの講義でホスピタリティの事例をたくさん聞いていたが、これがホスピタリティ精神なのではないのか」また「ホスピタリティとは？ちょっとした些細な事だが、誰にでもきっかけがあって結果で感動を与えそして自分もそれによって大きな感動をもらえる心なのだろうと」私は、「この事が自分の一生で初めての体験でしたし、また忘れられない感動として大切にこれから自分の人生を生きて行くつもりです。そして大学の学生生活で得た一生涯忘れない講義を得たと思っています。」と結んだレポートでした。

(男子学生Bの話)*Bは以下の文章内で「僕」

僕は、ある日の夜にアルバイトを終えて帰宅すると部屋は真っ暗でいつもいる

お袋は、不在でした。僕は小さい頃から一人っ子として育ち「鍵っ子」でした。成長してから少し不良でした僕はバイクを乗りまわし帰宅はいつも遅いので今夜もいつもの事ながら誰もいない自宅に帰るのは慣れていました。

でもその夜は違っていました。食卓の上に冷えた料理が用意されてその横にメモがありまし

た。お袋からでした「Bちゃんお帰り、母さんはお父さんと今夜は白浜の〇〇温泉ホテル泊ります。今日は結婚25周年記念日なのでね」と書いてありました。僕は「ふーんそうか、親父もお袋も25年も連れ添ったのか」とそんなに気にも留めずに好きなTVで野球を見ながら夕食をとっていました。ひいきのチームはぼろ負けでした。

またふっとお袋のメモが目に入りました。

その時でした、急に大学で「ホテルの授業ではホテルは時を売っている。なぜならば結婚記念日とか誕生日の記念の食事は、その日、その時がそのお客様の一生で大切にされている忘れない一時だからである。」と講義を受けた事を思い出したのです。「そっか、今日は両親にとって忘れられない日なのか？」と

しかし、アルバイトは給料日がまだまだ先で今手持ち金はそんなにありません。

プレゼントも買えません。そうしたら自然に便せんに手紙を書き出しました。もちろん両親宛てに、今までそういった事はしたことがありませんが自然に不思議にきたない字ながら書いている自分がいたのです。

書き終えてその手紙を大事にポケットへ入れてすぐに得意のバイクで一路白浜へ走りしました。随分走りしました、白浜へ着いたのは、深夜でした。白浜は数多くのホテル旅館が建っていて目的のホテルは、コンビニで聞きながらでしたから中々見つかりません。やっと見つけて着いたのは、もう明け方の4:00頃でした。そんな時間でもフロントの係は一人いました。「〇〇夫婦は、泊っていますか？」と問いましたら間違いなく宿泊名簿にありました。フロントの人に訳を言って「明日の朝食時間にその夫婦にこの手紙を渡して欲しい」とお願いをしたら「もう数時間後に日が空けるからロビーのソファで仮眠してご自分で渡したらどうです。」と返答がありましたが、それを断ってホテルから渡して

と再度念を押して今来た道を帰宅しました。

翌朝の両親の朝食は、僕の手紙を呼んで涙、涙で食事にならなかったそうです。

「僕はこの経験で思いました。自然にこうして行動したのは大学でホスピタリティ精神を学んだからだ、最初はホスピタリティ理論なんかチンプンカンプンで単位を取る目的だけで受講しただけだったのに自然に偶然に先生の言葉が頭に浮かんだのは、少しは脳裏に焼き付いていたのです。まだホスピタリティとは？判りませんがこの経験で少しは判ってきたつもりです。4回生の今やっとスタートしたばかりですが、先生ともっと早く出会っていたらもっと早くこんな気持ちになったのかも知れません。僕はホテルに就職しません製薬会社の営業に内定していますがこの出来事は、生涯忘れません。きっとこの体験は社会人になって役立つ事だと思います。先生ありがとうございます。」と結んでいます。

(この話には、後日談があります。Bは卒業後の製薬会社での初任給で大阪の一流ホテルのスイートルーム一泊を両親へプレゼントしたのです)

(女子学生Cの話) *Cは以下の文章内で「私」

私は、少し高級な洋風居酒屋でウェイトレスのアルバイトをしていました。そこは常連客が多くてお客様の顔を覚えるのも仕事の内に入ります。

ある夜の事、良く来る4人連れのお客様がいつもと違った服装でやって来られました。

お客様は礼服姿で「今日の昼は、友人の披露宴だったのや」と言われました。私は「おめでとうございます。」と言ってテーブルへ案内しました。

私の担当卓のお客様になりました。少し酔って

おられましたが4人共お昼の結婚式の話題に夢中でした。

私は、店長に相談しました。「今日は、お祝いに酔っておられるから何かお店からお祝いのプレゼントをしたらどうですか？」と店長は、しばらく考えて

「そうだ、デザートに花火の小細工をしてサプライズをしてあげようか」と

私は、「それはグッドアイデアですね。」と言っていよいよデザートをサーブする時がきました。そのテーブルの天井の照明を落として大きなブランデーグラスにアイスクリームやフルーツのデザートに4本の線香花火に点火してパチパチと音をさせて4つお客様へ持って行きました。4人のお客様は歓声を上げて手を叩いて喜ばれました。口々に「ありがとう、サンキュウ、サンキュウ」とお礼を言われて帰り際には、「今日は、昼も夜も良い日やった。良い思い出になった。」とお礼を何度も言われました。

私は、大学でのホテルの授業で「ホテルの誕生日のお祝い、結婚記念日のお祝いなどの事例を色々聞いていましたのでホテルだけでなくこうやってどこでも出来るのなのだ、そして大切なのは人がなにげなく話をした事を聞いてそれを問題意識としてとらえてさりげなくサプライズを起こす事が人への感動を起こすのだ、これがホスピタリティ精神なのかな？そして大学での授業でマニュアル+アルファのアルファ部分が人への優しさであり思いやりでそれを実行出来た自分をとても誇らしく感じました。お金をかけずに少しのアイデアでも人は忘れない大きな感動を持ち、与えた方の私も他人の喜んでる姿から同じ大きい感動を覚えて得る事がホスピタリティだと思います。」

その後4人のお客様は、度々来館されて来る度に「やあ、あの日はありがとう。」と笑顔で言っています。私にとっては忘れられない思い出です。

(男子学生Dの話) *Dは以下の文章内で「僕」

僕はパチンコ屋でアルバイトをしていました。1年生からやっていて3年生になるまで続けているのでベテランになりアルバイトのリーダー役にもなっていました。

授業の合間ですがたまには朝10:00の開店時間からも勤務します。

ある日の10:00開店前の事です、早朝から常連のお客様は扉の前に行列ができます。その中の一人の中年の婦人は、いつもつばの大きな帽子とサングラス、そして真夏でも二の腕が隠れる長い手袋をしておられるのでつい顔なじみなので「〇〇さんは、いつも帽子、サングラス、手袋ですがなぜですか？顔を隠さなくてもお綺麗なのに」と訊ねましたらその方は小さな声で「あのね、これは理由があるの。」

僕は「理由って何ですか？」と聞いたら「君は誠実そうだから言うけれど、実は私は白血病で、もうそんなに長生きできないのよ」と言われた。僕は大きなショックを受けて「つまらない質問をしてすみません」と言いました。

「いいの、いいの君は誠実そうだから」と言われて少し救われた気持ちになりました。その後数週間が経ちました、ある日の10:00前にその方が相変わらず並んでおられましたが、いつもと違ってにこにこ顔でした。

「何か嬉しい事があったのですか？」の問いに「今日私は、誕生日なの」との返事でした。僕は、その方が長生きに対して他の人と違って1年、1年がとても大切な事だと知っています。ですから誕生日は、特別な日なのです。

それを知った僕は「何か僕にでもできる事がないかな」と考えました。店長に「〇〇さんは、今日誕生日ですが常連さんですし何かできませんか？」ともちかけてみました。店長はしばらく考えて「そうだ、君らアルバイトでお祝いの

寄せ書きをしたらどうだ」「文具屋で色紙を買ってこい、そしてアルバイトの君がリーダーで今日のアルバイト3名の4人でそれを書いて〇〇さんへおめでとうと言ってお渡ししたらどうだ。」すごく良いアイデアでした。すぐに行って色紙の真ん中に〇〇さんお誕生日おめでとうございます、と書いて僕たち4人がその周囲にメッセージを書いて署名し寄せ書きが出来ました。完成したのでパチンコに夢中になっている〇〇さんを4人で取り囲みリーダーの僕が「おめでとうございます。」と言って色紙をお渡ししました。その時です、おそらく全国のパチンコ屋でも前代未聞の出来事だと思いますが僕たちは自然に「ハッピーバースデー」の歌を歌いだしたのです。

〇〇さんは、振り向いて立ち上がり「ありがとう、ありがとう」と涙声でした。もう両ほほは涙、涙であふれていました。それを見た僕も自然に心が熱くなって鼻がつんと目には涙があふれてきました。歌が終わったら〇〇さんは立ちあがり僕たち一人一人の手を握って「一生忘れない日になりました。本当にありがとう」と言われました。実は、それ以外にもまた突然サプライズが起こったのです。周囲のお客様がそれを見ていたのを忘れていましたが、歌が終わった瞬間に周囲のお客様からパチパチと自然に拍手が起こったのです。この出来事は、すぐ傍に立っていた店長も加わって大きな拍手になり〇〇さんへは、周囲の方からも拍手のお誕生日の祝福になりました。

「この自然な行動は、僕の大学での授業でホテルの誕生日の事例を先生から聞いていたことがきっかけなのです。先生からホテルは時を売っている。誕生日や結婚記念日などは、その方の一生でかけがえのない日、時なのである。」が頭に焼き付いていました。先生『ホスピタリティ』とは、こんな事なのではないでしょうか？僕はこの事を自分の人生でも生かしていきます、

きっと社会人になったら役立つ事と確信しました。先生には感謝しています、ありがとうございました。」このレポートを読んだ教員の私は、思わず涙しました。

この大学生の4話のレポート（実話）から私は大いに学びました。授業ではホテルマンたちの本当にあった事例の検証を解説する講義を実施しています。それを聞いていた今まで何も教わらないので何も考えなかった学生達がその彼らが何かを感じ自然にふるまった行動の力で、他人（ここではお客様）へ大きな感動を与えて嬉しい涙になりました。また彼ら自身も大きく感受し感激し結果的に単なる良い事をしたのではなく、その喜びを一生涯忘れないで心に刻みこむその事こそ「**ホスピタリティ精神の目覚め**」だと思わされたのです。

他人のふとした言葉や行いをやり過ごすことなく「気遣い、心遣い、気配り、心配り」の心を持って大きな感動を人に与えお互いに喜ばれ、喜ぶ新発見をして大きく成長するのです。

「道徳、修身、教養」を頭ごなしに押し付ける事なく、また、（男子学生Bの話）にあった事例のような「両親へ孝行しなさい」と言わなくても彼らは自然に新発見をして喜んで行動へ移すのです。

結論としてこれらの出来事は、どの大学生の身の周りにも起こっている出来事でありそれを気付かせる教育こそ「真のホスピタリティ精神の実践学」育成の源と思わされました。

4人の学生に対して「拍手」そして「感謝」

私は、この4人の事例のようにホテルのホスピタリティの実例を授業内にて取り入れています。今後彼らのような学生たちが続々と現れていくことを大いに期待しています。

完

* 後日談；4人の男女学生たちは、大学内の講義では、私への言動が「今風に言う」と最初は

ため口でした。」しかしこれらのレポート提出後には、言動もすっかり変わり今では、私に対して「**正式な敬語**」で話すように成長したのです。このエッセーは今後続編を積み重ねていく所存です。

（平成22年11月29日）

